

4

桜井 光

原作 TYPE-MOON

イラスト 中原

# Fate Prototype

蒼 銀 の フ ラ グ メ ン ツ

# Table of Contents

[表紙](#)

[目次](#)

[Prologue](#)

[ACT-1](#)

[ACT-2](#)

[ACT-3](#)

[ACT-4](#)

[ACT-5](#)

[Women](#)

[後書き](#)

[奥付](#)





4

桜井 光  
原作 TYPE-MOON  
イラスト 中原

# Fate Prototype

蒼銀のフラグメンツ

角川書店

# Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ 4

文／桜井 光

イラスト／中原

原作／TYPE-MOON



角川 文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。





# Fate Prototype

蒼銀のフラグメンツ

4

桜井 光

原作 TYPE-MOON

イラスト 中原





私服デザインラフ



Personal Data  
 一人称：俺  
 サーヴァント階位：第三位  
 真名：アーラシュ  
 スキル：対魔力、単独行動、千里眼、頑健など  
 宝具：流星一条（ステラ）

Status  
 耐久 A  
 敏捷 B+  
 筋力 B  
 宝具 B++  
 幸運 D  
 魔力 E

サーヴァント階位第三位、アーチャー。古代ペルシャにおける救世の英雄。神代の神祕を色濃く残した戦士。西アジアでの神代最後の王とも呼ばれるマヌーチェフル王の臣下であり、長きに渡るペルシャ・トゥルク間の戦争を終結させたと伝えられる。両国の民に平穏と安寧を与えた勇者であり、現在でも多くの人々に深く愛され続けている英雄である。その渾身の一射は大地さえ割るが――。



E l z a · S a i j o

# エルザ・ 西条

風の元素変換魔術に長けた魔術師。  
二十代の女性。年齢より若く見える。  
日独のハーフであり、国籍は日本とド  
イツ双方で有している。  
一般的な魔術師と違い世俗を超越した  
気配は薄い。表向きの職業はカメラマン。  
我が子を何らかの理由で失った後、某  
紛争国で血塗られた光景を目の当たりに  
し、その衝撃から「すべての母と子が救  
われる世界」を聖杯に願った。  
日本とドイツ双方の家庭料理が得意。



キャラクター  
デザインラフ案



Personal Data

一人称：あたし  
マスター階梯：第五位  
魔術系統：元素変換魔術  
魔術回路／質：C  
魔術回路／量：B  
魔術回路／編成：正常



# Servant Lancer

## ランサー

サーヴァント階位第四位、ランサー。  
北欧神話に語られる悲劇の戦乙女。英雄を求めてしまう本来的機能と、想い人を愛した人間の女として死した記憶と精神、そしてマスターから強制される命令、という三要素によって苦悩へと陥った。二種の宝具を有しての現界だったが、いくつかの要因から第二宝具は使用されることなく、代わりに第三宝具に等しい力を解放する。



キャラクターデザイン：三輪士郎



Personal Data

一人称：私  
サーヴァント階位：第四位  
真名：ブリュンヒルデ  
スキル：魔力放出(炎)、騎乗、原初のルーン、神性  
宝具：わたしの冥府への旅  
(ブリュンヒルデ・コメディア)  
死がふたりを分かちまで  
(ブリュンヒルデ・ロマンシア)

Status

筋力 B+  
耐久 A  
敏捷 A  
宝具 A  
幸運 E  
魔力 C



# N i g e l S a w a r d

## ナイジェル・セイワード

英国出身の魔術師。時計塔所屬。鍊金術の腕は超一流。天才とさえ呼べる。魔術系統としての鍊金術をベースとしながらも、自らの起源である『執着』の特性を利用した独自の魔術（魔術基盤）を成立させることで、特に人の感情を支配する霊薬については最高峰のものを生み出す。故郷英国にあってさえ、こと「人間支配・操作」に於いては無二の成果を誇る。ランサーの宝具を最大限に活用するため、特製の霊薬を作製するが……。

Personal Data  
一人称：私  
マスター階梯：第二位  
魔術系統：鍊金術をベースとした独自魔術  
魔術回路／質：B  
魔術回路／量：B  
魔術回路／編成：正常（起源の現出に伴い多少の変調あり）

キャラクター  
デザインラフ案



# Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ

4

## 目次 CONTENTS

### Dear My Hero

Prologue	13
ACT-1	55
ACT-2	97
ACT-3	139
ACT-4	181
ACT-5	223

### Special ACT

Women	265
後書き	301



# 目次

Dear My Hero

[Prologue](#)

[ACT-1](#)

[ACT-2](#)

[ACT-3](#)

[ACT-4](#)

[ACT-5](#)

Special ACT

[Women](#)

[後書き](#)



# Dear My Hero Prologue



西暦一九九九年、二月某日。

東京都某区、薄暗がりに満ちた地下聖堂にて。

圧倒的だった――

頑強と剛力は十二分に予想されたものではあったろう。

けれどまさか、ここまで桁けた違ちがいの怪物である等とは誰が予想し得るものか。

二メートルを優に超す分厚い体たい軀くを有した是これなる英霊サーヴァント、鋼鉄が如き肉体を備えた凶暴の塊は、決して鈍重の巨怪ではなかった。ならば何か。地下聖堂の高い高い天井にその影を伸ばして低く呻うめく、この、狂気に瞳ひとみを赫あかく輝かせるものは。

超常の薙りよかりよくによって破壊をもたらす殺戮さつりくだ。

凄絶せいぜつなまでに精確俊敏の戦闘を行う機械だ。

今まさに東京にて執り行われつつある第二の聖杯戦争に於において、燦然さんぜんと輝く第二位の階位クラスを有する狂の英霊バーサーカーとして現界した英雄だ。人の夢見るものだ。人ならざる力を振るうものだ。しかも、並のそれではなく。

たとえば怪物の一匹を倒して人々を救う逸話や物語の英雄など目ではない。

果たして――

この華奢きゃしゃな少女は、その真名を理解し得るだろうか。

不気味な陰影を湛たたえた地下聖堂で立ち尽くすには相応ふさわしくない、純真無垢むくの気配。

否。世界へと刻み込まれた大型の魔術基盤の中で、よりもよって“黒魔術”を専門に接続しているという経歴プロフィールからすれば、純真や無垢と言った言葉は似合うまい。ただの一度たりとも、血の生贄いけにえを用いたことがないとしても。

ただ、それでも。

純粹な何かではあるのかもしれない。

麗しくも透き通った瞳を眼鏡で覆った、この極東の都市で戦い続ける少女。

第二の聖杯戦争へと挑む魔術師マスターのひとりにして、八年前、第一の聖杯戦争を見事に勝ち抜きながらも聖杯を得ることはなかったとされる天才魔術師の妹。

その名は――

沙さ条じょう綾あや香か。

「……セイバー！」

少女は、自らのサーヴァントへと呼び掛ける。

最強である筈はずの彼へ。

あらゆる敵を倒し得る、紛まごうことなき第一位たる剣の英霊セイバーたる彼へと。

悲痛な呼び声だった。届くか、その声は？

端的に状況を表現するのであれば、少女の予想を現実が上回ったのだ。

結果的に、敵を過小評価した。

幾度もの戦いで必ず勝利してきた彼の存在を、無敵、であると誤認したのだ。

確かにセイバーは強力だ。蒼銀そうぎんに煌きらめく魔力の鎧よろいは多くの攻撃に耐え、風の魔力を溜ため込んで不可視と化した武器は多くの敵を切り裂くだろう。見えざる剣を操る英霊。黄金を纏まとう弓の英霊アーチャーあたりの言葉を借りれば、聖剣使い。その剣が真名解放と共に姿を見せるその時には、最大最強の力を敵は見ることになるだろう。

ただし。存分に彼が、セイバーとしての能力を発揮できたならば、だ。

超高速の鋼鉄にも等しい巨軀のバーサーカーをも、たちまち両断した可能性もある。

だが。そうはならなかった。

地の利は、少女とセイバーにとってマイナスに働いた。

地下聖堂には多重の罠わなが仕掛けられていたのだ。

常人の目では視認できるかどうか、僅わずかに煌めく魔力光は入念に練り込まれた結界の存在を示している。最高ランクの対魔力スキルを有した英霊を一撃でどうするものでもないが、ほんの僅かな怯ひるみ程度を誘うことならば叶かなうだろう。そして、そのコンマ一秒にも満たない時間こそが、超常にして神話の再臨たる英霊同士の戦いでは明暗を分ける。

初撃同士が激突した時点では、まだ、どちらにも優劣はなかった。

不可視の剣と、巨大な石せき斧ふ。

力は拮抗きっこう。

衝撃で互いに武器を弾はじかれながら、瞬時に体勢を整え直してからの高速戦闘。

事前の魔術によって視覚を強化しておかなければ、少女はこの時点で置いて行かれてしまっていたに違いない。ただの人間の目には留まらない、超高速の世界だ。最新のハイスピード・カメラの類たぐいであれば捉とらえきれるか？ それも難しいだろう。

凄すさまじい風圧と、地下聖堂の石壁がひとりで大きく破壊されていくさま。

一撃ごとに大型車しゃ輻りょうの激突や飛行機落下をも超える運動エネルギーが繰り出され、正確に、精確に、死そのものに等しいそれらの攻撃を防ぎ、弾き、躲かわし、時には自らのマスターを守り、時には敵方のマスターを狙い――

究極の数秒。究極の拮抗。

英霊二騎の実力は、この時点ではほぼ同格。

ならば勝敗を分けたのは？

まずは先述した通り、地の利。結界の類。更に言ってしまうと、マスターである少女の油断に他ならない。敵陣へ乗り込むにあたって罍の存在を想定していたにも関わらず、軽視した。セイバーは負けない、と、思ってしまった。

彼を信じた？

少し違う。過信したのだ。

自分たちが騎の英霊ライダーや術の英霊キャスターを倒したという経験を。

聖杯戦争に於いて、本来、絶対の有利や絶対の優勢などないというのに！

「く……はッ……」

真紅が石畳へと落ちる。

セイバーの額を伝って石畳へと流れてゆくのは、仮初めの肉体の命を繋つなぐもの。血。魔力。

だが、彼ばかりがそれを流しているのではない。

バーサーカーもまた、巨軀から大量の魔力を鮮血と共に吹き出してはいる。拮抗が崩れた瞬間にとどめの一撃を叩たたき込んだのは、どちらか片方ではなく、両者共にだ。故にセイバーは吹き飛ばされて石壁へと強く強く叩き付けられ、同時にバーサーカーは左腕を肩ごと――殆ほとんど左胸にかかる部分から斬り飛ばされていた。

左胸。英霊にとっての霊核にあたる心臓も大きく損傷しているだろう。

まず間違いなく致命の一撃だ。

すなわち技量的には、セイバーが辛うじて勝ちを拾ったか。

否。違う。

セイバーと少女はこの戦いに敗北したのだ。

見るがいい。心臓を断たれたはずの巨体は決して倒れることがない。バーサーカーは、魔力が込められたか如き白い息を、今も、激しく口元から吹き出しながら佇たたずん



でいる。死んでいない。致命傷を受けようが、油断なく、倒れた状態のセイバーを睨に  
らみ付けている。

これこそ、勝敗を分けた第二の理由。

少女は敵を知らなかった。

彼以上の脅威たる大英雄が人類史に存在し得る可能性について失念し、ただまっすぐ  
に、不死不敗を誇る怪物へと立ち向かってしまった。

或あるいは事前にそれを察知できていたなら、対策も叶ったかもしれない。

だが、少女は気付かなかった。

そして。こうして敵の能力が露呈した今も、対応叶わず。

姉のような天才であれば——黒魔術やルーン魔術、死霊魔術、宝石魔術や元素変換魔術  
のように開示された魔術基盤のみならず、強力な魔術師や古い家系が独自に組み上げる  
類の魔術基盤であろうと瞬時に構成・接続してみせる上に、殆ど魔法のような領域の魔  
術までをも行使する、あの姉であったなら——対処できたのかもしれないが。

もう、姉はいない。

どこにも。

八年前のあの日、第一の聖杯戦争の最中に殺されて——

「セイバーを殺す気はありません。彼は獣の真相を知る、唯一の証人ですから」

男が言った。硬い足音を響かせながら。

瘦身そうしん長軀の男だった。

彫りの深い男だった。

バーサーカーのマスターだ。

二騎の激突の最中、地下聖堂の奥から微み塵じんも動くことなく眺めていた男だ。

戦闘に決着が付いたのを確認してから、男は、やっと声を発していた。悠然と、嫌味  
な程にゆっくりと歩きながらセイバーへと接近していく。

「お嬢さん、アナタ次第で生かしてオキマシヨウ」

いつかの時と同じ片言の日本語。

男が指を鳴らす。応じて、片腕を切り離された状態のバーサーカーが僅かな痛みも感  
じていないような素振りで右手を伸ばして、セイバーの体を持ち上げる。

「何を……」

「おっと、動かないでクダサイ。バーサーカーがアナタを殺しますよ？」

言われなくとも少女には分かっているだろうに、わざわざ男は口にする。

少女は動けない。ただ、視線を叩き付けるだけだ。

巨大な右手によって持ち上げられたセイバーの肉体が、聖堂の祭壇へと設置される。

この地下聖堂は、人類の罪業を背負って昇天した救世主とその父たる唯一の神を奉じる教えに基づくものである筈なのに、祭壇へ横たえられたセイバーの姿は——まるで、中南米神話に於ける生贄のようにも見えてしまう。

実際のところ贄ではあるのだ。

少なくとも、バーサーカーの主人たるこの男にとっては。

「こちらへどうぞ、サジョウ・アヤカ」

恭しく、男は一礼してみせる。

少女は抗あらがうことができない。

英霊を従えた魔術師に接近することが、どれほどの危険を伴うのだとしても。

見捨てられない。絶対に、ここで逃げたりはしない。そういう表情だった。

自分の未熟のために倒れてしまった最強の英霊を、ただ一度の敗北だけで見限ってしまうのは惜しい。とか。そういう感情、そういう思考だろうか？

それとも——

もっと別の、もっと人間と人間が交わし合うような？

「そう、こちらへ。もう一步デス。あともう少し。ええ、そのまま」

「……」

「そんなに警戒しないでクダサイ。ほら、恐くない。恐くナーイ……大丈夫、心配は不要デス。殺しはしません。言ったでしょう？」





薄く水が張り巡らされた石畳の上を、男が歩いてくる。

人間というよりも、最も早はや、獲物を前に舌なめずりする肉食獣を思わせる。

もしくは、犠牲者を前に同じ行為をする殺人鬼の類。そう、背筋に嫌なものが走るのを少女が感じ取った直後に、男は行動に移っていた。

「動かなければ」

長い右手が少女へと伸びる。

「殺しはしない！」

咄とっ嗟さに、後ずさろうとしても遅い。間に合わない。

学校指定のリボンごと、少女の制服の胸元が引きちぎられる！

「！」

驚きで少女が息を吐く。言葉にはならない。

きっと、理解しているのだろう。男の行為が意味するところを。服を剥はいで肌を晒さらされるのは陵辱を目的としたものではなく、女としてではなく——魔術師として、否、英霊を伴って聖杯戦争に参加するマスターに対してこそその行為に違いない。

少女の胸元、白い肌に浮かぶ一枚羽の黒色模様。

令呪。

英霊との繋がりを示す唯一のもの。

そこへ、男は右手を翳かざす。

何らかの特殊な術式が発動する気配があった。魔術だ。日本語でも英語でもない言語を男が高らかに述べる。少女の肉体に高重力にも似た負荷が掛かって、唇から苦しげな息が漏れていた。

石畳に薄く満ちる水に、巨大な波紋が発生する。

そして、激しい魔力光。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

哄こう笑しよう。耳障りなまでに高らかに、男が笑う。嗤わらう。

術式に伴う重圧に耐えるべく瞼まぶたを閉じていた少女には、見えなかっただろう。

自分の胸元の令呪が消えていくさまを。一枚羽の令呪が浮かび上がり、そのまま、男の剥き出しになった胸へと吸い込まれていくさまを。

少女が目にしたのは術式の工程すべてが終わった後——

激しい脱力感と疲労。その場にへたり込みながら、少女は、眼鏡のレンズ越しに見る。

一枚羽の令呪が、何処にあるのか。

自分の胸。

違う。もう、そこには何もない。本来あるべき場所から消えてしまった。

「ヒャーハハハハハハハハハハハハハハハ！」

まだ、聞こえている。

笑う声。嗤う声。愚かで無力な少女を嘲あざける、男の声が。

祭壇の前で振り返るその姿、その胸元にこそ一枚羽の令呪はあった。すなわち、第二の聖杯戦争に於いても第一位として現界した、剣の英霊との契約を示す証あかし！

「ヒャヒャヒャ！セイバーのマスター権！確かにいただきました！」

突き付けられる言葉は、剣のように鋭く少女の胸を抉えぐる。

それを理解しているのだろう。

打って変わって重々しく、静かに、男は告げる。

まるで出会った時と何ひとつ変わらない、紳士然とした神父といった声色と口調で。

「.....ご協力感謝しますよ、お嬢さん」

再びの一礼。

深く、深く、頭が床に付くのではないかと思うくらいに礼をして、更に一言。

「ですが、セイバーは色々と故障しているので、一度、作り直さないといけません」

「え.....？」

冷たく濡れた石床に座り込んだまま、少女が呆然ぼうぜんと顔を上げる。

ああ、笑っている。

すべてを奪われた少女を見下ろしながら、男は明らかなまでに愉たのしんでいた。

絶望を。諦念ていねんを。後悔を。そういう類の感情を少女が味わえば良いのだと、味わうべきであるのだと、心の底から思っている残酷な顔をしていた。見る者が見れば、邪悪、と断言するだろう怖おぞ気けのする笑顔ではあった。

満面の笑みのままで、男は、こう続けた。

「潰つぶしなさい、バーサーカー」

冷酷に。

残酷に。

最後の希望を打ち砕くべく、言葉がもたらされる。  
そして、少女は――



きみは、諦めきらない。  
僕にはそれが分かっていた。  
信じていた、と言い換えても良いかもしれないね。  
少し前のきみだったらどうだろう。  
諦めて、俯うつむいてしまったと思うかい？  
そうだろうね。  
僕と出会った――正確には再会したばかりのきみは、ひどく怯おびえた臆おく病びょう  
な子になっていて、多くのものを怖がっていたから。  
でも。  
この瞬間は違う。  
「この――騙だましたわね！」  
きみの声が聞こえる。綾香。  
地下聖堂の祭壇に横たわった僕の耳に。瞼を開けられなくても、分かるよ。綾香。  
きみは絶望しない。たとえ絶望したとしても、そうだ。諦めない。  
黒魔術が繰り出される。風を切るこの音は、加工された鴉からすの羽による魔弾かな  
。  
きみの得意技だ。美沙夜みさやが言っていたように、きみには元素変換の魔術の類こ  
そが合っているような気もするけれど、ともかく。  
きみは抵抗している。  
でも、それだけでは駄目だ。  
僕は魔術に詳しくはないけれど、あれは――  
「対魔術……！」



「ハイ、ワタシ、用心深いですから。魔法陣を常に移動させないと、恐くてトテモ動けないのデース」

気配だけではあっても察することはできる。

敵は魔術を強制的に無効化キャンセルしている。言葉の通り、とても強力な魔法陣による結界なんだろう。それを常に移動させている。ならば、剣と鎧で戦う戦場で要塞ようさいを纏いながら歩くようなもの。魔術の戦いによる突破は特に難しい。

サーヴァント級の対魔術・対魔力か。

最高ランクの僕と同格と言ってもいいかもしれない。

「ああ、それと」声がぶれる。移動したのか？「ええ、ええ、楽にしてあげマシヨウ。こちらとしても、もう用はないですから……死んでくださいネ」

「そんなことだろうと思ったけど！」

強い返答だ。

ああ、きみが視線を外すことなく立ち向かっているのが分かる。

「ワタシは平和的解決を望んでいます、ってのが口癖じゃなかったっけ。あなた、教会のひとでしょう？」

「ハ」

呼吸音と発音が混ざったような、一音が響く。

まだ。嗤う声。

「ハハハ。ヒィ——ヤハハハハハハハ！ ああ、あれは嘘デース！ ワタシ、東洋人大嫌いですから！ 特に日本人とか虫むし酸ずが走りマース！」

残酷な声だった。

虫酸が走るのはこちらの方だ。これ以上、好きにはさせない。

テンプル騎士団から派遣されたという監視役、その実はマスター階梯一位とも目されるあの男、サンクレイド・ファーン。彼と綾香きみとでは、まだまだ勝負にはならないだろう。

だから——

さあ。起き上がれ、僕よ。お前は何者だ？

何のためにここにいる。

何を願い、何を想って、お前はベディヴィエールにあの言葉を告げたのか。

大英雄の一撃をまともに食らった程度で何だというんだ。

サーヴァントとしての主従契約を移し替えされている、それがどうした。

あらゆるものと戦って、打ち砕いてきただろう。竜も、獣も、騎士も、卑王さえも。

五体のすべてが崩壊寸前なまでに痛めつけられても、霊核は無事だ。

未いまだ、あの男サンクレイドから魔力供給は行われてはいないから回復も見込めない。  
。

確かに、そう、絶対の危機ではあるのだろう。

(けれどきつと、きみは。……沙条綾香は諦めない)

僕は内心で呟つぶやく。

僕は信じている。

きみは、愛まな歌かのように鮮やかに聖杯戦争を掌中にすることは叶うまい。

それでも――

防戦一方だとしても。この場は逃走するだけで精一杯なのだとしても。

きみは踏み留とどまるだろう。過程の途中で、最後の一線を退ひくことは決してない。  
。

ならば僕も同じようにするまでだ。マスター。

令呪という物理的な結び付きなどなくても、僕が剣を捧ささげる淑女レディはきみだ

。

「……綾、香」

僕は、動かないはずの手を伸ばす。

実体化させた聖剣の柄つかを掴つかむ。

まだ、戦えるだろう？ 剣を振るうくらいはできるだろう？

反撃の機会はいずれ訪れる。

ああ、そうとも。できるさ、アーサー・ペンドラゴン！

聖杯戦争に於ける窮地はこれが初めての経験じゃない。

あの時のように助力を得る可能性は低くとも、あの時のように抗ってみせよう。

圧倒的なまでに強大なるものに。立ちはだかる力そのものに。

全霊を懸けて、斃たおすべきものに――



——そして、時は遡さかのぼる。

八年前。

西暦一九九一年。

史上初の聖杯戦争の発生から数日。

七人七騎の戦いが今まさに繰り広げられているさなか。

狂の英霊が第一の脱落者として消滅した後。

突如として、東京湾上に超大型の複合神殿体が出現した頃のこと。

神話の再現。

伝説の降臨。

現実の超越。

——第一の聖杯戦争に於ける“最大の決戦”が行われんとする、その時。





Fate/Prototype  
蒼銀のフラグメンツ

『Dear My Hero』



西暦一九九一年、二月某日。深夜。  
東京湾上――

是ほどまでの荘厳の具現を目にするのは、果たしていつ以来になるのか。  
古代ローマ帝国の属領としてブリテン東部に存在した衛星都市ロンディニウムにも、  
ここまで巨大な神殿は存在していなかった。

彼セイバーは、戦慄せんりつと共に僅かに想う。

深夜の暗い海に偉容を顕あらわした、超大なる魔力集積体。

目下建造中であつたという東京湾横断通路の連結地点たる人工島を踏み潰す形であつ  
さりと破壊して実体化したそれは、新たな島か、もしくは海上に聳そびえる威風堂々の  
王城か、異形の大おお砦とりでか。報道の類では「東京湾上に発生した蜃しん気き楼ろ  
う」という見解に落ち着いているようだが、そのまま情報操作が維持できるかは今後次  
第だろう。

複数の巨大神殿によって構成された巨大構造体。

正確には、全長数キロメートルを超す超大型複合神殿体とでも言うべきか。

ただ目にするだけで、巨おおいなるものに対する畏怖いふをさえ呼び起こすライダー  
の要塞に足を踏み入れるのはさぞや困難を極めるかと思われたが、侵入自体は、呆あつ  
気けないほどに容易ではあつた。

セイバーは身を以もって知る。

自分は神殿の主あるじによって招かれたのだと。

マスターである少女——沙条愛歌と晴はる海み埠ふ頭とうにて別れた後、約一〇キロメートルの海上を全力疾走して複合神殿へと至った時には、何の妨害もなかった。三み浦うら半島側に面して大きく開かれた大回廊は、まるで自分を迎え入れているかのようでもあって。

招かれざる者であればどう対処されるのかは——

どこまでも広大な、巨柱立ち並ぶ大回廊を目にした瞬間に理解した。

「……！」

目も眩くらむほどの閃光せんこう。

耳をつんざく轟音ごうおん。

それは、現実を無理矢理に書き換え得る驚異の固有結界が発揮する威力であるのか。

英霊として現界したが故に所有する切り札たる宝具、その神秘が放つ力であるのか。

もしくは——

古代エジプト最強の大英雄にして神王を自ら名乗る英霊、ライダー・オジマンディアスなればこそ、古き神々に許された暴威とでも言うべきか。

いずれも正しく、いずれも足りず。

見よ。光を。

——中天より此处ここへと降り立った太陽の怒りを。

重低音を響かせながら展開・変形した主神殿主砲部より投射される、灼しやく熱ねつの——神罰！

果たしてそれは何へと向けられたものであるのか。

地上へか。否、否。

約定の通りに剣の英霊が訪れた以上、神王は東京を未だ灼やき尽くすまい。

「余の言は絶対である」という言葉は嘘偽りではないだろう。

ならば、何だ。

海だ。波間に漂う哀れなる鋼鉄の塊へだ。

セイバーは鋭い視覚によって着弾の寸前にすべてを認識し、把握していた。

すなわちは、東京湾上に出現した是なる不明の巨大構造体に対してトマホーク巡航ミサイルによる数度の射撃を行った米海軍太平洋艦隊のタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦——現代文明最強の洋上防空戦闘力を誇るイージスシステム、ギリシャ神話最強の“盾”の名を冠する艦載武器機構を備えた戦艦とその僚艦数隻が、横よこ須す賀か沖にて、魔力光による巨大な奔流にミサイルごと呑のみ込まれるさまを。

何故、と問い掛ける意味はない。

中東へと向けて移動する筈の米軍艦船群が何を以てミサイル攻撃を行ったのかは定かではないが、理由はどうあれ、その行為は許されなかったのだ。大神殿にて待つとセイバーへ告げた光輝の英霊は、残る英霊のうち三騎をのみ招いた。つまり、招しょう聘へいを受けざる者が剣であれ魔術であれ、現代兵器であれ、ひとたび敵対の意図を示したならば——

死、あるのみ。

地上に光臨果たした太陽によって完全蒸発の最後を迎えるばかり。

「ライダー！ 貴様、本当に……！」

もう遅い。

死の光は、もう撃ち放たれてしまった。

戦いよりも先に、聖杯戦争とは関わりのない数多あまたの命が奪われた。

神王オジマンディアスは、当世の人々が犠牲となる可能性を行動のみで示したのだ。

「真に、東京を灰燼かいじんに帰すつもりなのか」

眩きながら、聖剣を握る手に力が込められていた。

この上ない程に。

当世に現界してから、最も、彼は憤っていたのかもしれない。

神罰を下すと宣のたまうライダーに対して——

ではなく、或いは。

「邪魔を……するな」

静かに告げる。

刃の冷ややかさを伴った声を響かせる。意識しての行為ではない。

半ば以上は無意識に、言葉と同じ温度の視線。直径一〇メートル以上はある回廊の柱から顔を覗のぞかせた二体の巨獣を睨ねめ付ける。見覚えのある形態フォルム。四つ足の捕食獣。ある種の神聖を伴って現れる、人頭獅子身しんにして怪異なるもの。



魔獣。否。

幻獣。否。

神獣。神王の宝具のひとつとして敵対者を屠ほふる、熱砂の獅身獣スフィンクス。

紛うことなき神代の生物にして、数多の伝説を有する劫ごう火かと暴風の概念の化身。

それが二体、同時とは。並の魔術師であれば神秘のあまりの巨大さに感嘆と興奮冷めやらず、喝采かっさいでもするところか。直後にその生命は失われているだろうが。英雄の剣よりも迅はやい動作と近代兵器をも凌しのぐ攻撃力は、並のサーヴァントを優に超す。

どうやらこの神殿、第一の回廊としてセイバーを迎えた領域は神秘の園であるらしい。

生身の肉体ではなく、魔術の石像ゴーレムを想起させる岩石で構成された体軀なれども、大気に溶けて灰ほのかに混ざる独特の気配は告げている。本物だ、と。唸うなり声を上げながら現れた二体は、間違いなく幻想種であるのだと。

物理法則を殺しながら超絶の駿しゅん足そくで以て行く手を阻む二体を前に――

セイバーは剣を構えない。

ただ、告げる。

「退どけ」

返答はあった。

人の言葉ではなく獣の咆哮ほうこうによって。

人のそれを模した顔面が牙きばを剥き出す。

自然な形で両手を下ろしたままの剣士セイバーへと、自然の猛威を示す獣が襲い掛かる。

戦闘開始。

――瞬時に。緒戦は終了していた。

完全同期。回廊巨柱と同じ材質で身体を装甲された神獣二体による完璧かんぺきな同時攻撃。

一体は突進して前方至近から、死の爪。死の顎あぎと。

一体は跳躍して後方至近から、必殺の炎の竜巻ファイアストーム。

前からの攻撃に対処していれば背後から灼き尽くされ、背後の炎に意識を向ければ前から引き裂かれる、絶対の勝利を導くはずの二体同時攻撃はしかし、セイバーの肉体を破壊することはなかった。

だが、引き裂かれたものは在る。

石の神獣たちだ。

今まさに獲物の生命を刈り取るという寸前の姿勢で、二体の肉体は砕かれていた。

死の爪と顎が届くよりも先に、猛炎が触れるよりも前に――

超々高速回転による迎撃！



聖剣に凝集された風の魔力を周囲三六〇度に対して全解放することで発生させる“風の爆発”で二体の動作を瞬間的に阻みつつ、魔力放出スキルによって大幅強化された全身の筋力を以て繰り出される超音速の連続回転——恐るべき無数の斬撃ざんげきが、神なる獣たちを両断、分断、寸断していた。

平衡を維持しながら回転する独楽コマを想像するといいい。

ただし、それは、触れるもののすべてを砕く。

戦闘終了。二秒と経たず。

セイバーの姿には傷ひとつなく、何ら変わるところがない。

マスターには一度たりとも見せたことはない、陰しい視線だけが異なる点か。

ああ、もうひとつ。

剣だ。彼の右手には、今や、一振りの剣の姿が在った。

刀身を覆い隠していた風の魔力——宝具『風王結界インビジブル・エア』が解除されたが故に。

黄金の刀身。

輝ける剣。

それは、戦闘のために形作られた武器である筈なのに、目を奪われる程に美しい。

風の宝具によって姿を隠す必要が生じる程に名高きもの。

地球ほしの内海で鍛え上げられた、窮きゅう極きょくの刃。神造兵装。

英霊として現界する者であれば誰もがその名を知る、それこそが、聖剣だった。

故に、是を目にする者があれば——いつか彼を指して言うだろう。

聖剣使い。と。

『■■■■■■■■■■.....ッ！』

咆哮。人の呻く声にも似て。

果たして、聖剣を携えた彼を明確に認識したものであるかは定かではない。

声はふたつ。

直前に数十の破片へと寸断された筈のものたちが、声を、上げていた。

戦意充分。魔力充分。僅かな翳かげりもない。確かに絶命したはずの神獣二体が、時計を逆しまに戻すかの如くして、その場で再構成されていく。



「生身のものも大した生命力だったが」

晴海埠頭で斃した一体のことを彼は思い返す。

頭部に大穴を開けられても両腕の爪を赤熱化させて襲い掛かってきたあれも大概ではあるだろうが、今回は、次元が違う。

死からの再生だ。

幾つかの可能性は在る。

見たままに超再生力による復活、死し骸がいを素材として瞬時に組み上げられる合成獣、元より命なきものとして設計された死霊魔術の類、宝具としての大複合神殿体が有する何らかの力ということも有り得るだろう。

何であれ、要は――

「……不死しなずの獣と言う訳か。ライダー」

光が煌めく。

低く構えられた聖剣の刀身が、完全再生を遂げた二体を映し出していた。



「ファラオは神である。

故に、余は、自らの裡うちに天空の神々を持つ」

主神殿最奥。玉座。

不気味の巨大怪球を備えた不可思議の空間に座して、神王ライダーは嗤う。

魔力回路にも似た幾筋もの淡い光は、今や、床・壁・天井の隅々にまで行き渡り、溢あふれ出る膨大な魔力の存在を示していた。この巨大なる神殿体で起こるすべての事象を、自動的に王は知る。人は自らの体内に於ける細菌の活動を知るまいが、神王たるオジマンディアスはすべてを把握する。

愚かにも王の裡側なかに足を踏み入れた愚者セイバーが、ひとり。

あまりに迂う闊かつ。

あまりに脆ぜい弱じゃく！

少なくとも、君臨する王にはそう映る。

「単騎で神々の園へ挑むか。せいぜい、三騎で示し合わせば良いものを」

とは言え、無理もあるまいな。

そう続けて――神王は僅かに目を細める。

当世の人間たちが駆るのであろう鋼鉄の船の群れを沈めたことは、神王にとっても望まざる結果ではあったが、しかし、ある種の不退転の決意をセイバーへともたらしただけであれば些いささかの意味はあったというものか。

実に。皮肉なものだ、と王は口元を歪ゆがめる。

「余は、世界を救うために血を流す。

ならば貴様は、世界を滅ぼすために人を救わんとするのか？」

返答はない。

声は、無限再生の機能を有する二体の獣と戦う剣士には届くまい。

「必死だな。はは！セイバー！

良かろう、進みたくば進め。まずは其処そこなる第一の回廊を見事制して進んでみせよ！

我が内的世界、固有結界として今や成立するこの複合大神殿に備わる神威を味わえ！」

複合神殿体はただの要塞ではない。

魔術師たちが形作る“工房”とも決定的に異なっている。

内部に存在するのは、言わば、古き神代をさえ思わせる色濃き神秘の具現そのもの。

たとえば――

光輝たるファラオとその配下には、仮初めの不死の肉体。

不敬にも刃を向ける英霊どもには、宝具真名解放の封印。

無論、それだけには留まる筈もない。神々が数多く在るのと同じように。

神々は古来より人に対して与えるものだ。時に祝福を、時に呪いを。ならば神々を裡に持つ神王の体内たる宝具には、成る程、その数だけの神秘が備わるものか。

「さて、セイバー。我が神威の数々を前にして――

まがりなりにも星の聖剣を持つ勇者が、よもや、途中で屈しはすまいな？」



英霊の暴走について。

人智を超えた威力を以て聖杯戦争に挑む英霊たちは、時に、自我を以て行動する。

先述したように、バーサーカーを除く英霊たちは明確な人格を有する。

故にこそ関係性の構築が重要であることは十分に説いた。

ここでは、人格あるが故の暴走について特に記す。

神話、伝説、逸話の具現に等しいサーヴァントは強力であり、時に魔術師はその兵器としての側面のみを重視しがちではあるが——注意せよ。

人格を有した兵器が如何いかに危険なものであるか。

それだけではない。

特に、聖杯戦争にて召喚・現界を果たす英霊の多くには願いが在る。

すなわち、並外れて特別に強い想いを——

心からの願いを持つ、人間性溢れる人格こそが彼らであるということだ。

マスターが想像する以上に彼らには暴走の可能性が付きまとう。

冷静に戦略・戦術を練る魔術師であればこそ、特に意識せよ。

自陣の戦力が不意の感情的暴走を行った時、多くの場合は作戦の更新が求められる。

偶然にも暴走が作戦意図に合致することもあるだろう。

更には、暴走さえも支配下に置いた上での作戦構築であれば、何の問題もない。

ただし。どちらでもない場合には。

やはり——

令呪の使用を躊躇ためらってはならないだろう。

(古びた一冊のノートより抜粋)



「足下、気を付けて？」

「いいえ、はい。この程度の暗がりは一切問題ありません」

「そうなの。すごいわ、アサシン」

「.....いいえ」

同日。同時刻。東京都西部、奥おく多た摩ま山中。

柔らかな月と星の明かりを吸い込むような翠みどり色のドレスを纏う少女が、いた。

周囲には木々があった。

夜空には星々があった。

そして、少女の傍らには白色の髑どく髑ろ仮面が浮かんでいた。いや、仮面を被かぶった女か。

少女は――

沙条愛歌は、軽やかに夜道を歩いて行く。

異様な光景ではあった。街灯さえないような暗がりを、年若い少女と、白の仮面が進んで行くさまはおとぎ話的一幕のようでさえあって、幻想的で、現実からは遠く離れた世界の出来事のようにもあって。

事実、侵入者を監視するための機械装置さえもが熱源感知に一瞬遅れた。

愛歌がもたらす魔術によって作動を阻まれたのかもしれないが、どちらにせよ、結果は変わらない。伊勢三いせみ家の監視装置は働かない。侵入者を通知できない。

だから、愛歌は歩いて行く。

目指す先は、聖杯戦争参加者たる伊勢三三すず莉りの地下工房。

伊勢三一族の魔術師たちが数多く潜む魔術の要塞。

ああ、もつとも。



愛歌にとっては、そこに何処の家系の何者がいるかはあまり重要ではない。山中の何処かに隠れたマスターのひとり、ライダーと契約しているマスターがいる場所へ到達することが何より重要なからだ。

まだ。目的地に辿たどり着いてはいない。

だから——既に語られた、確定された惨劇は未だ起こってはいない。

それはこれから起きるのだ。

「……始まったわね」

山道の途中で立ち止まり、愛歌は振り返る。

仮面の女アサシンが無言で頷うなずく。

頷きながら、理解している。

自らの主人たる少女が、何を、見ているのか。

夜空ではない。

森の木々でも、傍らにいる自分でもなく。伊勢三の工房でさえなく。

もっともっと、遙はるか遠方をこそ主人は捉えているのだとアサシンは疑わない。

自分たちのようなサーヴァントの身であったとしても、千里眼スキルの最高位ランクを有していなければ叶うはずもない、超遠距離の視認。或いは認識か、予測か。それを愛歌は可能とするのか——それとも、ただ、想いと共に瞳を向けているだけなのか。

「あら」

ふと、少女の視線が上を向く。

星々を見ているのだとアサシンが気付いたのは言葉の後だった。

「お星さまがとっても綺麗きれい。都内より、ずうっと空気が良いものね」

ここも都内には違いないのだろうけど、と言って少女が微笑んでみせる。

仮面の女は静かに頷くのみ。

「さあ、わたしたちも急がなきゃ」

「はい」

「パーティというには、ちょっとだけ、物騒かもしれないけれど」

少女は歩いて行く。

目指す先。幾重もの結界によって守護された地下工房へ。

数多の魔術師とその数多の係累、ライダーのマスターたる伊勢三玄莉、そして、聖者の気質を有する無垢の少年が待つ、暗がりの園へ。

或いは――

――惨劇の時を待つ生贄たちが集う場所へ。

誰も彼もが死ぬだろう。

アサシンのもたらす死の毒によって。

時に、無垢なる少女の楽しげな声を聞きながら。微笑みを目にしながら。

この危機を脱することのできる人間など――誰ひとりとして、存在、しない――





Dear My Hero ACT-1



一九九一年、二月某日――

東京湾上神殿決戦より、八日前。

秋あき葉は原ばら駅昭和通り口近くの小さな居酒屋の一角に、とある男女がいた。

既に小一時間。活発に言葉とジョッキとを交わしている。

男の方は、まず二十歳を優に超えているように見受けられる、逞たくましい男だった。見る者が見れば鍛え抜かれた肉体の在り方に感嘆するだろう。国籍は不明。日本人と言われればそう思えるし、中東系や南米系と言われればそうも思える。彫りの深い顔立ちと陽に焼けたように浅黒い肌。

女の方は、二十歳前後と思おぼしき若々しい容貌ようぼうの白人女性。少女の気配を色濃く残した女だった。鮮やかな赤毛の髪に添えたレース帯バンドの白が似合っている。服装次第では十代半ばと言っても疑われはすまい。翠みどり色の大きな瞳を備えた童顔で、よく笑う。

「乾杯プロージット！」女が言った。大ジョッキ二杯目。

「おう！」男が応こたえてジョッキを合わせる。

男女どちらも外見からの印象は年若い。

十人いれば十人が「大学生あたりの年頃」と予想するだろうし、ふたりが都内のどこを歩いていたとしても、まず留学生同士のカップルとしか映るまい。実際、この店で給仕のアルバイトを半年間勤めている女子大生も第一印象でふたりを仲睦むつまじい恋人同士と認識していたし、漏れ聞こえてくる言葉の欠片かけらを聞いても尚その考えは変わっていない。

外国人の若者たちがいても珍しくないのだ、この街は。

秋葉原。家電の街。

免税店の品々を求めて外国人が立ち寄ることはそう珍しくもなく、パソコン類目当てに訪れる若者の数も増えている。電気街とは駅を挟んで反対側にある昭和通り方面にわざわざ足を運んでくる外国人観光客はさほど多くはないが、完全にいない訳でもない。

故に、よくある風景ではあった。

それでも何か特別なものを感じさせるのは、ふたりの雰囲気のせいかな。

「日本の酒もなかなか面白いもんだ。喉のどを通る感触がこう……佳いいな」

「ピルスナーのビールは日本じゃなくて欧州ヨーロッパ発祥なんだけどね。それと、あなたの感じたそれは喉越しノドゴシって言うのよ。覚えておきなさい」

笑って、女が言う。

男は澄んだ眼まな差ざしで頷うなずきながら、

「そっか。佳い喉越しだ！」

一息に飲み干す。



空になるジョッキの量也多ければ注文する料理の量も多く。

浮かべる表情は共に明るく生気に満ち溢あふれて、ただ眩まぶしい。

居酒屋の主人はこの男女の様子を特に記憶しており、この夜以降、事ある毎に来客へ語り聞かせることになる。どちらも若いだろうに、あんな風に人生を楽しんで過ごせるのはある種の才能に違いないとか、近頃の無気力な若者たちも見習うべきだとか何とか、酔った際の説教の種として大いに活用され――

兎とも角かく。

賑にぎやかで。朗らかで。

陽性の気配を色濃く漂わせた、周囲の人に愛される男女の姿がそこには在って。

「しっかしまあ、大きな街だ。建物也多けりゃ人も多い。それに面白い。移動に鉄の箱を使うのも初めは面食らったが、見慣れれば味わい深いぜ。それに、あれだ」

「あれ？」女が首を傾げる。髪が揺れる。

「鉄の竜」

男は真顔でそう言った。

一瞬の間。

注意深く男女を観察していたなら間の奇妙さに気付いただろうが、アルバイト女子も居酒屋主人もちょうど注意を逸そらしている。何しろ夜はかき入れ時だ。忙しい。

「電車ね」女は笑みを絶やさない。

「それだ。あれも佳い。駅ってのはさながら竜の巣だ」

「あはは、面白い表現。でも、竜の巣で人が行き来なんてしないでしょう」

「確かにそうだ」

男も笑う。素直な人柄を思わせる、人好きのする笑顔だった。

「フェリドゥーン王の治世で暴れ回ったあの邪竜アジ・ダハーカに比べると、現代の鉄の竜は随分と穏やからしい。腹に人を納めても消化せずに吐き出してくれるしなあ」

「そうよ。電車は人を食べたりしないの」

うんうんと頷きながら、女は揚げたての唐揚げを一口。ぱくり。

美味おいしい、と小さく呟つぶやいてから大ジョッキのビールを一口。二口。

「ふは。そうね、地上と地下、共に路線が豊富なのは東京の特徴かもね」

「お前の国は違うのか」

「街によるかしら。シュタットバーンはあるけど、ここほど縦横無尽じゃないかなあ」



言いながら、女は翠の視線を僅わずかに男から逸らす。僅かに上へ。思い出しているのだろうか、過去を。かつて過ごした何処かの場所を。

「……でも、ちょっと驚いたわ。ここ。秋葉原」

「そうか？」

「そうよ」頷きながら「そこそこ大きめの駅なのに、駅前の飲食店の少なさったら」

「確かにそうだな」

「電気製品の免税店は多いのに、ビアホールの類たぐいなんて全然ないんだもの。そりゃあ、ホフブロイを持って来いとまでは言わないけど」

女は僅かに不満顔を形作ってみせる。

ほんのささやかなものだ。本気の苛いらつきなどは微み塵じんも感じさせない、偽の膨れ顔。

「ま、構わんだろ。俺たちは結局、こうして飲み屋を見つけられたんだ」

「そりゃあね」

「ビールは旨うまい。喉越しも佳い」男が笑う。

「お料理もね。居酒屋、最っ高」女も笑う。

よく笑い、よく呑のむふたりだった。

そして――

「エルザ。お前が俺のマスターで良かったぜ」

「それはなあに、もう一杯ジョッキをお代わりしたいってこと？ アーチャー？」

「それもなくはない」

「あ、お姉さん、お代わり頂ちょう戴だい。ビール大ジョッキふたつ！」

「……大した奴だ。いくさのただ中に在って剛胆豪快。ますます気に入った」

恋人同士ではない。

留学生でもない。

ここにいるのは愛し合うためでも、学ぶためでもない。

英霊サーヴァントとして、魔術師マスターとして――

ふたりは、六人六騎と殺し合うために東京ここへ来たのだ。



「じゃあ三杯目、乾杯！」

よく笑いよく呑む、赤毛の女。

エルザ・西条さいじょうは日独のハーフである。

若く見られることが多いけれど、実際の年齢は二十代後半。三〇歳の直前。

国籍は日本と西ドイツの双方で有している。ああ、西ドイツという単語は一九九一年たる現時点ではもはや意味を成すまい。約五ヶ月前、すなわち昨年十月、彼女の祖国たるドイツは東西の再統一を果たしたばかりなのだから。

「ぷはっ」

二杯目までは普通に呑んだものの、今度は一気にジョッキの半分近くまで。

酒に強いのはドイツ人である父からの遺伝か。それとも日本の東北地方、米所で生まれ育った母の影響か。どちらにせよ親からの贈り物であるには違いない。

魔術回路やなけなしの魔術刻印と並んで、親から受け継いだもの。

「だし巻き卵はお気に召した？ お代わりしましょうか」

「旨い。ぜひ頼む」

「はい。……お姉さん、だし巻きメンタイ追加でもうひとつね！」

手を挙げてアルバイトに声を掛けながら、エルザは頭の片隅で思う。

似ている、と。

居酒屋も祖国のホフブロイ・ハウスの一階とそう変わらない。酒も料理も悪くない。酔客の賑にぎやかさもどうしようもなさも、まあ、似たようなもの。違うのは広さと音楽くらいのものだ。流石に、居酒屋ではバンドが乾杯の歌を演奏することもない。

（うん。よく似てる）

どの街も同じだ。

どの国も同じだ。

この世界に、完全な異郷など有りはしないのだとエルザは認識していた。

実感でもいい。表向きの身分である報道カメラマンとして既に幾多の国を巡り、多くのものを見てきた。パレスチナ、アイルランド、中南米各国、そしてカンボジア。多く

の人とすれ違い、多くの子を目にして、多くの命を見過ごした。父をはじめとする魔術師曰いわく“根源”の渦から生じたという万物を包むのは、ただひとつの世界だけ。美味しい料理や酒に喜び、笑い、友と語り合い、愛らしい子供たちはいつもはしゃぎ回る――

そして。それらのすぐ傍らで。

血ち塗まみれの牙きばがずらりと並んだ口を開けた地獄が待ち受ける危うい世界だけが、在る。

どこも同じだ。

こうして酒を酌み交わしている自分の五インチ隣に、五分後に、地獄は在る。

肉の穿うがつ音。肉の裂ける音。銃声、爆音、怒声。ナイフ。鉈なた。怒り。恨み。嫉ねたみ。誰もが地獄に喰くわれる可能性があって、誰かがいつも残酷な獣に喰われていて、自分を含めた多くの人々が見て見ぬふりをしているだけだ。

ここと地獄との差は――立っている位置、座標の微少な差異だけに過ぎない。

五インチ程度、五分程度の僅わずかな違い。

殆ほとんど同じ。どこも同じ。

「……………」

明るさを湛たたえていたエルザの瞳ひとみが、僅かに曇る。

連想してしまったせいだろう。

平時は思い出さないようにしている事柄の幾つかを。特に、アーチャーと呼んだこの男性の前にいる時には注意していた筈はずなのに、つい、油断してしまった。

(ああもう、あたしの莫迦ばか)

快活で明るく、爽さわやか。

いつもそう在りたい。在ろうと思う。

意識して。笑顔。

普段は、ごく自然に振る舞った結果として笑みが浮かぶ。他者の多くから、時には初対面の相手さえからも概おおむね好意的に捉とらえられるこの表情が、エルザは自慢だった。自意識過剰や自信過剰の類だろうけれど、最愛の相手に褒められた結果として育ってしまった自意識なのだから、ある意味では仕方がない。

(うー。気付かれちゃった、よね)

ちらりと見る。テーブルを挟んで真正面、褐色の肌の偉丈夫アーチャーを。

目と目が合う。

曇りひとつない黒い瞳がエルザを見据えていた。ぴたりと。

「……何？」恐る恐る、尋ねてみる。やはりこれは気付かれていると見るべきか。

「いや別に。お前の見てきた世界って奴を、俺も見てみたいと思っただけだ」

「あはは。なあにそれ」

「さあてね」三杯目のジョッキを半分まで空にしつつ、肩を竦すくめて。

完全に見抜かれている。

視線が、表情がそう言っている。言葉にしないのは彼の気遣いなのだろう。

腹が立つほど気が利くサーヴァントなのだ、彼は。実際、あまり腹は立たない。むしろありがたいとさえ思う、或あるいはそう口に出すことが大半ではあるのだけれど。

「お前はあれだ、若いのに、良くないものを見過ぎてきたんだろうさ。エルザ」  
分かっている。

世界を、見るべきでないものを見てきた自覚はある。

世界に、愛すべき輝けるものが沢山ある認識もある。

魔術の修行を兼ねて——という大義名分があったにせよ、世界各地を飛び回った経験は自分にとってプラスにばかりは働いていないのだろう。修羅場での立ち回り方、実際の現代戦の把握、自慢の笑顔で培った人脈、得たものは大きいけれど失ったものも多い。

いや。違う。違うだろうか。

負の経験も等しく意味ある蓄積なのだと仮定すれば、何ひとつ失ってはいまい。

ほんのりと帯び始めた頬のあたりの熱を感じながら、エルザは振り返る。

（そうね。世界が悪い訳じゃない）

見方が変わってしまっただけなのかもしれない。

そして、その原因は、必ずしも世界中を旅してきたことだけではなくて。

祖国で。故郷で。

何よりも大切なたったひとつを失ってしまった、あの出来事が——

「……ずるいわ。あなたは何でもお見通しよね。アーチャー」

「そうか？」

「そうよ。そうでなかったら、今みたいに言ったりする筈ないんだもの」

やはり、何だかずるい。不公平だ。

こちらはただの人間、もとい、多少の魔術が行使できるだけの女に過ぎないのに、この偉丈夫ときたら心の内まで見通すかのような瞳を持った英雄ときている。それもただの英雄ではなくて、正真正銘の大英雄。古代ペルシャに於おける伝説の弓兵だ。

（人生経験なら、あたしの方がちょっぴり多めに積んでる筈なんだけどな）

思考の端で思ってしまう。

生前の時間の過ごし方や生き方のようなものが、彼は濃密だったのだろうか。

年齢で言えば自分の方が上である筈なのに、三千と数百年前、かつて二十歳を過ぎたあたりでその一生を終えた彼の方が自分よりも余程大人であるように思えてくる。

それに。僅かたりとも酔った風な気配さえ見せないし。

同じ量を飲んで、こちらはほんのり頬が赤くなる程度にはなっているのに。

サーヴァントは酒に酔わない？

ああ、違う。彼はそのあたりについては更に特別なのだ。

「神々の酒だろうと俺は酔わないぞ」

「あたしだって酔ってないし。戦闘に影響が出るほどは飲んでいません」

「そりゃそうだな」頷いて、彼はジョッキの残り半分をごくり。

見た目通りに頼もしい。自分がまだ二十歳前のあどけない少女だったら、この飲みっぷりだけで彼のことを好きになってしまったかもしれない——とまで考え掛けてから、思考を整える。些さ末まつな感慨なり反応なりは、常に、意識や思考の片隅で。エルザ・西条としての主体はいつでも戦闘状況への警戒に当てている。

こうして、酒を酌み交わしていても。

笑っていても。

世界の在り方や過去を思い返していても、すべては、ついでだ。

東京は戦場だ。そして、自分は戦う者なのだから。どれだけセンチメントな事柄を思っただとしても、主体にはしない。自分の中心に捉えたりしない。

羽はね田だ空港行きの飛行機に搭乗した数日前から、或いは、アーチャー召喚のための触媒を入手した半月前の瞬間から、エルザの中心には聖杯戦争が在り続けている。

「大した奴だ」

片方の眉まゆを上げながら、彼が言った。

今夜で二度目の感嘆の言葉。一度目のそれとは少しニュアンスが異なる。



「西方の魔術師ってのは、もっと頭が固い朴念仁ばかりと記憶してたがな。この国でも、魔術師ってのは概ね西方あっちの流れを汲くんでるんだらう？」

「古い結社の類を除けば、時計塔と仲良くしたいような連中は大体そうかしら」

「お前ンところは違うのか」

「あたしの家はそもそもドイツだってば」

笑って、一皿目のだし巻き卵の残りを一口。ぱくり。

「でも、この国の魔術師とそう変わらないと思う。ウチの家、そんなに名門って訳でもないしね。あたしも不良だしさ」

——まさか、自分が聖杯戦争に参加するマスターになるとは思っていなかった。

そう続けながら、思考のやや中央寄りの領域でエルザは思う。

この嘘も、きっと、彼には容易に見抜かれてしまうのだろう。

けれど。まだ言うまい。

まだ早い。

たとえ彼の瞳が多くを識しるのだとしても、人ならざる英霊の神秘がそれを可能にするのだとしても、自分の深い部分にあることはきちんと言葉に出して伝えたい。人として接してくる彼には、人として応えておきたい。

故にこそ。

エルザの口から彼女自身の真実が彼へと語られるのは、二日の後だった。



現界する英霊たちは、総じて、スキルと呼称される超常の力を所有している。

スキルは二種に区分される。クラス別能力と、固有スキルである。

クラス別能力は名の通り、クラスによってそれぞれに与えられるものだ。

アーチャーであれば対魔力と単独行動。

キャスターであれば陣地作成と道具作成。

たとえば英霊が本来は対魔力スキルを有していなかったとしても、アーチャーとして召喚されれば自動的に対魔力スキルをクラス別能力として得ることになる。

ただし、すべてのスキルは英霊の出自に大きく依存するが。

一方で、固有スキルは英霊が元来有する能力に近い。

伝説として如何いかなる活躍を果たしたか、生前に如何なる技術を有したか。

それらが大いに関係して、固有スキルは決定する。

総合して数個であるクラス別能力に比して、固有スキルの種類は多岐に渡る。

英霊の数だけ存在していると言っても過言ではないだろう。

彼らの有する神秘とわざが、かたちとなって顕あらわれるのだ。

(古びた一冊のノートより抜粋)



「またね」

そう言って手を振って別れる親しい恋人同士、もしくは友人同士のように。大小の雑居ビルが並ぶ秋葉原駅昭和通り口前にて、先刻の居酒屋を後にした男女ふたり——アーチャーとエルザは、幾つかの会話の結果、今夜は一旦いったん別行動を取ろうと決めていた。

「ここまでは食いついて来なかったけど、気を付けて」

「おう」

「狩りの続きはあなたに任せるわ。もし遭遇しても、深追いは禁物よ」

「分かってる。得意分野だ」

「そうよね」エルザは、仮の宿である隣駅のＪＲ御茶ノ水駅近くのホテルへと。

「そうとも」アーチャーは、敵対サーヴァントの姿を求めて周辺の探索を開始。

背中を向けながら片手を上げて、何度か振りつつ。

薄暗い夜の秋葉原へとアーチャーは歩いて行く。

互いに別行動を取ることは大いに危険を伴うものではあるが、当然、ふたりともよく理解している。敵対するサーヴァントと遭遇した場合、マスター単独ではまず戦闘で勝利することは叶かなわない。強大な神秘の塊である英霊を殺すことなど、魔術師には不可能に近い。だからこそ、マスターとサーヴァントは容易に離れるべきではない。けれど、必ずしもそうとばかりは言い切れない。

偵察行動ならマスターを伴わない方が効率的という場合もある。他にも、広範囲に渡る攻撃力や影響力を有する敵サーヴァントなり、並の魔術行使では追い付くこともできない程の超高速で移動を繰り返す敵サーヴァントとの戦闘であれば、むしろ、マスターが傍らに在るのは大きなハンデとなるだろう。

故に、今は別行動。

理由は前者だ。偵察。なにせ、召喚されてからまだ二日目だ。

「セイバーあたりが引っ掛かると面白いんだがな」

不敵に口元を歪ゆがめて。

男の、アーチャーの姿が街角の暗がりで変化する。

魔力で編み上げられた軽装の鎧よろいが、二秒と経たずに全身を覆う。

エルザマスターが選んでくれたパーカーやシャツ等の現代の服装は大いに気に入っていたものの、やはり、思い切り動くなれば戦闘形態が落ち着くものだ。アーチャーは自然と感じ取る。人間ないし人間のようなものから、自分自身が、戦うための一いつ箇この兵器として馴染なじんでくる自覚と認識を。

体には鎧。左手には真紅の大弓。

宝具ではないまでも、特殊な道具作成スキルによって造り出した弓だった。

生前は道具を用い、素材と時間を費やして自ら工夫したものが、今は、ほんの一瞬。

(.....これが英霊か)

今更ながらに実感する。

自分はやはり、正しく人間ではないのだという事実を。

三千と数百年前、西アジア世界に於ける神代最後の王として名高き偉大なるマヌーチェフル王に仕える最強の勇士、怪物と英雄たちの戦いの伝説を裡うちに秘めた神秘の直系として戦った人間は、ペルシャとトゥルク両国の民すべてを救わんとして大弓より一矢を放った英雄は、もういない。それは確かに自分自身であるが自分ではない。

何故なら、既に、生前の自分は死んでいる。

此処ここにいる自分は――

「さあて。やりますか」

英霊。サーヴァント。

聖杯戦争を勝ち抜くためにマスターが召喚した兵器だ。

ならば正しく、そのように行動しよう。アーチャーは冷静に自己を俯ふ瞰かんする。

まずは秋葉原電気街口の裏手からＪＲ駅を越えて、殆ど人の気配のない――夜の八時を過ぎた頃には既にこの街からは人影は殆ど消えていたが――大型の自転車駐輪場の屋上へと跳躍して、更に、雑居ビルの屋上へ。更に、別のビルの屋上へ。

超跳躍の連続による、秋葉原上空での高速移動。

常人ならざる行為ではあったが、この程度は生前とさして変わらない。

（俺は俺のまま、再び世界に在るのか。奇妙なものだ）

幾らかの感慨を込めながら、跳躍の高速移動中に東京・秋葉原の街並みを観察する。

主たる意識は索敵に。僅かな意識を自分の内へ向ける。エルザがするように。

敵影未いまだなし。――街並みは随分と変わった。夜の色も。

殺気感知せず。――ただ、人は、あまり変わっていないと思う。

魔力感知せず。――きっとそれは、空に浮かぶ星々の瞬きと同じようなものだろう。

まるで星々の海に挟まれているかのようだ。

上方には夜空の星明かり。そして、下方には東京の街明かり。

「悪くない」

呟つぶやきだけを空間に残して、断続的な跳躍。東京の空を駆ける。

何も、無闇に移動している訳ではない。

いや。無闇に移動している、と言えないこともないか。

これは狩りだ。獲物がこちらに喰らい付くのを待っているのだから、釣り、か？

――と。餌に、鋭い牙が迫る予感が湧き上がる。

獲物だ。敵だ。

想定していたよりも大分早い。自分と同じく哨しょう戒かいでも行っていたか？

初めて、サーヴァントに特有の気配をアーチャーは感じ取っていた。

「殺気とも魔力とも異なるか」





成る程と頷きながら、空中で、時速一〇〇キロメートル以上もの跳躍高速移動の姿勢を微塵も変えることなく弓に矢を番つがえて。放つ。一射。二射。気配を感じるのとはほぼ同時に後方三〇〇メートル位置に現れた人影を敵対サーヴァントと断定し、遠距離攻撃を開始。跳躍。射撃。跳躍。射撃、射撃、射撃。

両者互いに屋上から屋上へ飛び移りながらの高速移動。

跳躍の連続を繰り返しながらの遠距離戦。

アーチャーは攻撃の手を少しも緩めない。

魔力によって半自動形成された必殺の矢が、次々と東京の夜に消えてゆく。

（上手うまいな。よく弾はじく）

感嘆を込めて口笛をひとつ。

連続した遠隔攻撃によって、敵サーヴァントはこちらへの接敵を阻まれている？

確かにそうだ。一面では。だが別の一面では些いささか異なる。敵を寄せ付けていないのは事実ではあって、先方は防戦一方という見方もできるが——何分あちらは致命傷どころか傷のひとつも負ってはいない。

完全な無傷のまま、こちらを追ってきているのだ。

跳躍移動に悠然と速度を合わせながら。

陽動に乗って出現したと思しき敵サーヴァントは、しかしどうにも、遠距離攻撃を自動で無効化する手段を持っているらしい。回避されている訳ではないだろう。放った矢のすべては、直撃する前に消滅させられている。

正確には燃え尽きている。何らかの魔術かスキルか。

となればアーチャーが続けているのは最も早はや、攻撃、ではない。クラスも定かではない敵対者を接近させないよう牽制けんせいしているだけに等しい。

（本気でやるか？）

ふと、考え掛けて。即座にその選択肢を否定する。

本気は出さない。出すまい。

多量の矢を事前準備せずとも弓矢作成のスキルを有効に活用することで瞬時発動を可能とする生前の絶技の再現、空さえ埋め尽くす万の矢を放とうものなら、夜の秋葉原に残った人々の悉ことごとくをこの手で殺してしまうことになる。

流石に、矢の一本ずつを消去するのと、万の矢を同時に消去するのでは勝手が違う。

ほんの少しでも加減を誤れば秋葉原中の建造物は壊滅、人々は命を落とす。

(ああ……そうか)

瞬間。アーチャーは理解する。

ああ、三千数百年前と変わらないものは——人々や星空以外にも在ったらしい。

この胸の裡に揺らめく闘志は、確かに、生前のそれとそっくり同じだ。

どうやら、自分は。

(俺のまま、か)

本気で矢を射かける大量遠隔攻撃はしばらく封印するしかあるまい。

エルザから聞かされた神秘の秘匿？

否。それ以前の問題だ。もっと人のいない場所で、たとえば山野を舞台として、超遠距離から仕掛ける程度がせいぜいだろう。そういう機会や状況が都合良く訪れてくれるかは分からないが、まず、この場の攻撃方法としては相応ふさわしくない。

なら、どうする。むぎむぎ追い付かれてやるか？

「そうだな」

敢あえて口に出して言葉を風に乗せて。高速移動中止。

最後の跳躍の後、八階建ての雑居ビル屋上へと音もなく着地する。落下の衝撃は、足の裏から全身へと分散させる。魔力の一切介在しない物理的エネルギーはサーヴァントとしての自身の肉体への影響が薄いとは認識しているが、衝撃を殺さなくては、罪もない人々が所有するであろう財産ビルをたちまち破壊してしまう。

ゆっくりと、姿勢を正して振り返る。

追い縋すがる敵サーヴァントの気配は探るまでもなく視線の先に在った。

距離にして約三〇メートル。隣の、六階建てビルの屋上に。

銀色の鎧を纏まとう者だった。

美しい。目を奪われそうな程に美しき夜の生き物が、いた。

当然のようにアーチャーはそう感じていた。

あれは、正しく昼の陽の下に生きる者ではない、と。

幻想種なりの怪物という意味ではなく、ただただ、夜の暗がりとは静けさが似合うという意味合いのみで——影の女、夜の女なのだと理解した。女のかたちを美しく映えさせ

る華きや奢しやな銀の鎧。有り得ないほどに巨大で重く、それでいて軽々と携えられた豪槍ごうそう。

その顔には表情がひとつだけ。

憂い。ただ、それだけ。

華やぎと朗らかさ、明るさ。そういう類のすべてを自ら放棄した女だ。

エルザのそれとは正反対と言えるだろう。

数多あまたの地獄を目にしても笑顔を浮かべてみせる彼女とは、何もかもが同じでありながら、何もかもが違う。アーチャーは理解する。目にする。見通す。その目に備わったサーヴァントとしてのスキルがそうさせる。

「……第三位のサーヴァントですね」

女の声が届く。

対話を求めている訳ではないだろう。ただの確認だ。

けれど。

「そう言うあんたは第四位のランサーだろう。女だてらに大した豪槍を持ってるみたいだが、そりゃあ宝具ってことでいいのかね？」

返答していた。自覚的に。

応じることはないだろうと理解しつつ。

「そうですね」

ああ、憂いだけではなかった。

女は表情を変えていた。

刹那つ那なの殺し合いを行った直後であるというのに、女は、薄く――微笑んでいた。

並の男ならやられているだろう。美しい女が浮かべる美しい微笑みだ。

だが、アーチャーは尋常ならざる男だった。優れた目を持っていた。その微笑みに悲哀と憂いの果てを感じることはあっても、手を差し伸べるべき相手か、そうでないかはたちまち判断できる。そして無論。後者だ。

「多分だが、俺とあんたのこれは聖杯戦争の緒戦だ」

「ええ」

「互いに、英霊同士やり合うってのがどういうもんか思い知ったあたりだろう」

「ええ」

理解している筈だ。

この程度の小競り合いでは決着などすまい。と。

互いに奥の手を隠している以前に、まず、本気の殺し合いでさえない。

それでさえ、この街に生きる人々を殺し尽くすには十分な力だろう。仮に都内駐屯地あたりから鋼鉄の戦車の群れが馳はせ参じたとしても、現代の兵器では自分たちサーヴァントを殺せない。それでいて、自分たちは街も人も兵器をも一方的に砕いてしまう。流れ矢の幾つかを放置するだけで容易にそうなる。

地上に在らざる仮初めの客でありながら、サーヴァントは絶対の破壊者なのだ。

それが自分たちだ。

それが聖杯戦争だ。

英霊七騎という規格外の神秘を用いて行われる空前の大規模魔術儀式。

聖杯によって自動的に付与された知識ではなく、実感として、アーチャーはここに来て大いに理解していた。視線の先に佇たたずむ女にしても同じだろう。英霊同士の巨大な力の衝突、英雄譚えいゆうたんに語られた奇跡と絶技の具現。物理法則さえねじ曲げる、世界へのある種の蹂じゅう躪りんにして神話の再演――

東京。この極東の都市を舞台として。

自分たちは、是これより先、自らの願いと欲望のためだけにそれをするのだ。



スキルは極めて強力な神秘ではあるが、絶対ではない。

絶対とも表現できるものは他に存在する。

宝具である。

宝具こそが、聖杯戦争の行方を決定的に左右する重大要素となる。

多くは英霊の伝説に謳うたわれる武装といった形態を取るそれは、まさしく、絶大だ。

ノウブル・ファンタズム。

人々の幻想を基として形作られる窮極の力。



主に攻撃を目的としたものが宝具となるが、絶対ではない。  
それでも戦局に対して大いに影響を与える存在であるのは確実だ。

限定機能を有する魔術礼装の類と同じく――  
宝具は、真名を発し、魔力を注ぎ込むことで真に発動する。

その威力はやはり絶大の一語。  
攻撃型の宝具であれば、まず間違いなく敵対者を完膚なきまでに破壊する。  
英霊であろうと、魔術師であろうと。魔術の世界に関わりなきものであっても。

心せよ。  
聖杯戦争を進めるにあたって注意すべきことは数多あるが、  
宝具の扱いは、聖杯戦争を勝ち抜くために最も注意すべき事柄のひとつである。

(古びた一冊のノートより抜粋)



聖杯への願い。欲望。  
身を焦がすほどのそれを、確かに、エルザ・西条は有していた。

きっかけは、言葉にしてしまえば単純なものだ。  
地獄を目にした故に抱いたのだ。願いを。  
地獄を恐れるが故に抱いたのだ。欲望を。  
ごく分かり易く表現すれば、怖くなったのかも知れない。  
先年。カメラマンとしての友人の頼みを受けて赴いた某国で、政権による大量殺戮ジェノサイドを目の当たりにして――無数の髑どく髑ろ、子供も大人も関係なく積み上げ

られた死の群れ、倫理と常識の完全な崩壊、破壊、蹂躪、かつてオアシスと呼ばれた名残は何処にもなくて、無慈悲な暴力で、或いは強制的な飢餓で、ある人種だからという理由で、知識層であるという理由で、百万、二百万、三百万の死、死、死、死、恐怖——端的に言えばエルザは発狂した。

思い出してしまったから。

かつて、自分自身に起きた出来事を。

心のずっとずっと奥底に閉じ込めていたはずのそれが、異国の地上に突如として現出した地獄を前にした瞬間、吹き出してしまって。エルザ自身ではどうしようもなく、もう、止められなくなって。

二度とこんなものを見たくない。

思い出したくない。

死を。喪失を。大切なものを失うという悲劇が、自分の周囲に在ることを。

願った、祈った。焦がれるほどに。

そして、極東に眠る聖杯はエルザに応えたのだ。

右の乳房の上あたりに顕れた令呪という形によって。さあ、願え、と。欲せ、と。

エルザは聖杯に従った。願いを光として、欲望を友として立ち上がった。名門とは到底呼べない魔術師としては零落しつつある家系の嫡子であるにも関わらず、魔術世界の中心たる時計塔が関わる規模の魔術儀式たる聖杯戦争への参加を表明し——

あらゆる手段を尽くして西アジア伝説の大英雄の触媒を手に入れ、家系の衰えと共に最早朽ちゆくのみであったはずの秘蔵の魔術礼装を持ち出して。

魔術師という種よりも既に人としての親に近く、大いに愛を注いで自分を育ててくれた父母をも裏切り、忌避すべき、神秘ならざる現代科学による武器までをも可能な限り用意した。拳けん銃じゅう。手しゅ榴りゅう弾だん。その類。

ただ、切なる願いを果たすために。

ただ、地獄を目にして以来、完全に思い出してしまった事実を——自らの裡で疼うずき続ける心の傷トラウマを消し去るために。

そして、召喚した。最強の力を。神秘の具現たる存在を。

聖杯戦争に於ける切り札。

サーヴァント・アーチャーの召喚を果たしたのだった。

彼は——

そう、人ならざる英霊であるはずの彼は、事前に予想していた以上に人だった。

大いにエルザは驚いた。けれど、嬉うれしくもあった。願いを求める機械装置のようなものに成り掛けていた自分を、ひとりの人間として、女として、真正面から向き合ってくれるアーチャーの存在には大きな安あん堵どと安寧を得た。

早々に打ち解けて、気の置けない会話ができるようにもなって。

けれど。

けれど、

彼の千里眼スキルの評価はAランク。あの黒い瞳は、自分の笑顔の裏側に潜む我欲エゴと、手に負えない程に深い傷を見抜いてしまっているのだろう。

傷。心の傷。それは、あっけないほど簡単に。

エルザ・西条という人格の中心を穿ち、抉えぐり、破壊する。

—だから、あたし、こうなってしまったのかな。

アーチャーとランサーによる聖杯戦争緒戦より五日後。

東京湾上神殿決戦より、三日前。

午後の奥多摩山中にて。決定的な瞬間を、エルザはひとりで迎えることとなった。

冷気の満ちる冬の山中へと赴いた理由はただひとつ。奥多摩の何処かに拠点をもつ魔術師一族が、聖杯戦争開始以前より外部との接触をほぼ完全に断っているとの情報を得たが故。件くだんの一族、すなわち伊勢三いせみ家の人間の誰かが令呪を持つマスターであるとエルザは即座に判断し、アーチャーと共に拠点を叩たたくべく行動を開始したのだ。

そして、数時間のうちに発見した。

拠点ではない。

伊勢三のサーヴァント、もしくは自分と同じように伊勢三一族の拠点を探して山中へ入った別のマスターのサーヴァントの存在を。しかも、おあつらえ向きに単独。周囲にマスターらしき姿は見えない。

「叩いて、アーチャー」

緑深く陰しい山中は彼の領域だ。いける、とエルザは踏んだ。

「おうよ。あっちのマスターに気を付けろ」

「当然」

防御の礼装も攻撃の手段も充分。万が一、色位ブランドあたりを授けられた時計塔の強力な魔術師あたりと遭遇してしまったとしても、数分は保もつ算段。完璧かんぺきとは勿論もちろん程遠いまでも、出来る限りの対策は行っている。

数分あれば逃げ切ることも可能な筈だ。

自分が超一流の魔術師ではないことをエルザは把握している。

生き延びることだけを考えよう。死んでしまったら、願いも何も意味がない。それは、東京への飛行機の切符を買った瞬間から強く決めた方針のひとつだった。

ただ、逃げるかどうかは敵マスター次第。

風の元素変換魔術フォーマルクラウトのひとつでも放って様子見を――

『……俺は、聖杯戦争を止めたい』

二日目の秋葉原路上で出会った魔眼の少年の姿が脳裏を過ぎるが、振り払う。

聖杯戦争は止められない。

願いを果たすために、自分は此処にいるのだから。

二度と迷わない。次に会ったら、あの少年であろうと躊躇ためらわずに殺してみせる。

――そうよ。あたしは、もう、迷っちゃいけないんだ。そう思って。

コンマ一秒ほどの迷い。

思考の端で行わなければならないはずの、戦闘行為以外の感慨のようなものを、その時のエルザは思考と意識の中心で行っていた。この時点で、既に、運命のようなものは決定していたのかもしれない。

戦闘のために整え直した意識を以って、行動開始。

「よく澄み渡れヘーズィン」

魔術戦用意。視覚強化の魔術を両目に施す。

アーチャーの千里眼に比べれば兎戯にも等しいのだろうけれど、贅沢ぜいたくは言えない。

それに、この状況では充分な筈だ。敵サーヴァントは未だアーチャーの存在には気付いていない。遠隔攻撃を仕掛ける前であれば、確実に、こちらが先手を打てるだろう。

漠然と周囲を警戒しながら山中を移動する敵と、明確に敵対者が存在すると仮定した上で山中を搜索する自分とでは訳が違う。

意識を視覚に集中。索敵。何としてでも先に見つける！

一分が過ぎて。

二分が過ぎて。

三キロメートル以上離れた場所でアーチャーが戦端を開く、その瞬間、エルザは敵マスターである魔術師を確かに発見していた。向こうが気付くよりも早く。

（え？ 女の子？）

それは、そう——可か憐れんな少女のかたちをしていた。

穏やかで、美しくて。純真無垢むく。

年頃はまったく違う。

もっとずっと幼かったあの子とは、まったく違うように見えるのに。

少女の歩く姿を見つめて、奏でられる鼻歌を遠くに聞いて、目と目が合って、透き通るその瞳の奥に何かを捉えた刹那、エルザの視覚強化魔術は完全に砕け散っていた。

代わりに。

視界に、強制的に浮かび上がるものがあって。

『ママ、だいすき』

非正規運営の保育施設へと迎えに行って、手を繋つなぎながら帰ったあの日。

『ママ、だいすき』

サッカーボールを抱えて楽しそうに笑う、愛らしい姿を見つめたあの日。

『ママ、だいすき』

声を出すこと自体が酷ひどくつらい筈なのに、そう、言ってくれた最後の日。





「あ……」

心の奥底に隠してしまったはずの笑顔。地獄を目にした日に思い出して、でも、聖杯戦争の最中には思い出すまいと決めていた大切なもの。最愛の相手。あの子。忘れる訳がない、どれだけ胸を抉る傷なのだとしても忘れられない、誰より愛した我が子。

ママ、大好き。ママの笑った顔、大好き。

五歳にもならないうちに死んでしまった、あの子。

「あ、あ……ああ……ルカ……」

心の傷。

それこそが、願いと欲望の源だった。

子供。遠き日に失ってしまった愛のかたち。だからこそ、あの国でもエルザは耐えられなかった。だから願った。祈った。どうか、どうか、すべての母と子に救済を！

「ルカ——！」

それは、紛まごうことなき傷だった。

それは、紛うことなき隙だった。

であるが故に、この時——エルザは大いに誤認した。認識は歪み、意識と思考のすべてはねじ曲がり、狂気じみた妄想こそ正しいものであると捉えてしまった。視界の先で舞うようにして歩く可憐の少女が、何らかの力を行使したことも原因のひとつではあるだろう。

何にせよ。ここで、エルザの聖杯戦争は終わった。

敵マスターである少女を前にして、エルザは、こう、思ってしまったのだ。

ああ、なんてこと。

あの女の子は、きっと、聖杯戦争に巻き込まれてしまった愛すべき子だ。と。

——ごめん。アーチャー。ごめん、なさい。あたし——

僅かに残った正常な意識の欠片で。

鳴お咽えつして、瘦やせた木に背を預けて。

翠色の瞳から幾つもの雫しずくを落としながら——

エルザ・西条という女は、この瞬間、少女のかたちをした魔の手に落ちた。



Dear My Hero ACT-2

一九九一年、二月某日――

東京湾上神殿決戦より、二日前。

杉並すぎなみ区立塚山つかやま公園。

東京都内の閑静な住宅地にひっそりと存在する、それはある種の異界ではあった。

森や林と見まごう程に茂る常緑樹群。たとえば旧ふるい社やしろをぐるりと囲む杜もりのようにして、木々自体に神秘を見み出いだす者もいるだろうが、この公園に在るのは幾らかの奇妙の具現。木々ならずとも明確なまでのそれがある。

見るがいい。

深夜特有の静謐せいひつに包まれた無人の公園、その中心部――

二〇世紀末の大都市の中心地近くに存在しながら、太古の人々が暮らした竪穴たてあな式住居を模して木々の麓ふもとに形作られた真新しい復元住居を。建築から実に三年。新築、と呼んだとしても非難する者はいまい。

新築の旧き家。植樹されて間もない木々。新品同然の電灯。

詳しい者が見れば何もかもを理解するだろう。この区立公園では、悪意なく、時間の概念がねじ曲げられているのだ。古代の景観さえをも人々は再生することができる。この地に事実として古代の遺跡が存在していたが故の人造史跡としてか、それとも新たに生まれ育つ子供たちへの教育のためか、その双方か。

何にせよ東京という都市は果たしたのだ、この地に於ける古代の再生を。

もしも万が一、魔術師なりの古き神秘に関わる者が是これを見れば何と言うだろう。

中々に興味深い在り方だと目を輝かせるか、傲慢ごうまんなる現代文明のおぞましき極まれりと目を背けるか？ 此处ここには着目すべき幻想の欠片かけらもないと断ずるのみか。

少なくとも――その場に音もなく現れた女は、どちらの反応を見せることもなかった。

ただ、無言。

ただ、瞑目めいもく。

「……」

長い睫まつ毛げを震わせながら、閉じていた瞼まぶたを開いても。

紫水晶アメジストが如き瞳ひとみを露あらわにしても。

周囲に広がる人造された古き風景などには僅わずかの意識を傾けることもない。

興味の対象ではないのだ。現代ならざる古代の何たるかを、正しく考古学に従事する学者たちのみならず超常の魔術師さえもが求めるものを、失われた時代、時に神代と呼ばれる儚はかなくも美しき日々を、彼女は充分に知っているのだから。

彼女は、幻想そのものだった。







神秘が形態かたちを成していた。

神話によって生み出され伝説を糧として成立し得る美しい生き物、その再現だ。

夜の静寂が似合う女であり、今や、夜そのものに身を浸ひたす女だった。

優に自分の身長以上はあるだろう長大な金属塊を、槍やりを、そっと、片手で携えて

—

「バーサーカー。あなたは……」

唇を僅かに開き、今こ宵よい散った狂獣の命に想いを馳はせようとする。

そういう女だった。



ああ、此処はきっと、陽の下で子供たちが遊び回る園なのだろう。

優しい場所。暖かな場所。

いつかの自分であれば—

きっと、眩まぶしげに、愛いとおしくそれを見つめていたに違いない。

霊体化を解きながら。閉じていた瞼をゆっくりと開きながら。

槍の女ランサーは、そんな感慨を抱いていた。

足下の更に下に存在する筈はずの遺跡や復元住居には、一切の注意を向けることはない。

視界の中で意味を以もって映っているのは、ただ、遊具の群れのみ。聖杯のもたらす自動的な知識付与に頼らずとも理解できる。きっと明るく朗らかな声が響くのだろう。このように暗がりばかりが満ちる時ではなく、陽光が、木漏れ日を生むような正しき時刻には。

女は—

ランサーは、ほんの少しだけ笑みを浮かべる。

電灯が夜のための明かりとして機能しない昼日中の公園の様子を想って。

それから、すぐに。

空しさと哀れをたつぷりと湛たたえた表情になって、深く息を吐く。

その表情の切り替えは、些いささか、早い。

「……」

再度、息を吐いて。

つい先刻に杉並区の一角で行われていた死闘をこそ、ランサーは想う。

術の英霊キャスターのマスターとして目される玲瓏館れいろうかん家当主が座して他サーヴァントを待ち受ける玲瓏館邸に於ける、五騎入り交じっての殺し合い。ランサーを含めた三騎士の英霊と戦うも倒れず、しかし最後は音の迅はやさをも遙はるかに超えて天を駆けるライダーの太陽船よりもたらされた光の雨によって消滅した狂獣の姿を。

呆あっ気けない最期。違う。

無為なる最期。違う。

あれは死力を振り絞った戦いの果てだ。尊き勇士の命の輝きだった。

不可視の剛剣によってまず霊核たる心臓を刺し貫かれながら、この手による巨槍きょそうによって背後から胴を断たれるに等しい一撃を受けながら、飛来する無数の魔力矢を全身で受け止めながらも、獣は咆哮ほうこうを上げながら鍛鉄の刃を上回る鉤爪かぎづめを振るい続けた。

あれこそが狂戦士バーサーカー。あれこそ正しき神の戦士に他なるまい。

かのエイリークにも並ぶ魂の持ち主であったと今は認めてしまおう。

もしも自身が今も父の娘で在り続けていたならば、英霊などではなく姉妹たちの一騎であったならば、聖杯戦争の趨勢すうせいなど構うことなく狂獣の魂を在るべき場所へと導いたに違いないとさえランサーは想う。

それは、自分という存在が扱える中での最大限の賛辞の筈だった。

恐らくは既にマスターさえ失っていただろうあの獣は、勇士、そう呼ぶに相応ふさわしい。

現代を生きる魔術師たちの観点では、反英雄とさえ呼ばれてしまうのかもしれないが、そんなものは自分たちの知ったことではない。そもそもからしてあの獣と自分に、嗚呼ああ、一体どれほどの違いがあるだろう。

「違いなど、ないでしょうに」

静かに。ランサーは無人の公園で自問する。

そう、違いなど有るものか。

適性の有無があるにせよ、一度ひとたびバーサーカーというクラスで召喚されてしまえば強制的に狂気を植え付けられる。他のクラスに関してもスキルの強制付与は往々にして発生するが、狂戦士のそれは最も無慈悲だと言えるだろう。狂化スキル。東京の何処かに眠るという大聖杯セイントグラフは、バーサーカーから必ず理性を奪ってしまうのだ。対して自分は、聖杯による一切の強制なく、嗚呼、そう――初めから狂っている。

狂いきっている。たとえスキルとして狂気の類たぐいが紐ひも付けされていないのだとしても、確かに、胸の裡うちには狂おしい程に燃え盛り、滾たぎる炎が在るのだから。

「優しいひと」

ほら。もう、ひび割れてきた。

無意識に、言の葉が舌を滑って唇からこぼれてしまう。

嗚呼、嗚呼。やはり自分は狂っている。

悲しき狂獣の最期を見た。圧倒的不利を無視して荒れ狂う嵐の如き戦いを見た。在りし日の自分であればその魂の尊さと誇り高さに涙し、運命の勇士をまたひとり見つけたものと歓喜したろうに、そう在るべくして生まれた筈なのに、そうならない。それを望まないし疑問もない。獣の哀れを涙のひとつも流して悼むべきだろうに、できない。

この、神鉄の鎧よろいに包まれた女の乳房の奥の奥、底の底。

自分わたしの魂が、すなわち、炎が、そうさせない。胸の裡でくすぶり続けるそれはどうしようもなくただひとつだけを求め、熱は意識を侵し、こころをひび割れさせて、脳裏に浮かばせる像をたったひとつに搾ってしまう。すなわち。

サーヴァント階位第一位。

蒼銀の騎士いとしいひと。

セイバー。

「……本当に。あなたは、優しいひとだから」

声に。艶つやが。混ざる。

本当は、そんな風にしたくなどないのに。

もう“あのひと”はいない。此処にはいない。そんなことは分かっている筈なのに、けれど、思考と意識を彼が埋めていく。そうしたくない。彼のことを考えたい訳ではないのに、獣の最期を想うべきなのに、嗚呼、嗚呼、止められはしないのだ！

瞼を閉じるまでもなく、その横顔を克明に思い浮かべることができる。

吠ほえ猛る敵サーヴァントたる狂獣にさえ、手を差し伸べる騎士。

無論、実際に右手を伸ばしてみせた訳ではない。あの不可視の剣を以て、きっとひどく強力な宝具であろう真の姿を覆い隠したそれを、彼は獣へと差し伸べた。それは、獣の如く成り果てたかの反英雄にとって、正々堂々の一騎打ちによる死を求めた狂獣にとって、どれだけの福音であったろうか。聖者の慈悲の手にも等しく在るに違いない。

剣による優しさ？

そんなものが地上に存在するのだと言ったら、大いなる父は何と答えるだろう。

「優しいひとばかりが、この東京まちにはよく集う」

呟つぶやいて。囁ささやいて。

ランサーは、銀色の髪をなびかせながら背後へ振り返る。

「貴方あなたも、そうですね。アーチャー」

紫色の視線。

なるべく、なるべく。殺気を込めないよう気を付けながら。

裡の炎を一瞥いちべつに載せてしまうなんて事故が起きないように。

有り得ざる神秘を湛えた視線の先には、逞たくましい男の姿が、ひとり。超常の英霊サーヴァントとしてマスターである魔術師に仕える存在であることを聖杯に強制された七騎の一角、今宵に命を落とした狂獣を鑑かんがみれば、残り六騎のうちの一騎と言うべきか。その手に、本来の武装である筈の真紅の大弓は見受けられない。

ああ、やはり。やっぱり。

この男ひとも優しい。大聖杯はどれだけ自分を惑わせれば気が済むのか。

この胸の奥深くで滾る心は、本当は、ひとつであるのに。

ひとつでなくてはいけないのに。

——こんなにも強く優しい勇士たちを、ご馳ち走そうのように私の前へ並べてしまうなんて。

「おっと、戦う気はないぜ」

褐色の肌。鍛え抜かれた肉体はさぞや屈強であるのだろう。

人好きのする表情と、落ち着いた響きの中に爽さわやかなものさえ感じてしまう声は、きっと多くの民を心酔させて、多くの娘たちを惹ひき付けたに違いない。勇士。勇士だ。遠き彼かな方たの日に捨て去った筈の本能が叫ぶ。此処には、嗚呼、勇士の魂が多すぎる！

「今夜はもう充分だ。まあまあ厄介なバーサーカーは倒れた。ここで更にもう一騎の脱落なんぞを望むのは、名誉の死を遂げた奴への冒瀆ぼうとくになっちまう」

アーチャーは、復元住居の脇にちらりと姿を見せていた。

なんだか奇妙な建物があると今更に意識の片隅で思いつつ、ランサーは彼を見つめる。

僅かな、間。

彼は接近しようとしてこない。

至近距離での白兵戦闘を得手とするこちらに近付かないのは、当然とは言える。

ただし、別段、それが彼にとっての最適な戦闘距離という訳ではないだろう。数日前に遭遇した際に察した限りでは、是なる弓の英霊の間合いは恐らく都内全土を覆い尽くしても余りある。未いまだ隠された彼の宝具如何いかなではあるが、天翔かけるライダーがそうするよりも先に東京を焦土に変えられるとしても、さほど驚きはしない。

けれど。彼は、決してそうすまい。緒戦の時に感じたものが間違いでなければ。

「それで？」

「話がある。あんたにとっても悪い話じゃないと思うがね。どうする、聞ukai? 勿論もちろんタダって訳にゃあいかないが、今なら安くしとくぜ」

「ああ」

つい、微笑んでしまう。

予想通りの言葉を述べられてしまって。

殺気の欠片さえもない柔和な視線を、声を、感じ取って。

「やっぱり、貴方も。そうなんですね」

「あ？」

「いいえ……」

我慢しよう。耐える。感情を爆発させてはいけない。

彼の言葉を待とう。

宝具である槍を、ランサーは我知らず強く強く握りしめる。既に二〇〇キログラムを優に超えてしまっている超重量の一切を無視しながら、軽々と、掌てのひらの中で転がすようにして携えながら。

滾る熱に耐えながら、昂たかぶるものを抑えながら、炎が漏れないように注意して。感じるままに。嘘偽りのない言葉を放つ。

「此処には優しいひとばかりだから。私、困ってしまいます」



交渉、或あるいは共闘について。

七人七騎が殺し合う聖杯戦争に於いて本来、各陣営が協力関係を構築するのは困難だ。

ただし例外として。

既に、自ら以外の二陣営以上が共闘の体制を敷いている場合。

もしくは一陣営が著しく強力に過ぎる英霊サーヴァントを有していた場合。

これらの場合には、当該の陣営以外の陣営との交渉や共闘の可能性が生じてくる。

一時的な不可侵。一時的な共闘。

そういった相互関係を構築するのも条件次第では不可能ではないだろう。

先述の通り、あくまでそれは仮のものに過ぎない。

最終的に聖杯戦争の勝者として認められるのが一人一騎である以上、恒久的な共闘状態を維持するのは構造的に不可能であると断言できる。

故に、心せよ。

自らが申し出るにせよ、他陣営から申し出られるにせよ。

たとえ共闘状態を結ぼうと、背後からの一撃を常に想定して立ち回る他にない。



自らの背後より迫る一撃か。  
自らが背後より放つ一撃か。  
それは、殊更に言うまでもないだろう。

(古びた一冊のノートより抜粋)



喉のどの中をとろりとしたものが滑り落ちていく、あの感覚を覚えている。

五日前。深夜の池いけ袋ぶくろでの出来事。

J R池袋駅からやや離れた超高層ビルディングの麓、首都高速道路の脇、それこそ広い公園にも似た風景が広がる広場にて、初めて、蒼銀そうぎんの騎士と相対した時。互いに牽制けんせいが主であったとはいえ間違いなく本気で、殺すために振るう刃ばかりを数合打ち合った後に、ランサーは迷うことなく主命に従った。

主命。父の言葉ではない。

既に神代から遠き西暦一九九一年という現代にあって、父の言葉が聞こえるものか。

英霊として、否、サーヴァントとして、マスターの言葉に従ったまでのこと。

運命の相手であると認識したが故に。聖杯戦争を勝ち抜くであろう、実力と精神の持ち主であると強く理解していたが故に。

恐らく是なる英霊のサーヴァント階位は――

「流石は第一位のサーヴァント」

第一位。すなわちは、剣を操る最優なりし一騎。

見えざる剣を振るう蒼銀の騎士。

過去の生にあっては「あのひと」を置いて他には有り得まい、恐るべき剛剣。

それでいてひどく精確無比。

「さぞ、名のある勇士であったことでしょう」

巨大な槍を手にししながら、そう言って。

体の背後に両手持ちした剣を隠して、槍との戦いに備えて『構える』彼の姿を見つめた時には、その迷いなき一挙一動の示す意味合いを受け止めて、震えかけもした。

「貴女あなたの豪槍も大したものだ、第四位のサーヴァント。ランサー」

「あら、ばれてしまいましたね」

「私と違い、貴女の武器は判りやすい」

「そうですね。そちらの武器は、残念なことに姿を見せてはくれないようですし」

薄く微笑みながら、どうしたら、この会話を長く続けられるだろうか考えて。

でも、そんな時間は訪れず。代わりにもっと甘美な時がもたらされた。全身全霊での激突、爆発的な威力を以て振るわれる槍と剣。膂りょかりよくと魔力放出の二段重ねによってこちらの繰り出す『手』、もしくは爪、断続的に襲い来る五連槍撃をこうも躲かわしてみせる勇士など、ヴァイキングの猛者もさたちにあっても出会えたことはなかった。

終末の氷狼フェンリルの獰猛どうもう極まる顎あぎとにも喩たとえられる槍撃。

試練のためではなく、ただ、殺すためだけのそれを彼は時に躲し、時に防いで。

巨大な槍による連続攻撃を彼は鮮やかに躲し、反撃、一刃。

見事に過ぎた。人型のものとの戦いだけではなく、人ならざるものとの戦いにさえ長たけているのは確実だった。如何いかなる道を、どれ程までの過酷な戦いの人生を歩んできたのか、想像するだけで滾る。昂ぶる。体の奥底で深く深く感じてしまう。

声を漏らしてしまわないようにするだけでも、大変なくらいに。

それでも、感じたままを口にして。嘘偽りなく。感嘆を、夜の風に乗せて。

「……手て強ごわいですね」

「この程度。あまりに単調な攻撃を続けたのは、そちらだ」

「あら、また、ばれてしまいましたね。優しいひと。こちらの心臓を狙ったのは、一撃で終わらせようという慈悲の顕あらわれなのではないでしょうか」

「慈悲などと」

再び、彼は不可視の剣を構えてくれる。

槍と剣との間合いの差を補いながらも距離を詰める方法が在るのだろう。

未だ、彼は手の内を幾らも見せてはいない。だが、それは、ランサーにしても同じことではあった。ただ巨大にして超重の槍を操る程度の女が、人類史にその名を刻む英霊としての存在を成し得る筈などないのだから。

当然、奥の手は在った。

そう――

「優しいひと。優しいサーヴァント。そんなにも優しいと、私」  
まさしく。

何処からか取り出した、いかにも魔術の品じみた小瓶であるとか。

「困ります」

静かに。視線を騎士へと向けたまま。

静かに。想いを騎士へと向けながら。

小瓶に満ちた赫あか色の液体を、霊薬を、一気に呷あおった。

舌に触れて、喉を通して、自分自身の中心に存在していた炎までへも届くように。

情念という名の燃料を注いだ、あの感覚。あの恍惚こうこつ。あの罪悪感。

サーヴァントの身でありながら、生身の肉体を持った生娘のように感じてしまった。

感じて。震えて。

今も、こうして、滾り続けているそれを――どうして忘れることができるだろう。

五日間。ずっと、ずっと、ランサーは感じ続けている。



私の――

このナイジェル・セイワードの生命は、そう長く保もちはしないのだろう。

自らの起源である『執着』の特性を利用して構築した独自の魔術、魔術基盤を利用したの霊薬作成は特筆に値する結果を導くものであり、特に人間の感情を支配する霊薬については最高峰のものを生み出せるという自負もある。故郷英国にあってさえ、こと人間支配・操作に於いては無二の成果を得てきたと断言できよう。

だが、あまりに唯一性・独自性に過ぎることは私自身深く理解するところである。時計塔に於いては時に究極の名誉とも言われる封印指定がもたらされるのも遠い日のことではあるまい。すなわち、私の研究成果は次代に後継されるものではないのだ。

それもやむを得まい。

事実として、私には我が研究を継ぐだけの才能を有した子もなく、そもそも、我が家系と血脈にたゆたう魔術回路と魔術刻印だけでは私の成立させた魔術基盤を継承するには不十分だ。私は、私にしか成し得ないものを成したのだ。

だが、私は未だ諦めきめていない。

我が左肩には、極東都市に眠るという大聖杯より三画の令呪がもたらされた。

聖堂教会の面々の語る言葉のすべてを鵜呑うのみにする訳ではないが、私には、願望機による根源到達への可能性が残されたと言う訳だ。魔術儀式たる聖杯戦争が終了するまでは、時計塔も私を処理することはできまい。

結果として、僅かなものではあるが私には時間が与えられることとなった。

大いに利用させて貰おうとしよう。

私は、此処、極東都市・東京に於いて私自身の研究を完成させる。

人を支配するものは感情であり、故に我が研究のもたらす技術は人の運命を操るに等しく、究極的には人類史にさえ手を掛けて膨大なる運命の渦——多くの魔術師たちが根源の渦と定義するもの——の果て、もしくは源にさえ至るのだから。

辿たどり着いてみせよう。

運命の渦、根源の渦へ。

大いなる皮肉を達成しようではないか。

そう、時に“心理の支配者”とさえ評されるも、こと執着以外の感情というものを真に認識・理解したことがない我が精神。他の誰よりも自在に他者の感情を操りながら、その実、自身は執着の他には何の感情をも得ておらず、他者が具体的に何を感じているかも理解できてはいない、ただ計算し、ただ執着し、ただ予測し続ける機械にも等しいこの私が、大いなる運命の果てへ至るのだ。

感じる喜びなど欠片もないが、それは、何とも——

諧謔かいぎゃくの精神に満ちていると言えるのではないだろうか？



「帰還いたしました、マスター」

声が、反響する。

現代建築なるものの多くを実経験として知っている訳ではないまでも、成る程、無機質なまでに物の少ない屋内というものはこうも音がよく響くらしい。主人マスターが用意した拠点のひとつたる都内千代田ちよだ区のＪＲ秋葉原駅近くの雑居ビルの四階フロアへと足を踏み入れながら、霊体化を解除して仮初めの実体を得ていく舌で、唇で言葉を発しながら、ランサーは僅かに思考する。

玲瓏館邸、夜の公園。

どちらも東京の街にあつては常人の目の届かぬ異界ではあるのだろう。

そして、此处も。正しき物理法則ではなく、時に魔術、時に自分たち英霊の在り方そのままに超常の法則によって支配される空間。運悪く立ち入る者があれば、たちまち命と共にその肉体は消え失せるに違いない。一切の憐憫れんびんなく、感慨さえないままに。

「玲瓏館での戦闘で脱落したサーバントは、一騎のみでした」

手短な報告。

既に、遠隔でのやり取りを可能とする声なき魔術の言葉でのやり取りによって伝えた内容ではあるが、敢あえて、口にしておく。

「バーサーカー消滅に伴い、ライダーは我々三騎に宣戦を布告。尚なお、キャスターは最後まで姿を見せることはありませんでした」

術の英霊が戦闘に参加しなかったという意味ではない。むしろ逆だ。

結界の存在は明確にバーサーカーの不利に働き、ライダーを援護していたと思おぼしい。

「戦闘終了後、アーチャーより一時的共闘の提案を受けました」

「そうか」

部屋の性質によく似た声が返答する。

主人の声だった。

半ば廃墟はいきよであると表現しても決して過言ではないこのビルに籠こもり、フロア唯一の家具である革張りのソファに腰掛けて、長い脚を組みながら思案に耽ふける男。炭化した古き館やかたの破片、触媒を通じてこの身を現代へと召喚してみせた魔術師

。過去を生きたランサーが現代の魔術界限かいはの多くを知ることはないが、恐らく、優秀な男なのだろう。

光源の少ない、ランタンのみで照らされた空間のあるじ。

聖杯戦争を共に戦うことを定められたマスター。

静かに、彼は言葉を掛けてくる。濃色の遮光眼鏡サングラスで瞳を隠したまま。

「お前は何を感じている、ランサー」

「……」

返答はしない。

どうせ、彼の求めている答えなど自分は述べられはしないのだから。

「令呪を使っても構わんぞ」

嗚呼、この、一切の温度を有さない言葉。氷のそれを思わせるほどの視線。

冷徹怜れい惻りというのは彼のためにあるような表現ではないだろうか。

椅子に腰掛けていゝさまは人の仕草のそれであるのに、まるで、ランサーは其処そこに感情の存在を認識できない。人ならざる英霊であるセイバーやアーチャー、あまつさえバーサーカーにさえ感じる事のなかつた不気味を感じざるを得ない。

この男は、人間、なのだろうか。人と認識して良いのだろうか。

ナイジェル・セイワード。

少なくとも名前は人のそれと同じではある。

英国、時計塔なる魔術組織に所属する魔術師。





時計塔に於ける階位は典位プライド。聖杯戦争に於けるマスター階梯かいていは、第二位。

「はい。どうか、マスターのご自由に」

「冗談だ」

「.....はい」

冗談には聞こえなかった。

三十代だという話ではあるものの、俄にわかには信じ難い。

ランサーの感覚からすれば、この冷ややかさは人間が持つ情熱とはかけ離れている。

もしくは、真理を求める魔術師が人間性から乖かい離りしていくのであれば、よほど彼は魔術師そのものであるのだろうか。実際のところ、超一流、天才の域にある魔術師であるのは確かではある。

主として修めている魔術は錬金術だという。

ただし、魔術系統としての錬金術を基礎ベースとしながら、自らの起源に由来する特性を利用した独自の魔術——魔術基盤を成立させることで、人ならざる我が身、エーテルで構成されたこのランサーにさえ通じる霊薬を生み出してみせるその技術を、果たして錬金術の一言で済ませて良いのかどうか。

同じ魔術であっても完全に系統の異なるわざを修めた身であるランサーには、召喚されて既に数日が過ぎている現在でも判断が付かない。

幾らかの言葉を交わしても、時を過ごしても。

分からない。

それは、彼が既に人ではない故か？

それとも。ランサー自身がその出自ゆえに人間を深く理解できないためか？

——いいえ、いいえ。過去の私が出会った人々には、確かに、感情が在った。

だからこそ“あのひと”は非業の最期を迎えるに至ったのだから。

そして、この自分自身さえも。

「正しく尋ねよう。霊薬は、正しく効果を顕しているか」

マスターからの再度の質問。

忘れえぬ炎が如き、かつての生での出来事へと意識を向けかけたところに。狙い澄ませたかのように突き刺さる。お前がお前自身を覗のぞき込むのは、自分の許可の下でなくてはならないと突き付けられるような感覚は、きっと、錯覚ではないのだろう。

「はい」静かに、頷うなずく。

「それでいい。お前の宝具は、それでこそ最大限に効果を発揮するのだから」

「はい」瞼閉じて頷く。

「佳し」

視線をこちらへ向けることなく、彼は頷く。

その言葉の大半が独り言に過ぎないことを、ランサーは既にある程度理解していた。

「伝説に在りしものを宝具と呼ぶならば、是は宝具にさえ肉薄するだろう」

「……はい」

人の身で宝具そのものを造り出すことはできまい。

だが、肉薄。そういった表現であるならば必ずしも否定されるものではない。

実際のところ、現在、ランサーの精神は大いに軋きしんでいる。

あの池袋の夜、刃と言葉を交わしただけの相手に過ぎないセイバーの横顔を僅かに思い浮かべただけで、魔力放出による炎が雑居ビル全体を灼やき尽くしかねない程度には、自分の狂気は加速している。初日ではこんなことはなかった。二日目、三日目と日を経る毎に、想い、炎、どうしようもなく募り続けて。

軋む。

歪ゆがむ。

炎は際限なく熱を高めていく。

いずれ、この裡で滾りきったそれは中天の陽をも超えるだろう。比喻ひゆでなく。

——嗚呼、ほら。今も。私は困って。私はひび割れていく。

「……次の御命令を。マスター」

「私から言うことは特にない。お前は既に、あの日、あの夜、最強であるとお前が認めたサーヴァントの前で霊薬を飲んでいる。お前がそう判断したのなら、セイバーは間違いなく最後の一騎として勝ち残るさ」

命令を。くれない？

なら、自分は内側から壊れていくしかないのか。

瞼を開いたランサーは再び見る。遮光眼鏡越しに突き刺さってくる、氷が如き視線を。

「その時まで、せいぜい感情を育てておけ」

「はい」

——嗚呼、嗚呼。人間よ。魔術師なぞを名乗る人間の亜種なるものよ。

ならば言うがままにしよう。

そうするために召喚されたのが我が身であれば、そうされる他に道はないのだから。

機械のように、人形のように。裡の炎に耐えながら。

ただ、ただ、今はこうして薄暗い部屋の中で頷いてみせよう。



令呪の使用について。

令呪とは、聖杯によって魔術師マスターへと与えられる全三画の絶対命令権である。

是は、サーヴァントの能力如何に関わらない空間跳躍のように——

時に魔法に近い行為さえ可能とする絶大な魔力を秘めた存在ではあるが。

此处ではその使用法について述べる。

大聖杯と令呪の関係と機能性については他頁を参照せよ。

令呪の使用法は大きく分けて二種類。

第一に、絶対命令。

独自の精神を有するサーヴァントが禁忌とする行為さえ強制することができる。

例えば殺人そのものを禁忌とする英霊に、殺人を強制することが可能となる。

第二に、能力強化。

効果はあくまで一時的だが、サーヴァントの能力を大幅に強化することが可能となる。

本来のステータスであれば突破し得ない対象をも、破壊可能となるだろう。

後者は単純に戦術的理由で使用の如何を決める他ない。

前者については、是は、戦略的な観点が自おのずと必要になるだろう。

例えば行動方針が英霊と魔術師とで大きく異なる場合だ。

令呪使用による行動の強制もやむなしという局面も十二分に有り得るだろう。

ただし、その場合、相互の関係性が悪化する可能性については先述した通り。

決して推奨されるものではないが――

決定的な局面での令呪使用による関係悪化というリスクに比べれば、聖杯戦争序盤、召喚時等、全体の行動方針として一画を使用するという手も有り得るだろう。

特に、主従の性格が明確に不一致であった場合である。

先述してきた関係性の構築というポイントからは大きく逸脱する行為ではある。

尚且つ、主従の不一致、乖離の度合いによって必要となる令呪の画数は変わるだろう。

故にやはり、この手段は推奨されるものではない。

(古びた一冊のノートより抜粋)



——そして、玲瓏館邸での狂獣脱落から二日の後。

長い長いランサーの髪を潮風が揺らしていた。

独特の臭気の満ちる場所だった。

超高層ビルディング群の生み出す影は、天上の宮殿もかくやと思わせる程であるのに。

遙かなる神代からの歩みの果てたる消費文明に生きる現代の人々の営みがもたらすものが斯か様ような海洋の汚濁、大気の汚染であると知ったなら、果たして、すべてを見通す叡えい智ちを備えた大いなる父は何と言っただろう。

疑問への返答は、何処からももたらされることはない。

既に白鳥が如き礼装はこの身になく、古きルーンを以て代用するばかりのランサーは父の声を聞くことは叶かなわない。故に、ただ、寄せては返す波の音を聞く。

コンクリート製の大地に打ち付ける、太洋の一部が砕ける音を聞く。

東京湾上神殿決戦、当日。

荘厳にして巨大なる複合神殿体の姿を彼方に望む東京臨海区域ウォーターフロントにて。

海辺に佇たたずみながら、じっと、見つめていた。

古くも尊き異郷エジプトの神々の威光がかたちになったが如くして東京湾沖十数キロメートルに聳そびえ立つ、神殿の群れ。大いなる父を始めとする多くの神性の祭壇を目にしてきたランサーにとっても、それは、異形の光景ではあった。複数の超巨大建築物が複雑に組み合わさった姿は、一口には形容し難い。洩神とくしんと捉とらえる者もいるだろうが、あれには揺るぎないまでの輝きが仄ほの見える。ならば、常人には理解し難いまでのライダー・オジマンディアスの誇りと神々への想いこそが形態かたちを成したもののか。

視界の中心に四角錐ピラミッド型の主神殿を捉えつつ、ランサーは目を細める。

見えずとも分かる。分かってしまう。

本来の感知能力からは遙かに離れた距離であっても、絶対に、あそこにいる。

この胸の裡を昂ぶらせ、滾らせ、燃え上がらせるひとが――

「……………」

声ならず、言葉ならず。

その仮初めの名をランサーは舌の上に載せる。

セイバー。サーヴァント階位第一位。

この聖杯戦争に於いて、この人物こそがそうだと自分が見初めた相手。

既に、自分たちに先んじて固有結界の塊たる神殿体へと上陸しているに違いあるまい

。

「見たか、あれ」





傍らからの声。

霊体化を解いて実体を見せながら、アーチャーがもたらしたものだっただ。

警戒はしても殺意は向けない。片手に持った重量五〇〇キログラムの巨槍の穂先を向けることもしない。マスターであるナイジェルの許可の下、ランサーは弓の英霊から持ちかけられた言葉を受け入れていた。協定。一時的な共闘。強力に過ぎるオジマンディアス陣営の打倒のために。

「ライダーの野郎、横須賀あたりにいた軍船を幾つか沈めたぞ」

船舶用の係留索ビットに腰掛けながら、アーチャーは同じ方向を見ていた。

その視線は並の英霊を遙かに超える性能を持っていると思しい。対城宝具の真名解放と思しき先刻の激しい発光、魔力光の投射、何らかの攻撃行為であるとは思っていたものの、まさか当代の人間の軍隊へ向けてのものとは、ついぞランサーは予想だにできなかった。

思わず、絶句する。

その暴威の容赦のなさに。決断の迷いのなさに。

神秘の隠匿は、まず、聖杯戦争の大前提である筈なのにこうもあっさりと――

「何か、理由があるんだろうさ。偉大なりし太陽王はナルナ人びとには厳しくあたっちゃいたが、そうそう殺戮さつりくを楽しむような奴じゃない。東京を焼き尽くすなんざ、まかり間違っても思い付きで口にはすまいよ」

「詳しいのですね」

「アイツとは同世代だからな、俺」

さらりと言った。

あまりに自然な語り口であつたものだから、思わず、不意を打たれた。

ぞくりと、ランサーの背筋を駆け抜けていくものがある。巨大な自信に対して震えるような悪寒や戦慄せんりつではない。恍惚だ。悦楽だ。一時とはいえ自分が共闘を選んだ相手が、こと決戦にあたって真名への手掛かりを口にすることさえ厭いとわぬ、紛まごうことなき勇士であるという確信が生んだ、昏くらい冥界めいかいに属する快感だった。

「んで、セイバーはアレに向かったようだ。わざわざ死地に飛び込むとはなあ」

「ええ」

「聖杯戦争ってのを重視するなら、ここはセイバーとライダー、二大英霊の激突とそれに伴う疲弊って奴を待ってから参上してウマいところをかつ攫さらうところだが」

「ええ」

—でも、貴方はそうしないのでしょうか？

そう、言葉を続けそうになるのを堪こらえる。

声にはしない。必要がない。何故なら、この東京湾上神殿を前にして、こと聖杯戦争のためだけに神殿体を目指す者などは自分以外にはいないのだから。キャスターやアサシンは決して、あそこへ赴くことはないだろう。

敵地。死地。

わざわざ乗り込もうとするのは、ある意味では愚の骨頂なのだから。

「……奴セイバーが、単身で飛び込む理由が分かるか？」

「ええ。困ってしまいます」

短く頷く。

この七日間想い続けた相手のことは、手に取るように分かる。

或あるいは妄想か。いいや、ランサーはそうは想わない。ありのままに信じるまでだ。

何故なら—

「彼は、この東京の人々を救うつもりです。聖杯の如何に関わらず。

そういうひとです、あのひとは……」

東京を救う。

そう、本気で考えて行動してしまっているのだろう。

このアーチャーにしても同類だ。二日前に命を落とした狂獣とそのマスターも、以前には似たようなことを言っていたように思う。人々を、とか。東京を、とか。その時には勇士の魂を感じることはなかったし、愛らしいことを言う子供が無慈悲にも聖杯戦争に巻き込まれたのだろう程度にしかランサーは認識していなかったけれど。

余程、この都市には志ある者たちが集うのか。

ああ。嗚呼、違う！

根本的に何かが大きく違う！

そうか、もしくはこれが聖杯戦争か。かつて人を救った英霊たちが我欲がために殺し合う魔術儀式、輝きの館より墮おちたる魂が如き卑しさの極みとも一度は感じたし、そうであるに違いないとこの瞬間まで漠然と認識してはいたが。

—違う。違う。きっと、そうではない。

卑しくなど在るものか。

これを、人は尊さと呼ぶだろう。誇り高さとも。

—墮ちているのは、やはり、この私だけなのでしょうね。

世界からは反英雄と見なされずとも、正しく人々のため命を費やした勇士などとは到底呼べない、この自分自身。対して彼らの在り方はどうだ。叶わぬまでも諦めず、何かを遂げようと戦い続けた一騎と一人、手の内の一部を明かすという悪手あくしゅを選んでまでも共闘を呼び掛けた一騎、そして単騎、脅威の要塞ようさいたる神殿体へ向かった蒼銀の騎士！

「ああ……」

人を救わんとするもの。

数多あまたの人に望まれたであろう栄光と誠実のかたち。

それこそ、過去の自分が求め続けた輝けるもの、勇士の魂だったのではないだろうか。

嗚呼、それは何と美しく、何と儚く――

「なんて、愛おしいのでしょうか。英雄あなたたちは」



Dear My Hero ACT-3

何を、自分の主人マスターが考えているのか。

優れた「目」を持つアーチャーにとっては文字通りに一目瞭りょう然ぜんではあった。

彼方かなたへと放たれる矢の一撃を見通す目。

敵味方問わず万軍の有り様を見渡す目。

野を、山を、獣を、地上に在るすべてを迅はやき弓兵の黒き双眸そうぼうは映し出す。

物質かたちを。精神こころさえも。

英霊ならざる生身の人間として生きていた頃、竜殺しの直系たる大王マヌーチェフルは言った。お前の肉体は旧ふるき神代より時を超えてもたらされた恩恵であり、替え難き至宝であり、であるが故にその目もまた常ならざる力を有しているのだと。

成る程、と端的に返答してしまったことを彼は覚えている。

偉大な王の言葉を前に、恐悦を示すべきところを素直に頷うなずいて無礼な言葉をひとつ。

それは生涯に於いて恥ずべき言動のひとつではあったが、大王は寛大な御心を以もって彼を許したもうた。旧くも恐るべき力を有して生まれ出いずる者は地上に数少なく、この時代、大王の他にはおよそ存在していなかったことも理由のひとつだろう。

大王は彼をある種の友、もしくは同類とみなしていたのだ。

優れた統治者にして武人であった大王を僅わずかに想いながら、アーチャーは、西暦一九九一年に自らを英霊として召喚した現在のあるじを見る。

魔術師。かつては一子を有する母であった女、エルザ。

拠点として使用している都内千代田区御茶ノ水、山の上ホテルの一室。遠慮がちに緑を揺らす庭付きの四〇三号スイートの一室で、霊体化を解除したエーテルの肉体をソファに預けながら、真正面のソファに腰掛けて思案するエルザの姿を視界の中央に捉とらえつつ。

かたちが視みえる。佳い女だ。浮かべる笑顔が特に佳い。

こころが視える。佳い女だ。聖杯に願うそれは、決して、浅ましい我欲ではない。

エルザ・西さい条じょうの何もかもを、アーチャーは識しることができる。

が、決して言葉にすべきではない。

ある意味では、無理矢理に服を剥はぎ取って裸を眺める以上に、自身の視線は礼を失したものであることを彼は理解していた。だからなるべく、識らないようにする。

礼を以て相対すべき人物には、特に。

「.....アーチャー」

呟つぶやく声が聞こえる。

第二の主人たる女のそれは、第一の主人であった王には程遠い。

戦い、裁き、治め、君臨する王者の気風を余人に求めるのは酷というもの。無論、アーチャーもそれをエルザに求めはしない。召喚の儀式を通じて出会い、主人と認め、願いと想いを認め、共に戦うと決めたならば、あとは寄り添い歩むのみ。迷いはない。

そうとも。

迷いなど、寸分も在りはしない。

「どうした、マスター。今まで聞いた中で一番浮かない声だ」

「そうかな」

「ああ」

百の笑みとは言わないまでも柔らかく微笑みながら、頷いてみせる。

この先に行われる会話のすべてを把握しながら、そう悟らせないように注意しつつ。

「迷ってんなら相談は受け付ける。いつでもな。俺はお前のサーヴァントで、それ以上にお前って人間のことが気に入ってる。頼み事だって聞いてやるぜ」

「本当に？」 翠みどり色の瞳がこちらを見ない。エルザの視線は床を舐なめていた。

「俺はあんまり嘘は吐かねえよ」

「あんまり、なんだ」

少し笑う。ああ、少し、か。

予想されていた通りではあっても多少気分が落ち込んでいくのは仕方ない。

できれば、いつも笑っていて欲しいとアーチャーはささやかに思う。エルザだけではなく、悪を避けて善を成さんとするすべての人が、命が、こころが、幸福と安寧の中にあればどれだけ素晴らしいことかと思考の端で考える。

世界が、決してそれを許さないのだとしても。

「有言実行っていうんだろ、この国の慣用句。俺はそういう風に在りたいが、まあ、さすがに全能じゃあないからには時には結果的に嘘も吐くさ」

「そっか。だから、あんまり嘘は言わないのね」

「そういうこった」

更に頷く。

会話は一端、そこで途切れてしまう。

似たような気配があった。五日前、バーサーカーのマスターと思おぼしき少年の魔眼に不意を打たれて幾つかの言葉を掛けられた直後のエルザが纏まっていたものと。三日前、奥多摩山中でセイバーのマスターと接触した時の彼女よりは多少ましではあるが。

無言で、エルザの横顔を見つめる。

母であったとは到底思えない程に、少女らしさを色濃く残した女の顔。

其処そこには確かな陰があった。

(……あの時、奥多摩でお前の何かが折れた。お前は、憑つかれた)

強く意識せずとも読み取れた。

エルザ・西条という魔術師の何かが致命的に欠けたであろう、あの日、あの時。

言葉なく立ち尽くし、ただただ鳴お咽えつし続けるエルザの細い肩を抱いた、あの時。

何があったのかをアーチャーは尋ねなかった。

この三日間、ずっと。

自分が口にすべきではないと考えたし、踏み込むべきではないと考えた。彼女自身が考える事柄だ。たとえそれが、聖杯戦争の趨勢すうせいを左右する要因になろうとも

――

(お前が決めろ。エルザ。

お前は、生きていく。この戦いの後も、お前の人生ってやつは続くだろう)

その決意が、自分という英霊サーヴァントの行く末を定めるのだとしても。

助言はしない。

誘導もしない。

ただ、アーチャーは待つだけだ。現在にかたちを成した仮初めの客として。

正しくこの時代を生きる人間が、自らの行き先を決めるまで。一〇分でも一時間でも

。

まずは一秒。そして二秒。三秒。



「東京を、救って」

一〇秒後だった。

エルザは、やや伏し目がちではありながらも瞳をアーチャーへと向けてそう言った。

視線と視線が交差する。呼吸半分程度の沈黙。

ああ、満足の行く返答だった。少なくとも自分で決めたのだ。たとえ、世界そのものにも等しい何かによる干渉があったのだとしても、其処には確かに、五分後の地獄を世界に感じ続けて来たエルザ・西条の感情と意思とが存在していた。であれば、悪魔ドゥルジの囁きさやきの果てに紡がれた言葉であろうと、彼は大いに支持する他ない。

それに、発せられたその言葉の内容。

忘れる筈はずもない。

「あの坊主の言葉だよな、エルザ」

「……ええ、そう。タツミ。バーサーカーのマスターだった男の子」

言葉は過去形だ。既に聖杯戦争から脱落したと思しい、この東京に暮らしていた青年。

五日前の秋葉原で遭遇した時、あの青年は言ったのだ。

東京を救いたい。

聖杯戦争を止めたい——と。

「あの子ね……街を、人を救いたいいって言ったの。信じられる？ あたしが魔術師だって分かってるのに、聖杯戦争の参加者だって分かってる筈なのに、そう言ったの。友達がいるから、好きな子がいるから……どうしても、聖杯戦争を止めたいって」

「へえ」

「笑わないのね」

「笑うもんかよ。そりゃあ本来英雄おれたちが口にすべきもんだ」

言って、今度こそ百の笑みで笑う。

上々だ。通常の魔術とはまるで桁けたの異なる精神への浸食に耐えながら、亡くした我が子とあの少女とを混同するという脳の異常を堪こらえながら——人格が奥底から丸ごと細切れになりそうな程の苦境に在って尚なお、悲鳴のひとつも上げず、助けを求めず、ただ一度の嗚咽のみで乗り越えて、その回答を自分自身で導き出せたのなら。

この弓兵の第二の主人に相応ふさわしい、誇り高き結末だ。

讃たたえよう。喝采かっさいを送ろう。

進んで弓を引こう。

お前のために、お前たちのために！

是これより我が身は、現界せし最強の敵たるライダー、古代エジプト史に燦然さんぜんと名を残せし光輝の神王オジマンディアスを高らかに名乗って英霊五騎に宣戦を布告したかの者が座す大神殿へと赴こう。理由定かならざるまでも、極東最大の都市たる東京を総数一千万以上の人々ごと焦土に変えると宣のたまったファラオを、見事、討ち果たしてみせようとも！

そうとも。

英雄は、人を助けるために在る。

「アーチャー、あたしは——」

「言うな。お前は決めた。俺は頷いた。こういうのはな、あれだ。これでいいんだ」

——現在時刻より、およそ半日前。東京湾決戦当日朝の会話であった。



絶対絶命の窮地ではあった。

セイバーと互いに共同戦線を張っているにも関わらず、劣勢ここに極まれり。

時に一九九一年、二月某日。深夜。

東京湾上決戦——

星なき夜空を吸い込むかの如き黒き海上に展開されたライダーの大宝具、無二の固有結界たる『光輝の大複合神殿ラムセウム・テンティリス』、その大回廊。死地であり敵地である其処へと、弓兵、槍兵、剣士、すなわち“三騎士”と呼ばれるサーヴァント三騎は招かれるがままに自ら侵入していた。言うまでもなく、考えるまでもなく、あらゆる事象がライダー有利として働くごく強力な結界内であることは明白ではあったが。

まさしく、敵の掌中。

この場合は腹の中と称したほうが正しいだろうか。

神王ファラオの心象風景を具現せしめた固有結界はまさしく神代の具現。群れを成して襲い来る人面獅身獣スフィンクスはすべて不死、無限の再生力を持ち、そして大神殿の主あるじたるライダー・オジマンディアスにしても同じく！

不死。不倒。

千里眼スキルの自律的稼働による敵位置の精確把握、及び、セイバーが有する風の魔力インビジブル・エアの解放による助力を受けながらアーチャーが放った必殺必倒の矢は数十枚に及ぶ神殿内壁を貫通し、遙はるか一キロメートル先の主神殿へと到達。並の対軍宝具をも無傷で跳ね返すヒッタイトの神鉄で覆われた主神殿外壁を砕き、堂々たる態度で玉座で待つライダーの心臓を、霊核を、狙い違たがわず串くし刺ざしにしたが――

神王は斃たおれない。

瞬時に、再生が果たされるのみ。

フィルムに焼き付いた映像が逆しまに流れるようにして。

「はははははははははははははははははははははははは！ 無駄！ 無為！ 無謀！ 無様ア！

余は死なぬ、余に傷ひとつ付けられはせんとも、嗚呼ああ――身を以て知るがいい！」

まざまざとアーチャーは視る。

千里眼はすべてを伝える。

主神殿に座して哄こう笑しょうする神王の無敵、無限再生を可能とする宝具の絶対を。

それは古代の神々がもたらす加護か、それとも、生まれながらに神々を裡うちに持つというオジマンディアスというファラオの力か。永く大地を統べて、王にして神、神にして王たる身を新たな信仰として昇華させたという大英雄の在り方か。多くの王を知るアーチャーではないが、成る程、ライダーの在り方は他の王とも異なるものではあるのだろう。

強大。無敵。そう讃えるべき相手ではある、が。

屈しはしない。

諦あきらめるには、まだ、些いささか早すぎる。

見る者が見れば、十中八九、最も早はや、大神殿に入り込んだ三騎が命を失うのは時間の問題であると評価するだろう。アーチャー自身も劣勢、危機は大いに認める所ではある。

槍の女ランサーは当初こそ協力的な姿勢を見せていたが、獣どもが三度目の完全再生を果たした直後に何かを囁きながら姿を何処かに消して、安否は不明。総勢七体に及ぶ神獣は未いまだに襲撃を続けており、弓と剣の二騎はその終わりなき迎撃に追われている。ライダーへの狙撃は状況打破のためのとっておきだったが、それも敢あえなく潰ついった。

これが国同士のいくさであるならとくに王へ撤退を進言している。

だが。

是は、些か違う。

此処ここには守るべき兵や民ひとびとはいない。

王の他には自らのみであった筈の自分自身と同じ、剛力無双の英雄だけが――在る！

「セイバー！」

魔力を伴って赤熱化したスフィンクスの鉤爪かぎづめを皮一枚で躲かわしながら、もう一体が吐き出す火炎の嵐ファイアストームを五十本同時射出の矢で掻き消して、剣の英霊へと声を掛ける。言葉を発した次の瞬間には、もう、アーチャーの姿は大回廊の天井、石床からおよそ十メートルの高度に在る。

「まだか！」天井へ軽やかに着地しながらもう一言。

「あと数分」風の鞘さやから解き放たれた黄金の剣で神獣を屠ほふりつつ、セイバーが応こたえる。

「……そりゃあまた、随分と無茶を言うもんだ」

英霊の身になれば、本来、地上に敵など存在しない。

神話の具現とさえ称されるサーヴァントはあらゆる生物を超越し、強力な現代兵器を前にしても一方的殺戮さつりくを可能とするだろう。しかしこの神獣の群れ、一体一体が英霊のそれに匹敵しかねない神秘と幻想を有して吼ほえ狂う王権の実行者、炎と嵐の象徴にして破壊の申し子たるスフィンクスが相手となれば話は違う。コンマ一秒たりとも気を緩めれば、その牙きば、その爪は、エーテルの肉体を以て現界する英霊の霊核を容易に砕くだろう。

既に、神殿上での戦闘が開始して三〇分以上が経過している。

神獣に対する回避行動、攻撃行動、すべてが掛け値なしの全開だ。英霊自身が有している魔力が如何いかに強大であっても、その維持と活動を司つかさどるのはマスターである魔術師の魔力、つまりは人間の魔術回路に他ならない。

果たして何処まで保もつものか。

エルザは、恐らく都内で急激な魔力消費に喘あえいでいるに違いない。

加えて、大神殿に満ちる神威——古代エジプトの神霊に類するものと目される呪じゅ詛そは、ただ存在するだけでアーチャーやセイバーの四肢を蝕むしばむ。まっとうな生物であれば二秒と経たずに致死するだろう各種の毒素が充満して肺はい腑ふを抉えぐり、能力値パラメーターは軒並みランクダウンし、時にはスキルも弱体化させられてしまう。

（毒で指先が痺しびれる、なんざ初めてだな。俺は）

伝承に残る通り、アーチャーはあらゆる病と毒に抗あらがう肉体を持つ。

であるにも関わらず、口元からは一筋の赫あか色が落ちる。肺が焼けている。黄金の剣が纏っていた風の魔力を失ったセイバーも、恐らく同じ状態だろう。あらゆる動作速度が一段階落ちているのが分かる。

「ま。やるしかねえなら、やるだけだ」

短く言って。

戦闘続行。距離を取っての狙撃、等が行える状況ではない。超接近での乱戦だ。

神獣の爪と牙をかいくぐりながら獅子ししに似た体たい軀くを駆け上がり、魔力で精製した矢を右手に握りしめ、迷わず巨大な人面に叩たたき付ける。目を抉り脳を貫き、霊核をたちまち破壊。これで仕留めたのが合計何十体目なのかはもう数えない。

続けて迫る二体の獣はセイバーに任せ、自分は更に後続の三体へ矢を放つ。

敵の一撃を受ければ致命傷となる。故に、すべての攻撃は弾はじくか、躲すか、こちらへ届くより先に撃滅する他にない。外観上は無傷での戦闘が続くが、やはり、当然消耗する。

（数分保てばこりゃ、奇跡だな）

そう、内心でひとりごちながら——

限りある魔力を磨すり減らしつつ。

限りなき闘志だけを頼りとして。

弓兵は、その時、剣士と共に奇き蹟せき許されぬ大神殿の裡にて、まさしく奇跡を成した。

——百八〇秒の死闘を戦い抜いて。

——数千の死線を、見事、くぐり抜けて。

「二秒後に、それ、使ってくださいね」

女の声がした。

セイバーが頷くのと第一の衝撃が訪れたのは、ほぼ同時だった。

大神殿全体に響く轟音ごうおん。大地震と紛まごう程の震動は、神殿大回廊に聳そびえる巨柱に僅かな亀き裂れつを走らせる。神獣の群れが怯ひるむ。この目によって予想された絶好の機会が唐突に訪れたのだと、アーチャーは直感的に理解した。

それが姿を隠していたランサーの宝具たる“槍やり”の一撃であると、彼は知っている。

それが古代の神々の神威たる呪詛を僅かに歪ゆがませる一撃であると、彼は知っている。

声が響いてから、一秒。二秒。

セイバーが床へとひとつの宝石を——最高純度の“賢者の石”を叩き付ける。

言葉で説明された訳ではない。一度も、剣士はそれが何かを言わなかった。だが、アーチャーは理解できる。目にしたことはなくとも、誰かに教えられた訳ではなくとも、万色に煌きらめく宝石がもたらす絶大極まる効果を把握できる。つまり、ほんの一瞬とは言えども大神殿に備わる神威の中でも最も厄介な宝具封印を中和する能力！ 神々の呪いを打ち消す、錬金術と呼ばれし魔術の奥義！

（……よし）

運命の時が来た。

隣では、セイバーが黄金に輝く剣を両手で大きく振り上げ始めている。

光の粒子が徐々に周囲へと立ち込めていく。

何と言う美しさか。あまりの魔力量の凄絶せいぜつさに対してか、剣に込められた栄光に対してか、獰猛どうもうにして暴虐の権化である筈の神獣たちが畏おそれを感じて竦すくんでいる。この状況でなければ、自身も心ゆくまで見届けたいところではある。

さあ、こちらも始めるとしよう。この五体に残された力のありったけを注ぎ込む時だ。

せいぜい、思い切り。

全力でやってやろうじゃないか。

——真紅の大弓を、大きく、大きく、アーチャーは引き絞る。



時、同じくして。

主神殿にて悠然と座す神王オジマンディアスは、その右手を挙げていた。

果たしてこの大神殿内部で何が起きたのか、一体何を侵入者たちが狙っているかは自明であり、この瞬間に行うべき対処もやはり明らかではあった。静かに、冷ややかに、神王は戦闘の終しゅう焉えんを予感する。

光輝の大神殿への招しょう聘へいに応じたセイバー、アーチャー、ランサー。

いずれも勇猛果敢な三騎ではあったが、これで終わりだ。

成る程。ランサーの宝具は本来何処かの神の所有物であったか、もしくはランサー自身が元は強力な神霊の類たぐいであったか、兎とも角かくも宝具封印を免れていたと思われる。その渾身こんしんの一撃を以て大神殿を揺るがし、小こ癪しゃくにも協定を破った術の英霊キャスターの小細工とを重ね合わせることで剣と弓の宝具を一時的に呪詛から解き放ったのだろう。

「僅か数秒とはいえ、余の神威をこうして打ち破ってみせる」

口元を僅かに歪ませる。

それは笑みだ。

強者を讃える表情であり、勝利を確信する表情でもあり、そして。

絶対の力を振るう王者の表情でもあった。

「当代の聖剣使い。そして、音に聞こえしパルスの弓兵よ。

見事な叛はん逆ぎゃくではある。ならば、王の中の王たる余も全力を以て応えねばなるまい！」

上下エジプトを支配した過去、生命漲みなぎる肉体を伴って地上に在った頃であれば、勇士たちを讃えて自軍の将として迎えるという選択肢もあったろう。神王は寛大である。たとえ神に刃やいばを向けた者であろうと、神王は戦士たちを赦ゆるしたもう。

だが、此度は赦されない。

聖杯戦争という魔術儀式によって召喚された英霊であるが故に？

否。断じて、否。

地上に再び光臨を果たさんとするファラオとして、世界を救うため、為すべきことを為すに過ぎない。一千万を超す無辜むこの民が命を落とすとしても、大聖杯を片手に揺らす世界を喰らう女神ポトニアテローンはず誅ちゅうさねばならない。是なる行為を阻まんとする者は何人たりとも赦さず、完全に、その存在は問答無用に蒸散させるまで。

既に奥多摩に隠れ潜むマスターは命を落としたようではあるが、都内各所に存在する伊い勢せ三み一族の施設から供給される魔力は僅かながら存在している。皇帝特権スキルに頼る真似は神王としてそう喜ばしくはないものの、残存魔力とスキルを併用すれば、神殿の三騎を斃し、東京を灰燼かいじんと変えて聖杯を手にするのには十分な時間が確保できよう。

「……アメンの愛よメエリィアメン」

断罪の宣告。

右手を下ろしながら、ただ短く。

宝具の真名解放ではない。

既にそれは、この巨大なる神王の心象の園たる大神殿を出現させた時に終えている。

故に是は、やはり、断罪なのだ。

主神殿に搭載された超絶の神威を示す“デンドラの大電球、が——横須賀沖に在った米海軍太平洋艦隊イービス艦数隻を消し飛ばした際と同じ輝きを、中天より来たる灼しゃく熱ねつを、人が抗うすべを持たぬ太陽の怒りを、支配者による断罪の雷いかずちを交えて。再度。

慈悲はなく。しかし、慈愛と共に。

愚かしくも神に背きし英霊三騎を完膚なきまでに屠らんとして。





『アーチャー……お願い……！』

錯覚の類ではない。

明めい瞭りように、エルザの言葉はアーチャーの許もとへと届いていた。

遠方、都内某所からの声。契約を結んだ者同士が行い得る声なき声による対話のすべ。

この利せつ那な、残り僅かであった魔力は瞬時に増大していた。令呪、同時三画の使用。大聖杯からマスターへもたらされた契約の証あかし、サーヴァントへの絶対命令権を示す令呪は、魔術師の有する貯蔵量を遙かに超える魔力の結晶は、時に、極めて強力な武器となる。

たとえば、今この時。

宝具の真名解放を促す絶対命令。

そのまま従い宝具を使用すれば、従来のそれを超えた威力を発揮するだろう。

「陽のいと聖なる主よ」

限界以上に弓を引き絞った状態で、全身に満ち渡る魔力を感じながら言葉を紡ぐ。

自然と、唇が開いていた。是を言うのは二度目になる。一度目は、尊くも儚はかなき神代を終えて人の世となりしペルシアパルスの大地上にて。悪竜を打ち倒した勇者の直系たる偉大なる大王マヌーチェフル配下の弓兵としての人生の最期を飾った、是は、祈りの句だ。

「あらゆる叡えい智ち、尊厳、力をあたえたもう輝きの主よ」

想えば、そう。

最期のために積み重ねてきた生ではあったか。

およそ人の世に相応しくない、神代の名残とも言うべき絶大な力を持って例外的に生を受けた身は、最強の英雄として在ることを定められていた。

英雄として多くと戦った。多くを殺した。

大王の指揮の下、トゥルクとの六〇年にも及ぶ戦いを終えるために矢を放ち続けた。

「我が心を、我が考えを、我が成しうることをご照覧あれ」

そして、その時は来たのだ。

血塗られた戦いの日々を終える時、両国の民が待ち望んだ瞬間が。

マヌーチェフル王の軍勢を取り囲んだトゥルクの將軍フラスィヤーブは、それぞれの王国の境界線を定めることで戦争の終結は成されると告げて、大王はそれを承諾し、境界を作るという大役をこそ自分が務めることとなった。

無論、忘れる筈もない。

祈りの後に放った一矢には願いが込められた。

あまりに長い戦いに疲弊しきった民の、戦士たちの、その妻子たちの、その父母たちの、その友たちの、属する国の如何いかなを問わぬありとあらゆる平穏への願いが託されて。それを、きっと自分は成し遂げた。

『アーラシュ！』

「おうよ」

ああ、エルザは泣いているのだろう。

喉のどや舌を使う訳でもない声なき声が、ひどく揺れていた。

真名で呼び掛けられるのは、もしかすると、これが初めてだったかも知れない。

(泣くな。いいさ、お前は間違っちゃいない)

通話用ではない部分の思考で呟きながら、弓を、更に引き絞る。既にセイバーは真名解放の準備を終えている。周囲に満ちる光の粒子と共に高まり切った魔力は壮絶の一語であって、その中心で輝く黄金の剣は——少なくとも対城宝具級の威力を秘めている。



けれど、足りない。不十分に過ぎる。

主神殿からオジマンディアスによって放たれる中天の砲は、こちらの宝具解放に重ねるが如くして放たれんとする太陽の灼熱は、あまりにも強烈だ。全力を以て放たれば、恐らくは東京全土を炭化させるに十分な熱量を有している。外界に干渉を果たす固有結界という異常事態が導くものか否か、その威力は規格外にも程がある！

だからこそ自分がいる。

規格外たる神王の力を察知する双眸を持つ、自分が。

それに抗し得る可能性を持つ宝具を有する、自分が。

或あるいは、黄金なりし聖剣がまっとうに真価を発揮すれば話は違うやも知れない、否、十全の状態であればおよそ不可能など有り得まいが、この局面で使用しないのならば、それはないのも同然だ。まさか頼りにはできない。

ならば、そう。やはり過去の時と同じだ。自分が為すべきを為そう。

「さあ、月と星を創りしものよ。

我が行い、我が最期、我が成しうる聖なる献身スプンタ・アールマティを見よ」

祈りと共に、神に捧ささげし大弓を。引き絞って。

葦あしの矢を放つ。

苦しみの戦いを終わらせるための、救世の一矢を。

「——流星一条ステラ!!」

それは、遠く数千年の時を経て尚も西アジアの人々の記憶に深く残された絶技。

正しく人として生きる者たちの誰もがおよそ成し得ぬ、神代の名残を有した身こそが成し得た願いのかたち。奇くしくもそれは、時をほぼ同じくして、エジプトに顕あらわれてナルナ人びとを率いたという聖者モーセが行った奇跡にも似た、大地を割る一条の光。

大海を割る聖者の奇跡ならざりし、其それは、大地を割る弓兵の願いの果て。

二五〇〇キロメートルにも及ぶ、極大射程攻撃。

かつてダマーヴァンド山から東へと放たれた矢は、遙か彼方たるオクサス川へと到達し、その後、矢によって分割された大地は二千数百年に及び国境として機能したという。

大地を割り、二国の争いを終焉させ――

長く続く平穏のための新たな国境を定めた超常のわざ。

それは今、此处で、光輝の大神殿に再臨せし神話・伝説・伝承の戦いに幕を下ろすのだ。

聖剣の輝きと重なり、合わさって、眩まばゆき流星と化して。



先述した通り、宝具は絶大な存在である。

英霊の伝説の具現とも言える宝具に込められた神秘はあまりに凄すさまじい。

真名解放が成された場合、攻撃型宝具であればまず確実に敵対者を破壊するだろう。

回避や防御が叶かなえばその限りではないが――

宝具は英霊にとっての切り札である。

必ずしも威力のみとは限らず、多くの場合、何かしらの必殺の力を有す。

たとえ攻撃型の宝具でなかったとしても、戦局に大いに影響を与え得るだろう。

故に、通常の回避や防御は通用し難いと心得よ。

宝具は宝具で以てのみ防ぐことが叶うと表現しても過言ではないだろう。

無論、宝具は必ず宝具で防げる、という意味ではない。

宝具の可能性は多彩に過ぎる。

破壊的威力だけではなく、知性体の精神を統べる宝具さえも存在するという。

破壊的威力に限って言えば――

壊れた幻想ブローケン・ファンタズムは特筆に値するだろう。

是は、宝具のきわめて特殊な使用法である。

秘められた魔力のすべてを爆発させ、使い捨てることで、圧倒的な威力を発揮する。

無論この場合、爆散した宝具は再生しない。

一度きりであるが故の切り札中の切り札とも言えるが、推奨される行為ではない。

宝具の消失は聖杯戦争の敗北に直結するだろう。

(古びた一冊のノートより抜粋)



光が、溢あふれていた。

空前の宝具たる大神殿のすべてを統率する主神殿にて。

喩たとえば夜に暗がり音もなく充みちるようにして、天然自然の摂理であるかの如くして、空間の隅々にまで光は行き渡り充ち満ちて、溢れて。溢れて。留とどまることなく何もかもを呑み込んでゆく。

破壊をもたらす絶対の魔力ではある筈だった。

それが証拠として神鉄の外壁は悉ことごとく融解し、玉座は砕け、大電球は崩れていく。

けれど、灼熱ではなかった。

神王オジマンディアスは其を「輝き」とのみ捉えた。

固有結界たる神殿内へと焦点を定める限りに於いて叶う最高熱量、すなわちは太陽面爆発にさえ及ぶ筈の大電球からの熱投射が、よもやサーヴァント二騎の同時宝具解放によって掻き消されるとは想像だにしなかったが、起こり得ぬ出来事であると確かに考え掛けたが、それ以上に、ふたつの宝具がもたらす輝きに目を奪われた。

驚きょう愕がくはない。

焦燥もない。

ただ、そういうことか、と——眩まぶしげに目を細めながら唇を開くのみ。

太陽の力も、神々の威も、神王の心象の具現も。

それにはおよそ叶うまいことを、ファラオは遙か過去に知っていた。

「嗚呼」

歡喜が在った。

「余は、かつて目にしたぞ」

憧憬どうけいが在った。

「是なるものと同じくして眩きものを」

憤ふん怒ぬが在った。

「我が友、我が兄弟が、かつて我が許を離れたあの日」

悲哀が在った。

「葦の海を割りしもの、其は、紛うことなき星の光なる」

幾つもの感情を声に混ぜて。

共に育ち、共に笑い合った友の姿を神王は想う。

袂たもとを分かち、共に争い合った敵の姿をも想いつつ。

後に聖者と呼ばれし友にして敵の名を、声なく唇の裡側で呟きながら。

「ならば、そうか。当世にあっては貴様たちが——余に代わって世界を救う者か！」

彼方を見よ。

輝ける希望をこそ、時に人は奇跡と呼ぶ。

主神殿、崩壊。

光輝の名を有する巨大構造体が内部から光と熱によって碎け散る。

全長二キロメートルにも及ぶ脅威の固有結界が、刹那、消滅していく——



「すごいわ、ねえ見てアサシン！」

「はい」

「ああ、夜を、彼の剣が裂いていく……！」

空を貫く光条をうっとりと見つめて。

くるくると回る花、一輪。

「ふふ。あんなに綺麗れいで、あんなに眩しいものだなんて。ちょっとだけ他のものも混ざっているけれど、あれが、聖剣の光なのね」

沙さ条じょう愛まな歌か。夜空の下で楽しげに声を弾はずませる少女だった。

奥多摩山中での伊勢三一族の塵殺おうさつを終えて、既に、東京湾決戦を彼方に望む東京臨海地区にその姿は在った。公衆電話ボックスの脇から、軽やかに、花畑を舞う妖精ようせいもかくやの足取りで海辺へと近づきながら。





「聖剣、彼、ちゃんと振るえたみたい。キャスターを褒めてあげなくちゃ」

「はい、愛歌さま」

側に控える影の英霊アサシンの表情は、仮面の奥に隠されている。



「ごめん……」

都内千代田区某所。

山の上ホテルとは異なる潜伏拠点にて。

「ごめん、なさい……」

エルザ・西条は嗚咽していた。

通話を終えたばかりの——大きめの鞆かばんにも見紛うサイズの最新式携帯電話を前にして。

力なく冷たい床に腰を下ろした状態で、窓辺から差し込む、夜空を引き裂くようにして放たれた魔力光の存在を認めながら。自らと契約したただひとりの英霊であるアーチャーの渾身、宝具の真名解放の瞬間を、確かに感じ取りつつ。

唇、震わせて。

「……ごめん、アーチャー……アーラシュ……」

翠色の瞳ひとみからは、涙が、溢れて。



正しきを為す弓兵アーラシュ・カマンガーの伝説に曰いわく。

ペルシアとトゥルクの長きに渡る戦争は弓兵の一矢によって終結を迎えたという。

二国の人々に幸福を与えて、そして彼は去った。

英雄は還かえず。

現実ならざる超常の一矢を放ったその直後、それまで如何なる病にも毒にも侵されず、数多あまたの戦いで傷付くことさえなかった彼の強きよう靱じんなる五体は粉々に砕け散ったのである。

祈りの句を告げながらダマーヴァンド山へ赴いた彼自身が望んだ通りに。

これより後の人の世に、神代の如き大いなる力など悉く不要である――

その、ささやかな願いのままに。

「ま。不要ってこともなかった、かな」

人の世を、平穏と安寧を、それを超えるものが脅かすというのならば。

時には必要なのだろう。

かつての自分のように？

そう、西の海を割ってみせたという聖者のように。

そう、自らの隣で光の聖剣を振るう騎士のように。

あらゆるものを打ち砕く――時には、大いなる力が必要とされる場合もあるものか。

「少なくとも、とりあえず東京はまだ健在だ。エルザも無事だ」

崩れゆく固有結界・大神殿内部。

真正面から激突した強大極まる魔力の暴風は、防御力に於いても超一流を誇る固有結界を完膚なきまでに破壊していた。アーチャーによる宝具『流星一条ステラ』、セイバーの撃ち放った聖剣の光、そして、ライダー・オジマンディアスが繰り出すデンドラの大電撃を伴う灼熱の太陽光は、神獣の群れを構成する魔力の一片に及ぶまで消滅させながら、神殿を細切れに分断するまでに至った。

剣と弓による合体攻撃の魔力光は主神殿を砕き――

神王の攻撃は、神殿体の基礎にあたる部分を八割方は消滅・蒸散させていた。

足場が辛うじて存在しているのはただの幸運の発露だ。

「しかし、まあ。多少やりすぎだな。こりゃ」

あと一メートルほどもアーチャーが立ち位置を間違えていれば、宝具解放の途中で破壊の奔流に吞まれてしまっていただろう。実際、セイバーはそれに近い。聖剣の有する何らかの効果か、完全に消滅してはいないまでも、大電撃と大灼熱の余波を受けて半身が吹き飛んでいるような状態だ。

まっとうな生き物ならとうに死んでいる。

サーヴァントは違う。エーテルで構成された肉体はあくまで仮初めだ。たとえ五体が砕けようとも、霊核さえ無事なら治癒の魔術あたりで幾らでも修正は利く。

「大丈夫か？ 霊核、やられてないよな？」

返答はない。

剣の英霊は、最早言葉もなく倒れ伏している。

「……悪いな。俺の位置に誘導してやれば良かったんだが、暇がなかった」

言いながら頬を搔くと、何かが剥はがれる感触があった。

ああ、これはいけない。

下手に触れば砕け散る。

ぴしり、と頬に亀裂が入るのが自分でも分かってしまう。

倒れたまま動かないセイバーの目が見開かれている。どうやら、何が起きているのかを察したらしい。簡単だ。アーチャー・アーラシュの宝具は、その伝説にある通り、真名解放を行えば自動的に英霊自身の霊核を破壊する。故にこそ、海を割る聖者でもなく、神造兵装として名高き聖剣を有する剣士でもない身で、星の光にも等しい一撃を放つのだ。

弓でもなく、矢でもなく。

自身の肉体が放つ絶技こそが宝具であればこそ、聖杯に導かれたサーヴァントとして表現するなら『壊れた幻想』としての効果が自動的に付与される。分類上はあくまで対軍宝具として設定されていても、発生する魔力総量と効果範囲は対国宝具にも及び、純粹な威力で言うなら対城宝具に比肩するのだ。

ただし、絶対に一度きり。例外はない。

使えば死ぬ。

それこそ願望機としての聖杯の機能でもなければ、その結末は変わらない。

「後世の伝説では生還したって話もあるんだが、まあ、あれだ。そいつはそいつだ。俺は、正真正銘のアーラシュ・カマンガーだからな」

脚が、ひび割れる。

腕が、腹が、胸が、砕けていく。魔力で構成された鎧よろいも等しく。

あまり時間はなさそうだ。

ここまで脆もろくなっていると、神殿の瓦が礫れきのひとつを喰くらただけで終わりだ。

(……エルザにも言ってやりたいんだがなあ)

最早、三画の令呪すべてを失ってしまった彼女に声は届かない。

すべてを見通す目を持つ弓兵であるが故に、自らの結末をも認識・把握・理解しながらこうして死地へと赴いたのであって、お前の決断が俺を殺した訳ではないからそんなに泣くな——程度には言葉を重ねてやりたいのが本音ではあったが、如何いかんせん叶わない。

声なき声は届かず、自身には魔術的な情報伝達手段も礼装もない。

(ないものねだりは、やめとこう)

だから声の届く相手に、せめて言おう。

最後の一人一騎になるまで魔術師と英霊とが殺し合う聖杯戦争にあって、聖杯への願いを果たすために現界した筈の身でありながら、消滅の危険を顧みず、聖杯を途中放棄することになり兼ねない事態を敢えて無視して——誰よりも先にこの大神殿へと参じ、強大なりしオジマンディアスへと刃を向けてみせた剣の英霊へ。

亡国の騎士王へ？

違う。違う。

確かに彼はそうかもしれないが、そうではない。

アーラシュが語りかけるのは、ただひとり。聖剣の有無に関わらず、出自や所属の如何に関わらず、自らが何者かを心の何処かで知っている筈のただの英雄だった。

「いいか、セイバー」

声がぶれる。肺が、砕けていた。

「お前は正しい」

喉が、裂けていく。

「東京の人々——本来なら俺たちにはまあ、関わりのない連中だけだな」

耳が聞こえない。鼓膜がやられたらしい。

「それでも、無事の民たちだ。

かつて俺たちが守った愛すべきあいつらと、何の違いもあるものか」



もう、内臓の殆ほとんどすべてが消え失せた。急げ。

「俺はここまでだ。

なあ、騎士の王。輝きの剣を栄光のままに振るう男よ」

舌が割れる。ああ、脳ごと霊核も消えていく。

「——お前は、聖杯に何を願う？」

最後の言葉は。

果たして、あの聖剣使いに正しく届いてくれただろうか。





## Dear My Hero ACT-4

—英雄、それが何かを私は知っている。

大地ネウストリを踏み締める足を備え、風アウストリの欠片かけらを胸一杯に吸って、限りある生命と肉体を以って終わりの時へと歩んでゆく人間いきものたちが熱く焦がれるもの。見果てぬ夢の具現。数多あまたの栄光と羨望せんぼうを一身に浴びて立ち、時には渦巻く憎悪と嫉しつ妬とさえをも受け止めながら、悪逆を制して善を成す希望の勇士。

襲い来る外敵を打ち倒した者。

長く続く戦いを終わらせた者。

人々の裡うちに潜む悪と戦った者。

そして、無垢むくの命を喰くらう邪悪の竜を屠ほふった者。

古くは神代から英雄たちは在った。戦っていた。神秘なりし時期を終えて、古き幻想より離れ、智慧ちえを蓄え文明を発展させていく中でも数多くが輝き、散っていった。

私は多くの彼らを目にしてきた。

見届ける行為こそが私という存在の本来の役割であり、かたちでもあったから。

もともと、私は途中ですべてを放棄して英雄たる“あのひと”に寄り添ったけれど。

「……何ひとつ、変わらないのですね、過去も現在も」

降りしきる雨の中で呟つぶやく。

この、東京という街の雨はひどく冷たい。

滅びの巨狼フェンリルの爪が如き吹雪などとは無縁の気候である筈はずなのに。

分かっている。この冷やかさは、実際のそれとは異なるものなのだろう。

正しき肉体ならざるエーテルで構成された四肢で、肌で、顔で、髪で、全身で、最も新しき時代の大地ならざる瀝青アスファルトの舗装道路に立って、化学物質で汚染された大気を吸い込んで、秋葉原の裏路地から灰色の空を見上げながら私はひとり、こうして想う。思考する。

身に備わった機能を行使するのでもなく、自動的判断を行う訳でもなく。

まるで人間のように、私は、考える。

大神よ。

永劫えいごうの呪いという名の祝福をくださった父よ。

幾星霜の時を経ても世界は変わることなく在り続け、変わることなく勇士たちは戦い続けている。悲劇が如き無念の最期を以て、あなたの館やかたならざる英霊の座へと刻まれた者たちであっても——同じくして、正しき道を歩むのだ。

大釜おおがまならざる聖杯なるものに導かれ、互い、殺し合うことを定められても尚なお。

たとえば、ええ。

『話がしたい、あなたと』

いつかの声を私は想う。

あれは、善たらんとして足掻あがき続けた男とその友たる少年だった。

J R 池袋駅周辺を縄張りとして魂喰いを続ける哀れなる娘アサシンの凶行を許さじと、自ら死地へと飛び込んだ清廉の魂ふたつ。霊体化を解きながら姿を見せて、大槍おおよりを振りかざす私に対して、少年は言っているのだ。

あの言葉。星の煌きらめきが如き瞳ひとみたち。

既に死して館へと赴くべき魂エインヘリャルとなった彼らを、私は忘れまい。

『俺は矢だから。結局、まっすぐにしか行けねえんだよな』

別の声。別の勇士。

あれは、父よ、あなたの隻眼に及ばざるとも鋭き“眼”を持った男だった。

一度ひとたびは刃やいばを交わし、その後に出会う度に多くの言葉を交わした相手。切なる願いはあれども聖杯なる某なにがしかなり自分以外の誰かに望む類たぐいのものではない、と臆面おくめんもなく私に宣のたまってみせた弓の英霊アーチャー。

あの横顔。一陣の涼風が如き微笑み。

私は、東京湾上で為なすべきことを為した彼の勇姿を忘れまい。

『降伏はいつでも受け入れよう。騎士は本来、淑女には刃を振るわぬものだ』

ああ、そして。

今こうしていても私を悩ませ続けるひと。

当代に於おける魔術師なる者たちが執り行う魔術儀式たる聖杯戦争にあって、ひときわ輝く善き魂を秘めた一騎。剣の英霊。時に狂獣と化した敵の望みを前にしてその身を晒さらし、時に迫り来る驚異の獅身獣スフィンクスを打ち倒し、時に都市全土を灼やき尽くすと宣言した神王へと挑む、ただひとつの聖剣を手にした勇士。

そう、あれをして、人は誇りと賞賛と焦がれを込めて“騎士”と称す。

分かってしまう。私には。

かつて姉妹たちと共に魂を選ぶ一騎であったこの身には理解できる。

「セイバー……」

戦場にあっても情けを忘れず振る舞える彼。

「優しいひと」

死を迎えずして世界と契約してしまった彼。

「だからこそ、私、困ってしまう」

正しき命を維持したまま東京へ現界した彼。

私は想う。想う。想う。想う。想って、想って、焦がれて——この乳房の奥の奥、底の底でくすぶり続ける炎を完全に抑えることなど、出来る筈もない。不可能だ。まるで炎の中で目覚めた瞬間であるかのよう。それは、聖杯の力を以てして私の意識と行動をサーヴァントとして縛る魔術師マスターの作り出した霊薬のもたらす効果でもあるのだろうが、でも同時に、こうも考える。もしかしたらと。



父よ。私は、あなたの娘であるが故に。

人間として死した筈の零落したこの身には、この魂には、今も。

輝ける英雄に惹ひかれてやまない機能が残っているのではないだろうか、と。

嗚呼ああ、少なからず私は感じていたに違いない。彼だけにではなく、この極東の巨大な都市で命を落としていった勇士たる英雄たちに。それが果たして何かを今更口にするまでもないまでも、ああ、私は雨の中で強く想い続ける。

自分自身がひび割れていく狂気のただ中で、自分自身の性質さがを感じながら。

此処ここには、真なりし最愛の人はいないのに。

「遍あまねく地に満ちる人々は……」

耐えきれないほどの熱さ。

耐えきれないほどの甘さ。

耐えきれないほどの切なさ。

——これが、私が戦乙女ワルキューレである資格を失った理由。

敵意、いいえ。

憎悪、いいえ。

憤ふん怒ぬ、いいえ。

もっと熱く、甘く、切なくて。

「きっと、これをこそ“愛”と呼ぶの」

——私が、ブリュンヒルデの名を持つ“女”となった理由です。父よ。



令呪。天使の階梯かいてい。

魔術師マスターの肉体へと付与される聖杯戦争への参加権。

是これについては既に幾度か記述したが此処に再び記す。

聖杯によって選出された七人の儀式参加者のひとりである証あかしこそが令呪である。

如何いかにして聖杯がマスターを選ぶのか、その機構システムの詳細は明らかではない。

聖堂教会と魔術協会の語る限りでは――

儀式参加に相応ふさわしい願いを有する魔術師たちが令呪を得るという。

無論、証明はされていない。

それぞれの魔術師たちの抱いていた願いも定かではない。

全員共に根源を目指していた、等とは言い切れまい。

大聖杯の安置された都市に在住する者が選ばれ易い傾向にあるのか？

一九九一年の聖杯戦争に於いては五名が東京在住、二名は国外在住者であった。

否。これも定かではない。

選出の機構が不明である以上、傾向と呼ぶにはあまりに情報不足ではある。

兎とも角かくも。

令呪を得ることで、初めて魔術師は聖杯戦争参加者たり得る。

すなわち、天使に準なぞらえられた階梯を得る。

是は、魔術師の有する神秘の素養に応じて振り分けられるという。

喩たとえば天賦の才を有する者であれば、最高位たる第一位。

喩えば世界の真実を知らぬ者なれば、最低位たる第七位。

第一位・七枚羽の熾天使 Seraphim。

第二位・六枚羽の智天使 Cherubim。

第三位・五枚羽の座天使 Thrones。

第四位・四枚羽の主天使 Dominions。

第五位・三枚羽の力天使 Virtues。

第六位・二枚羽の能天使 Powers。

第七位・一枚羽の権天使 Princess。

皮肉にも、神なき魔術師こそが天使の翼を有す。

大聖杯を以て召喚果たされる“善き魂”としての英霊サーヴァントの導き手と言う訳だ。

確かに、死して尚も“座”より呼び出される英霊たちは迷える魂には違いない。

聖堂教会らしい演出と考えるか、大聖杯の必然であると考えてるか。

それは此处では語るまい。

(古びた一冊のノートより抜粋)



一九九一年、二月某日。

東京湾上神殿決戦より、三日後。

「ランサー。お前の発言はそれなりに興味深いものではあった」

降りしきる雨の中――

男が立っていた。

都内千代田区、秋葉原の一角。とある五階建て雑居ビル屋上に於ける光景だった。

冬の気配を未いまだ色濃く残した二月の空の下、降りしきる雨の温度よりも冷ややかに、男の言葉が響く。冷酷。冷徹。そういう表現がよく似合う男だ。遮光眼鏡サングラス越しの氷刃が如き視線は、目前で蹲うずくまるひとりの女へと向けられている。

雨に濡れる男女。

男は女を見下ろしたまま身動きせず、女は男を見上げずに震えるばかり。





色情の類にまつわる諍いさかいか？

蜜月みつげつの終わりか、相思の決裂か。

いずれにしても男女間の面倒事の類であるのか。

いいや。違う。都市の死角とも言うべき此の場所に余人の視線はないが、万が一に見る者が在ったとしてもそういう思い違いはしないだろう。この、独特の距離感。男が手を伸ばしたとしても女には届きはしない。もしも触れようと望むならば、互いにその手を伸ばさなければ叶かなうまい。

更に言えば、男の纏まとう気配は常人のそれではなく――

女の姿に至っては、現実感を喪失させる程の完成度を有していた。

たとえば神が手ずから造りたもうた至高の芸術品、ひとの姿形を目指して造成された各部品パーツは間違いなく人体部位であるにも拘かかわらず、結果的には人間以上の見目を得てしまった美しい生き物。幻想そのものを体現する肉人形。濡れた白磁の首筋、愁いを帯びて潤うるむ紫水晶アメジストの瞳、形の良いおとがいを伝って落ちる雨の雫しずくさえもが神秘の領域とも言える。

憂いながら、何かに抗あらがい、両腕で自らの体を抱きながら震えるさま。

まるで――

嘆く女という概念が具象化したかのような。

ある意味に於いては正確な表現ではある。

正しく人として生きた生命ではなく、彼女は、神話の存在として生まれ落ちながらも人へと墮おちたるものなのだから。涙の運命をこそ定められ、古き北欧の伝説を生きた戦乙女のなれの果てにして、人として最期を迎えた後に英霊の座へと記録されてしまった女。女のような何か。北欧にて今も語られる伝説が真実であるならば、人であることを自ら選んだ瞬間にこそ、彼女は現在の形態かたちに成ったとさえ言えよう。

サーヴァント階位第四位。

聖杯戦争への現界に際して与えられたクラスは槍の英霊ランサー。

その実態が、これだ。涙の女バンシーならず、呪われし愛を嘆き噎むせび泣く女。

成る程、雨に濡れる姿はよくよく似合う。

頬を伝う雫のすべては空より降り注ぐものか、紫の瞳より溢あふれるものか。

どちらにせよランサーの姿は強く強く惹き付ける。

人間を。

特に、そう、男性を。

こうして憂い続ける彼女を一度でも目にしてしまえば、どれほどの反応を示すものか。個人の形質によって千差万別ではあるだろうが、無反応だけは有り得まい。

けれど。この男は、違う。

「涙は許す。嘆くことも。それは別段構わない、正しい反応だ」

男は――

ナイジェル・セイワードは動揺のひとつも見せない。

涙と悲哀をただただ堪こらえることで真に完成する彼女の美に、興味を抱かず。

発生する感情がないのだ。ならば反応も何も示しようがない。

彼が生まれながらに有する感情は、執着、己おのが魔術属性をさえ上回って現出しかけたある種の起源とも言うべきそのたったひとつのみ。少なくとも、ナイジェルは自分自身をそう捉とらえているし、言動のすべては彼の認識を裏付けてもいる。

同情も憐憫れんびんも好意も慈しみもなく、ただただ、冷ややかに。

無感動に。無感情に。

淡々と現実のみを見つめつつ精確に行動する。この瞬間であれば、言葉を。

「涙も、嘆きも、正しく愛より派生する感情の発露だ。それでいい。お前は感情を育てている。増大率には一切の問題がない、私の予想を上回る程の成果だ」

温度のない声が語るのは、評価だ。

労ねざらいではない。

「愛。人間という知性体を時に生命さえ左右させて翻弄ほんろうする重要な反応のひとつ、その増大こそがお前の宝具を真に強化する。如何なる無二の英霊であろうと、ただひとりであれば我らの敵ではない。お前が真に愛を注ぎさえすれば――」

兵器・兵装として稼働させるにあたっての価値の判断。その伝達。

「容易に駆逐できる。愛深まれば、お前は神であろうと殺すのだから」

魔術師の言葉は正しい。

ランサーの有する魔銀ミスリルの巨槍きょそうは宝具に他ならず、まさしく、所有者の裡で燃え盛る愛の多寡に応じてその威力を対象ごとに変動させる特性を備えた対人宝具であって、故に、条件さえ揃えば冥界めいかいの女巨人ヘルであろうと殺してみせる。愛すれば愛するほどに、槍やりは一撃必殺の力を高めてゆく。文字通りの一撃必殺だ。

それを可能にするだけの凄絶せいぜいの幻想が、彼女の槍。

嘆き、憂い、愛の窮極によって誰かを殺す。

英霊であると同時に半神でもあるランサーの具現に他ならない。

ナイジェルが精製した霊薬は、実に、彼女の宝具には合致したものではあった。

トリスタンとイゾルデ、夏の夜の夢、等々——世界各地の伝説や物語に登場する霊薬を模範モデルとして設計された錬金術の極致の一種、感情支配と操作の霊薬は“強制的な愛”を服用者にもたらす。

ささやかな切っ掛けで構わない。

優しさ、とか。

精強さ、とか。

ほんのささやかな好意を、共感を、同情を、霊薬は愛へと変える。

無理矢理に。躊ちゅう躊ちょなく。歪ゆがめて、ねじ曲げて、書き換える。

もしも服用者が別の人物への愛を未だ残しているのなら、その炎のくすぶりをも取り込んで霊薬は大いに反応する。人間であれば大脳辺縁に於ける精神活動のすべてを瞬間的に支配する。特に魔術的な生命であれば、霊核に深く深く突き立つ錯覚を覚えるだろう。

逆らうことは出来ない。否、逆らおうという意識さえ持てまい。

恋に落ちて愛を生み出す時、人は自ら狂い果てる——

それは、ナイジェルの魔術師としての観測と実験の果ての結論でもあった。

経験からの言葉では、無論ない。

「大いに涙せよ。嘆け。震えろ。良好な感情増大の発露だ。しかし……」

遮光眼鏡を外しながら、男は言う。

「反抗は許さない」

そう、ランサーはマスターたるこの男への叛はん意いを口にしていたのだった。

時間にして二〇分ほど前。同じ雑居ビルの四階フロア、男が潜む拠点にて。

ナイジェルの返答は単純だった。

激怒でも落胆でも叱しつ咤たでもなく、ただ、霊薬の更なる服用の指示のみ。

「お前の言葉は実に興味深いものではあった。もう充分です、とはな。エーテルで構成された仮初めの肉体であるとはいえ、知性体としての精神活動と脳とを有する生物が、よもや私の霊薬に逆らってみせようとは」

追加服用をも彼女は拒んだ。

英霊ならざるただの女のように逃げ出そうとして、けれど逃げ切れず、こうして氷雨の止まない屋上で震えながら蹲っている。超常のものであろうとそうする他にない。遮光眼鏡をいよいよ外したナイジェルの右瞳に浮かぶ六枚羽の黒色紋様——令呪一画の使用による強制命令が、ランサーを無力な女へと変えている。

令呪は一瞬だけ瞬いて、男の背後に光輝で形成された六枚羽を浮き上がらせる。

マスター階梯第二位・智天使。

その威を見せ付けるかの如き姿で彼は告げる、自らの下僕サーヴァントへと。

「大人しく我が霊薬を口にしろ」

物理的な暴力にまで感じられるだろう愛を、彼は強制する。

「案ずる必要はない」

彼女の胸中に渦巻く情念の昂たかぶりの正体を、識しらぬままに。

「聖杯の獲得はお前の悲願でもある筈だ」

ひび割れ、壊れてゆく彼女が何を果たすか、予想だにせず。

——やめてください——

苦く悶もんのままに、ランサーは雨の夜空へと叫ぶ。叫ぶ。

こんなことのためではない。私は何故、この極東の地へと現界したのか。

「愛のためだ」

蒼銀そうぎんの騎士のために？

「愛いとしきものの命を奪う。ただ、そのためだけにお前はいる」

氷の言葉は冷酷に、現実のみを突き付ける。

光の翼を背負いながらナイジェルが一步前へと進む。距離が縮まる。刹せつ那な。

「違う……」

女は言った。

令呪による霊薬服用の命令を拒みながらの懸命の言葉ではあった。

「違う、違う、違う、違う、違う違う違う。」

本当の愛しさは、哀しさは、すべてすべて過去のあのひとに捧ささげたのです」

「同じことをすればいい」男の声色は変化しない。

「私、捧げたんです。愛しいひとの命を奪った瞬間。郎党すべてを悉ことごとく殺し尽くした、あの惨劇の中で、私は私自身と父とに誓った。誓ったのです、だから。駄目、駄目、そんな風には、困り……ます」

絞り出すような声と、共に。槍。

自覚したのではないだろう、彼女の手は宝具たる槍を実体化させていた。

巨槍。池袋の超高層建築の麓ふもとでセイバーと刃を交わした時に比べれば、二倍ほどのサイズに膨れあがっている。刀身部分だけで人間の身長ほども在る。既にその重量は一八〇〇キログラムを超す。愛の対象に振るったならばその幾百倍の重量として働くだろう。

槍は、尚もひとりでに巨大化していく。

重量、一九〇〇キログラム。二秒の間に二〇〇〇キログラムへと。

噛み締めるランサーの奥歯が軋きしむ毎に、更に。更に。更に。

「見ろ。お前の愛は、そうして膨れあがっていく。それがお前だ。お前自身さ」

——違う、違う、違う——

ひとしきり叫んでから。

ランサーは両腕で、強く強く自分の体を抱き締めて。

「……そうよ、あのひとじゃない」

——セイバーは、違う——

「決して“あのひと”ではないし、私が愛を捧げるのは彼以外にない。

其その名、竜殺しの英雄にして我が最愛。

大神を裏切り、神性のすべてを奪われたこの身を抱いて、愛を誓ってくれた彼」

——ただひとりのシグルドだけが、私の、私の、私の、私の——

叫ぶ声は天へと吸い込まれていく。

雨が、すべてを掻き消す。

誰が知るだろう。

是なる叫びこそ、彼女の炎が最大限にまで高められた兆し。

苦悶と拒絶、狂気の発露こそがランサー・ブリュンヒルデの愛の窮極である等と。

「……ふう」

何かが致命的なまでに剥はく離りしていた。

そうして、別の何かが表に顕あらわれていた。

ランサーは軽やかに、重量二三〇〇キログラムを超過しつつある巨槍を片手にすらりと持ちながら立ち上がる。刃の切っ先が僅わずかに擦かすただけで、有り得ざる密度にまで質量と魔力とが凝集された超重槍は雑居ビルの屋上を切り裂いてしまう。ほんの数センチ、彼女が手で許もとを狂わせていたら、ビルディングそのものが両断されていただろう。

直前まで仔こ犬いぬのように震えていた素振りが嘘のように、ランサーは流麗に佇たずむ。

くるり、と槍で大気を裂いて。

人間の女が如き弱々しさなど微み塵じんも其処そこには残っていなかった。

女神の尊厳を完全に取り戻した、美の具現として。

選ばれた勇士の最期を見届ける、残酷な魂として。

一度愛した者を逃すことのない、獰猛どうもうの刃として。

完成されていた。

ともすれば、嘆きと涙さえもが此処へ至るまでの作業工程であったかのようにして。

「ええ、マスター」

数度の言葉のやり取りの中で如何なる変質が彼女に起こったのか？

ほんの一割程度も理解できないままに立ち尽くす魔術師の男へと、微笑む。

とびきり柔らかく穏やかに。

それは確かに、女神の微笑ではあった。

「……私、セイバーシングルドを殺します。それで良いのですよね？」



何処かの暗がりにて。

語る者がいる。

咲き誇る花の少女と、瞑目めいもくして傳かしずく賢者。

東京地下某所。

誰の目に見えることもない暗黒、手に触れることもない奥底で。

たゆたいながら眠り続け、目覚めの刻ときを待ち侘わびる巨大なる“杯”が在った。

——其は、大聖杯セイントグラフ。

七騎の“善き魂”のすべてを生贄いけにえとして喰らうことで起動を果たすもの。

枢機卿の信じる奇跡の体現か。

人のささやかな願いの結晶か。

ああ、それとも■■そのものか。

「愛まな歌かさま。

畏おそれながら、ご報告申し上げます」

「なあに、キャスター？ ああ、ランサーについてのお話かしら？」

「はい、私の監視網が捉えました。高速での長距離移動を繰り返しています。恐らくはセイバーを捜索しているつもりなのでしょうが……最も早はや、制御を失いつつあります」

「おかしくなっちゃったのね」

「卑小の身では断言は控えますが、十中八九。長距離移動に際して不必要にも霊体化を解除し、その姿を隠そうという素振りもありません。表立っての騒ぎにはなっていませんが、明日の夜には、ラジオ番組あたりで都内の噂として語られることになるでしょう」

「ふうん」

「神秘の隠匿を意識しない行動です。となれば、マスターは……」

「いいえ？ 自分のマスターを殺したりはしてないわ、ランサーは」



「失礼いたしました。無論、貴方あなたにはすべてが見えていることでありましょう。  
ならば如いか何がいたしましょう、マスターの排除こそが効率的ではありますが」  
「会うわ。一回くらい、会ってみたかったから」  
「御意」

賢者が、少女へ向けて深々と頭こうべを垂れる。  
そのさまは、まるで、神なるものに敗北する悪魔が如き仕草ではあった。



雨は、もう止んでいた。

深夜未明。

吹き荒すさぶ紫水晶の風がその経路ルートを選んだのは偶然ではあった。

暗がりのビル街の一角。J R池袋駅からやや離れた首都高速道路高架の脇に聳そびえる東京有数の超高層ビルディングたるサンシャイン 60 の麓、複数のゆるやかな階段で構成された広場。偽物の煉れん瓦がで出来た公園もどき。いつかの偽物の古代住居と同じくして、この極東の街には精せい緻ちな贋作がんさくがよく集う。

聖なる杯を標ひょう榜ぼうする、昏くらき釜であるとか。

英雄ならざる英雄。

愛した人に良く似た別人。

そして、かつて神や人として世界を生きながらも死して、時隔てた世界に現界した女。  
。

風であったものが巨槍を携えた人影へと変わる。足を止めたのだ。

人影は、女だった。ランサー。サーヴァント。

この時点に於ける槍の総重量は二四〇〇キログラム。

単位を噸トンへと変えるべき状態にまで槍は変質・変化・進化していた。

くるり、くるり、と指と手首の小さな動きのみで槍を二度ばかり回転させると、  
巨大槍の先端は容易に空間を裂いた。突如として発生した大気なき空間より発生する真

空は、周囲の植え込みの木々を土ごと吹き飛ばし、修理を終えたばかりの街灯を粉碎する。

「……ふふ」

ランサーは、微笑む。

何らかの歓喜を込めた口元である筈が、ひどく、歪んで。

どんな感情によって導かれた表情であるのかは、とても認識し難い。

笑いながら嘆き、嘆きながら憤り、憤りながら笑っているのだ。

敵意、憎悪、憤怒、いずれも近い。いずれも遠い。

悲哀、憂愁、後悔、いずれも遠い。いずれも近い。

端的に言えば――

この女は、今や、決定的に裡側から壊れかけていた。

霊核と同じく色濃く自己を形成する中心たる部分ころには、炎だけが在る。

「ふふ、ふふふふ」

笑みが深くなる。

炎が、周囲に立ち込める。精神を灼き尽くす炎は肉体の外へと溢れ出て、魔力放出スキルという名を以て振るわれる。通常ならざる魔力の炎は神代に於ける神なる火の如く、物理法則を無視して燃焼を続けてしまう。たちまち、サンシャイン 60 の麓の階段エリアは炎の海に包まれる。階段に面した無人の店舗のガラスは二秒で融解する。

「燃えている、燃えている、ああ……」

ランサーは笑う。瞳に、遠き日の思い出を映し込みながら。

炎の館で眠り続ける自分の姿。

其処へ、堂々と、恐れる気配など一切なく立ち入るひとりの勇士。

誰あろう、彼こそ愛しき、愛しき、愛しき――

「哀れですね、ランサー。自我の崩壊を引き起こしてしまうとは」

夜空に、落ち着いた声が響く。

言葉に混ざる氷の気配はナイジェル・セイワードのような無感情を思わせる。

炎が、消える。魔力炎に炙あぶられていた大気が、続く呪文詠唱の一語によってあっさりと冷却されていた。炎熱制御。高速詠唱。四大属性の大魔術をおよそ一工程シングルアクションに近い発語で発動させたのか、神代の魔術師でもあるまいに。ならば、声の持ち主は余程の仕掛け好きの魔術師なのだろう。

「ええ、と？」

首をかくんと傾げて――

或あるいは、折れてしまうと思えるような角度にまで曲げて、ランサーは見る。

見上げる。声の持ち主、魔術の行使者を。

「……ふふ、見つけた。見つけた。へえそう、あなたたちは空を飛ぶのですね」

上空八〇メートル程度の位置に人影がひとつ、ふたつ。

白色の長衣に身を包む黒髪の男性、術の英霊キャスター。

暗色の薄衣に身を包む仮面の女性、影の英霊アサシン。

この時代、人が空を歩むことは叶わない。ならば二騎は空中歩行の魔術によって宙に留とどまっていると思おぼしい。父の娘として活動していた時期であれば空征ゆく礼装のひとつも所有していたものの、サーヴァントとして現界している身のランサーでは、同じ行為をしようとすれば幾らかの工夫が必要となる。

不可能ではない。

つまり、空の敵であろうと手順を踏めば問題なく殺せる。

「私、これからセイバーを愛ころさないといけないのです。道草は駄目なんです」

「成る程」キャスターが頷うなずく。

「分かっていますか」

「ええ。ですが、聖杯戦争を勝ち抜きたいのであれば些いささか気が早い。貴方のその宝具、有効活用するならば勝ち残った最後の一騎に対して振るうべきでは？」

「ああ……」

キャスターの言う通りではある。

きっと、ナイジェルもそういう類の戦略を立てていたのは想像に難くない。

だが、ランサーは投げ掛けられた言葉を真には理解していない。

愛する者の元へと急ぎたい。寄り道はしてられない。聖杯の獲得という目的などはどうに消し飛んでいた。未だに秋葉原の拠点に座すマスターからは令呪の強制と声なき言葉による命令が飛んで来ているが、すべて弾はじいている。大神への後悔と贖しょく罪ざいの意識さえも狂える愛によって塗り潰つぶしてしまった彼女には、己が能力のすべてを発揮すると決めてしまった彼女には、それが叶うのだ。

正確に表現しよう。

全能ならざるとも、機能を限定解除した状態の彼女はおよそ万能と言える。

「……私も、空、飛べるんですよ」

言葉だけを地上に置いて。

ランサーが、上空八〇メートル位置に出現していた。

迅はやい。パラメータの一時的増幅による高速戦闘動作。キャスターの背後に彼女の姿は在って、大きく槍を振りかぶっている。防御用結界の発動を想定しての全力攻撃準備。超重量の槍を以て行われる超高速の五連槍撃は、魔法陣による物理防御であろうとあっさり貫くだろう——彼の先に聳え立つ超高層建築物サンシャイン60ごと。

横薙なぎ。攻撃開始。

キャスターとアサシンが瞬時に砕ける。実物ではない。虚像だ。

けれど巨槍には破壊対象が何であろうと関係ない。ただ、抉えぐり取るのみ。

魔術の虚像も、現代文明の粋を集めて建造された超高層ビルディングも等しく。

「天の星々よマクロコスモス」

更なる上空から、声。

振り抜かれたランサーの五連槍による“巨人の爪”にも似た攻撃がサンシャイン60を貫通する直前、明滅する五色の輝きがビルの壁面を覆っていた。たった一小節ワンカウントによる瞬間的発動。地水火風の四大に空エーテルを加えた五大の属性によって導かれた五重結界は、超重量と超高速が生み出す運動エネルギーを完全に霧散させていた。結界の作り出す仄ほのかな魔力光の“壁”の平面上を、波紋のように力が拡散する。

「やれやれ、世の万物は何であれ愛歌さまの所有物だというのに。貴方の気まぐれでそう容易く使い潰して良いものではありませんよ、ランサー」

「ふふ、あははははははは！」哄こう笑しよう。哄笑。哄笑。「もっと上にいたんですね！」

空中で羽ばたくようにして、大気を蹴けり込んで飛び翔しょう。

ランサーは迷うことなく移動を再開、上空二五〇メートル位置に滞空する本物のキャスターへと迫る。加速。加速。今度は突撃姿勢。刀身を含めれば全長四メートルにも及ぶ巨槍を構えたまま、自身そのものを超絶の一撃と化す。

「させない——」白き死の仮面が短刀を抜く。

「邪魔ァ！」

迎撃とばかりに落下攻撃を仕掛けてきたアサシンを、軽やかに一いつ蹴しゅう。

よくよく練り上げられた体術と短刀術ではあっても、ワルキューレとして数多の勇士のわざを見つめ続けてきたランサーにとっては、幾万の戦場で記憶された異郷の技術のひとつに過ぎない。空中で、まずは激突を回避しながら、高速ですれ違う前後に繰り出されるすべての攻撃を片腕と両脚で捌さばききる。

ついで、手刀を一閃いっせん。

褐色の左腕を切断させられたアサシンは、あえなく落ちて行く。

吹き出す闇色の鮮血は、万が一にも降りかかれば何らかの効果をもたらしたかも知れないが、ランサーの裡から溢れ出す高熱火炎は受動防御として作動し、鮮血のすべてを粒子のひとつに至るまで蒸発させてしまう。

「ふふ、次はあなたの」

「水よ aqua」

微笑みの言葉を遮るようにして紡がれる詠唱。

導かれ、出現するのは人間に等しい大きさの元素結晶エレメンタル。属性は水。宝石のようにして煌めきながら、大気中の水分を次々と吸い上げることで質量を増して、ランサーへと真上から圧おし掛かる。重量による衝撃など無きに等しいが、水は無形である。あらゆる攻撃を無効化して受け流し、捌からめ捕って――

生物であれば取り込んでしまえば終わりだ。

サーヴァントは正しく生物ではないが、陸上型内骨格生物として肺呼吸を行う。

酸素からエネルギーを得る訳ではない魔術的存在であるが故に、常人以上に耐えはするだろうが、息を吸う生き物として形態を得ている以上、窒息すれば魔力の循環は阻害されよう。物質で出来ているからには限界はいずれ訪れる。

「ぷはっ……！ ああ、気持ちいい、ふふふふ、ふふ！」

飛沫しぶきが池袋の空に散る。

水の元素結晶ウンディーネの体内から、すぽん、とランサーが抜け出していた。

沈んでしまえば二度と出られる筈のない元素結晶の表面結界を、耐久力型の英霊の現界サーヴァントにも相当する組成強度を有するそれを無効化してみせた？ どのようにして？

ただ、指先で何かを刻むが如く描き出すだけで――

「ルーンですか」

「ふふふ、どうでしょう……！」

笑う声と共に、空中で槍が振るわれる。

切断しても意味などない筈の無形の水の異形には、やはり、通じない。

対して、何らかの危機を感じ取ったキャスターは結晶を本格的な攻撃状態へと形態変化させていた。魔術の行使ではない。コンマ一秒と掛からない。五メートル大へと既に増量されていた水塊は、更に倍、全長一〇メートルへと拡がりながらランサーを呑み込む。

攻撃形態の水の元素結晶が与えるのは、臓器の機能低下に伴う緩慢な死ではない。

対象の取り込みからの瞬間凍結。

生物であれば、強制的に、全細胞の分子運動を停止させる。

言わば水の棺ひつぎか。

引きずり込まれば、逃れられぬ死が三六〇度から襲い来るばかり。

「……！」

どのような言葉をランサーが放ったかは分からない。

轟音ごうおんが同時に発生していた。劫ごう火か。

魔力放出スキルによる炎とは桁違えたちがいの炎熱が、結晶を完全に消し去っていた。

池袋上空一帯を彩る炎の明かり。神話の再現。凄絶の火炎。

ふわりと滞空したまま哄笑するランサーの胸元には、光の刻印がひとつ。

十全に力を顕せば、現代の魔術師が行使するルーン魔術のおよそ数百万倍にも及ぶ！

「原初のルーン——」キャスターの声を焦燥が彩る。

「ふふ、あはは！ ええそう、私のこれは大神オーディンからの直伝であるのです！」

高らかにランサーは告げる。

此処にいるのは、ただひとりの狂った女ではない。

狂った半神だ。

物理法則が世界を支配するよりも以前の時代、自然として、概念として、世界そのものの如くして君臨していた古きものたちの一柱。北欧神話に語られる大神オーディンの娘にして、運命の時を目指す魂を選定するものワルキューレたちの一騎。

本来、サーヴァントとして召喚されるべきではない神霊の、堕ちたる流麗。

それこそが——

「ブリュンヒルデ。強いよね、あなた」

声。言葉。

涼やかなそよ風を思わせる響きだった。

氷の冷たさは其処にはなくて、暖かささえ感じさせる和やかなもの。

それなのに。

壮絶なまでの悪寒をランサーは感じ取っていた。

完全なる狂気に染まった筈の瞳が、刹那、見開かれる。

約二四〇メートルの地上高を誇る超高層、サンシャイン 60 屋上部を見据える。

金属製の避雷針の傍らに立つ小さな影、人の子だ。

人間として生まれ落ちたる、それは、可憐な少女のかたちをしていた。

「悪しき竜ドラッヘン」

唇が、最愛の人と死闘を繰り広げた竜の形容を漏らしていた。

目にしたことは一度もない。けれども、まず間違いなく邪悪を以て地上に君臨しかけた竜種に匹敵する巨大な気配であると認識してしまい、すくみかける。

しかし。それでも。

槍の英霊は、半ば自動的に空中を蹴り込んで少女へと軌道を変えていた。

——狂い果てながらも、私の中で僅かに残った自我が叫ぶ。

最後に残る意識の欠片。

英雄の介添人としての誇り、その、かろうじて留まった断片は——

現代の東京で行われんとする『惨劇』の可能性を瞬時に認識していた。

七人七騎の魔術師と英霊。

東京の何処かに存在するという地下大聖杯。

枢機卿。聖堂教会。

願い。想い。聖杯に溜たまってゆくのであろう、脆もろくも儚はかなき人々の想念の渦。

その果てに眠るものは何だ。眠り、微睡まどろみ、目覚めの刻を待つものは。

「あ、あ……」

直前に父のルーンを起動させたが故か、それとも、ただの偶然の類に過ぎないのか。

ランサーは、何故、正しき英雄でもなく反英雄でさえない自分がこの聖杯戦争に選ばれたのかを狂気の中ではっきりと自覚した。この瞬間だ。父の加護か、呪いか、もしくは生前に為してしまった数多の罪業への贖あがないのためか。

何にせよ。やるべきことは、ひとつ。

誇り高き英雄の妻として、大神の娘として、見逃すことなど有り得ない。

少女のかたちをした悪しき竜を、此处で――

――両断する。そうすれば、嗚呼、セイバー、私はあなたを殺さずにいられる！

主人の危機とばかりにキャスターが瞬間的に呼び出した土の元素結晶ノーム、金剛石ダイヤモンドの強度を誇る物理と魔術の絶対障壁シールドを狙い違たがわず二等分断する。好機に昂ぶることで熱を高める愛の炎と連動しながら拡大し、変容を果たし続けて、今や三〇〇〇キログラムにも到達する超重量の豪槍はおよそすべてを断ち切る。

けれど。

けれど。

ランサーの振るう宝具の巨刃は、少女の命へは届かない。

「残念ね、軽すぎるみたい」

ほんの指先ひとつ。

少女の真っ白な指が、槍の切っ先を、止めていた。

愛深まった相手に振るえば、原子分解攻撃ディスインテグレートにも等しい打撃を与え得る運命の槍は、愛浅き相手にも超重量の武具として効果を示す宝具は、しかし、この場にあってはただの魔銀の塊に過ぎない！

「あなた、わたしのこと……好きじゃないでしょう？」

少女が微笑む。





「あなたは英雄たちが好き。水のことも、土のことも、東京のことも好き。けれど私のことは好きじゃない。なら、駄目ね。あなたの宝具、わたしには重ささえ感じない」  
絢爛けんらの華のようだった。

「でも、凄すごいわ。あなたはこんなにも彼のことを沢山想ってる。それなら」  
戦士の館には姿を見せる筈もない、麗しの花が一輪。

炎に捲まかれても焼かれることなく。

水に呑み込まれようと萎しおれはせず。

風が巻き上がろうとも千切れない。

土が乾こうとも、一輪、咲き誇る。

「ちょっとの間だけ、彼のこと、好きでいてもいいわよ？」

——そう言って。槍の向こうで、少女が、薄く私へと微笑んで。



Dear My Hero ACT-5

——炎熱として渦巻く狂気の奥底で。

——ささやかに残された私の意識が、自動的に、情報記録を再生していた。

炎の記憶。

他には、どうとも喩たとえようがない。

ブリュンヒルデわたしという個の始まりと終わりは炎と共に在ったから。

私を捕らえて縛る戒めであったようにずっと感じていたけれど、実際のところは私自身の裡うち側から吹き上がり、燃え上がり、すべてを灼やき尽くすものであると気付いたのは最後の瞬間だったように思う。

少なくとも、目覚めの時には何ひとつ理解していなかった。

古き神代より大神の遣いワルキューレとして勇士たちの魂を導き続け、時に彼らへ勝利を与え、時に死を与えて、多くの魂を尊き館やかたへと運びながら終末の戦いラグナロクに備え続けてきたこの私は、この時——在り方を変えていた。

変えられていたと言うのが正しいだろう。

私はゴート族の国にて若き戦士アグナルに荷担し、大神の祝福による勝利が約束されていたはずの老ヒャールムグンナルを敗北させてしまった。父たる大神はこの裏切りについて冷静に対処した。私から神性の多くを奪い取り、死にも似た停止状態をもたらす青ざめた戒めのルーンを与え、人外の魔境たるヒンダルフィヨルの山頂に位置する火の群れ、天まで届く火か焰えんをもたらす「炎の館」に閉じ込めたのである。

青ざめた戒め、ルーンの茨いばらがもたらす擬死の効果は絶対的だった。

私は眠った。永劫えいごうに消えぬ炎の中で。

私は待った。父の予言した唯一の可能性、愛を告げて眠りを覚ます運命の勇士を。

愛。勇士。ああ、そんなものは決して来ないだろうと覚悟していた。誰ひとりとして立ち入ることの叶かなわない炎の中で、私は、滅びの巨狼フェンリルと炎の巨人スルトの猛威で世界が終わるその時まで骸むくろのように横たわり続けるしかないのだと悟っていた。

けれど。

あのひとは来た。

フラ克蘭ドの王たるシグムンドと、エイリミ王の娘ヒョルディースの子。

力、頭脳、すべての技能と能力に於いて余人に勝る無双の英雄として語られる兄弟たちの中でも最も優れ、魔術のみならず魔法にも長けた者も含めたすべての人々が「彼こそ誰よりも優れた気高き戦士の王」と讃たたえた男。

大神の試練バルンストックを経て父王シグムンドが得た魔剣グラムを、自ら新生させた剣士。

最高の神馬スレイプニルの裔すえたるグラニを永遠の友とする人間。

フンディング王に連なる軍勢を打ち倒し、父王の仇あだ討うちを成し遂げた歴戦の猛者もさ。

グニタヘイズの貪欲どんよくなる輝きの悪竜現象ファヴニールを単身で斃たおした勇士。

竜の心臓を口にして、無敵の力と神々の智慧ちえを手にした窮極のひと。

地上に並ぶものなき存在。各地歴代のあらゆる王よりも誇り高く、誰よりも自分自身に厳しく、黄金を惜しまず、敵に後ろを見せるのを潔しとせず、颯爽さっそうと立ち続ける者。

そして、あまりに巨大な勇気を以って、この私へと手を伸ばしたあなた。

——シグルド。ただひとりの私の英雄。

あなたは何もかもを知らされていたのに“炎の館”へと来てくれた。

ヒンダルフィヨルの山へとあなたは迷いなく進んで、神々の盾で編み上げられた壁をたちまち切り裂いて“炎の館”へと入ってきた。覚えている。ああ、覚えています、たとえ父にもたらされた死の眠りに微睡まどろんでいたのだとしても。

今も。今も。あなたの大胆な視線をはっきりと。

燃え盛る館の中心で横たわり、覚めぬ眠りに就いた私の……。

この肉体にぴったりと張り付いた魔銀ミスリルの鎧よろい、その意味をあなたは瞬時に理解して。

魔剣を振るった。

私を斬った。

迷う素振りなど微み塵じんも見せず、凍土にも似た氷の気配さえ漂わせながらの一閃いっせん。

最も早はやこの肉体を縛る枷かせでしかなく、大神の最後の呪いと化して茨のルーンと同化していた魔銀の鎧を、あなたは鮮やかに引き裂いてみせたのだった。およそ人間の技ぎ倆りようと贅りょ力りよくで叶うべくもない偉業を、魔銀斬りを、気負いも緊張もなく一瞬で。

その直後、わたしは目覚めた。

大気、熱、清らかさ、淀よどみ、氷と炎のもたらす多くを初めて肌に感じながら——  
ワルキューレではなく、まったき肉体を備えた人間へとすっかり変成して、生まれたままの姿を露あらわにしながら瞼まぶたを開いて、物質としての瞳ひとみで初めて目にする存在を、あなたを、まっすぐに見つめて。

「私の眠りを覚ましたのは……ファヴニールの無敵の兜かぶとを身につけて、手には竜の死グラムを携えて、竜の心臓を以て比類無き力と智慧を得ながら……呪われし此处ここに来てしまわれたのは、シグムンド王の子、シグルドさまですか」

そう言った。

大神の娘としての託宣ではなく。

自らの喉のどを震わせて、舌で紡ぎ、唇から発語した初めての瞬間だった。

「何故」私は問うた。「あなたは知っていた筈はずです。シグルドさまが私と出会ってしまえば、先に待つのは破滅の未来ばかりであると……」

「同意する。当方は既にグリーピル王より予言を聞き及んでいる」

「なら、どうして」

「当方の道に愛は不要。情は無用。私は私の為なすべきことを行い続けるまで」

あなたが何を言っているのか、正直なところ。よく分からなかった。

氷の彫像のように整った容貌ようぼうをした男。

もしくは、氷河から生まれ落ちた魔人であるかのように冷ややかな表情をした剣士。

きびきびとした語調はシグムンド王に似たのかヒョルディースに似たのか、育ての親にして邪悪な策略者でもあったドヴェルクの鍛冶師レギンに似たものか、それとも、もっと遠い祖先から伝わった形質なのだろうかとはぼんやりと考えて、考えながら、その実直な瞳を見つめていた。

見惚みとれていたのだ。

裸身を晒さらしたままの私を前に、堂々と、動揺の一切なく佇たたずむあなたの姿に。  
。

勇士たちを自動的に魅了してやまないという戦乙女の肉体に、何の感情も見せず、こ  
うも理性的に言葉を放てるという精神の堅牢けんろうさ——野卑を良しとせず、礼を重  
んじ品の良さを思わせる穏やかな瞳の色に。

ややあって、私は唇を開いて再度尋ねた。

ほんの一瞬の間の後かと思ったが、一晩が過ぎる程度の長さであったかもしれない。

「では、あなたは……予言に逆らうのですね。私を救っても、私を、愛さない」

ヒョルディースの弟エイリミの息子たる賢者、グリーピル王の予言に曰いわく。

山で眠る戦乙女をシグルドは目覚めさせるであろう。

両者は恋に落ち、愛を知るであろう。

戦乙女はルーンを始めとする多くの知識をシグルドへと与えよう。

戦乙女、すなわちブリュンヒルデはいつかシグルドのすべてを奪うことになるろう。

概要で言えばこのように。他にもつぶさに、詳細に。賢王たるグリーピルの語った予  
言は精確無比で、私と出会ってしまうことで輝かしい武勲の数々は露と消えて、痛まし  
くも惨むごたらしい最期を迎えるのだと、あなたは確かに知っていた。

それでもこうして「炎の館」へと訪れたのは、ああ、成る程。

私を愛しないと決めていた——

それなら、確かに。

こうも堂々として振る舞えるのも当然のことに違いない。

「良かった」

私は安あん堵どの息を吐いた。

そして同時に、想い人から別れを切り出された人間の生娘の如く瞳に涙を溜ためた。

この勇士は私を救いはしたが、私を愛さない。何を期待した訳でもなく、むしろ、私  
たちが交われば多くの悲劇を撒まき散らす結果を招くと充分に知っていたというのに、  
いざ目前で「愛さない」と言われただけでこの有り様。

私は、自らを組み伏せる男の存在を浅ましくも求めていたのか？

それとも。たった一目、見ただけで……恋に落ちてしまっていたのか。

そう自問した刹せつ那な。

あなたは言った。

「肯定だ。当方は賢者の予言に逆らうつもりでいた。是これなる永劫の炎に捲まかれた  
館より乙女を救いはしても、愛する等とは有り得ぬと信じていた。だが——」

あなたは、私を見つめたまま。  
あなたは、私へとその右手を伸ばして。  
「一ひと目め惚ぼれというのだろうか」  
魔銀の鎧よりも硬いように思われた、氷の表情が。  
その時。  
まったく違ったものになっていた。

——笑顔ひとつで。あなたは、私を中心から貫いてしまったのです、シグルド。

私たちは恋に落ちた。  
母の愛を知らず、父の愛も知らず、神の愛も知らずに戦い続けてきたあなた。  
大神の意向によって稼働し続ける自動的な存在として振る舞ってきた私。  
愛の何たるかを知らなかった私たちは、此处で初めて愛の如何いかんを知ったのだった。  
まるで、世界の色が変わったように思えた。  
この出会いの瞬間から、すべてが——  
時が逆転しながら万物が創造されたかと錯覚してしまう程に。  
朝の訪れを告げる小鳥たちの囀さえずりが、子鹿にそっと寄り添う母鹿が、遅たくましく伸び上がって実を付ける草木が、春の日に咲き誇る花が、流れゆく雪解けの水が、刃を打ち合う戦士たちが、男たちの帰りを待つ女たちが、熱によって鍛え上げられる鉄が、空に昇る陽が、夜に煌きらめく星々が……私を取り巻くすべてが何を以て成されるのかを私は理解した。  
大おお袈げ裟さに過ぎるとあなたは言った。  
そんなことはありません、と真顔で私は切り返して。  
館の炎は消え失せて、余人の訪れる可能性のない逢おう瀬せの館へと変貌してしまった。  
私は原初のルーンを始めとしたすべての知識をあなたに伝え、この先訪れるであろう血塗られた悲劇の運命からあなたが生き延びられるようにと心を砕いた。朝には山の獲物を狩って、昼には教師として務め、夜には酒を酌み交わしながら肉を口にして、日の終わりには必ずと言って良い程に互いを貪むさぼって。



私は恋に狂い、愛に狂った。

それはワルキューレとしての決定的な機能破損であり、人間としての成長だった。

あなたは私にすべてをくれた。生まれたばかりの赤子にも等しく、ひととしての経験を何も持たない私に、多くの愛を教えてくれた。

そして。

——私たちは結ばれなかった。

蜜月みつげつは長く続くことはなく。

英雄の旅を続けるために山を下りたあなたは、やがて——

私を忘れてしまった。

恐るべき、嘆くべき、憎むべき、おぞましい魔法の薬のもたらす力によって。

あなたは、私ではない女と結ばれた。

その女は策略を巡らせて、私を、あなたではない別の男グンナルに娶めとらせた。

嫌だ。嫌。嫌。やめて。私は思い出したくない。あの日、あの時、私の許もとに帰って来てくれたあなたを前に涙を流す私へと、あなたは氷の声で言ったのだ。私が伝えたルーンの力によって、グンナルへと姿を変えたままの状態で。

「音に聞こえし乙女ブリュンヒルデ。我が求婚を受け入れよ」

私の涙の理由をあなたは理解できなかった。

だって、すべてを忘れてしまっていたのだから。

私は覚えていた。私は、あなたとの愛の日々のすべてを覚えていたし、たとえ魔術で姿を変えていても、私にとってシグルドはシグルドでしかなかった。グンナルの姿で求婚を代わりに行うという切なさで満ちた行為は、私には、あの日そのままのシグルドが私に愛を告げてくれたようにも思えて。

いいえ、いいえ。

もう、あなたと結ばれることはないのだと悟ったが故に。

呪われた運命をはね除のけることは叶わなかったのだと確信してしまったから。

私は頷うなずいて。

「あなたの言葉を受け入れます。ただし」

剣で打ち合って私を負かせば婚姻を認めましょう、等と言ったのは詭き弁べん。

竜殺したるあなたに、大神の末裔まつえいたるあなたに、この身体に備わった戦闘技術のすべてを継承させたあなたに、私が勝てる道理などないのだから。私はグンナルの装いをし続けるあなたに敗北し、卑劣なるグンナルと婚礼を上げる運びとなって。

ああ、定められた予言のままに。

血塗られた悲劇――

いいえ、惨劇の到来を私は受け入れる他なかった。

それはまるで、終末の戦いを避けることが叶わないアースの神々と巨人たちの如く。

――許せなかったの。私、どうしても。どうしても。どうしても。

失われたあなたの愛が？

私ではない女があなたへと捧ささげた愛が？

グンナルの私への愛が？

激しい感情の爆発から神の狂気を発露させた私は、ただ、ひたすらに荒れ狂った。

殺した。

殺した。

殺した。

真っ先に、私の狂気はあなたを真っ二つにして殺してしまった。

純粋なグッドルムにそうさせたような気もするけれど、結局、私がそうしたのだ。

誰があなたの記憶を弄いじったのかは分からないから、誰が一番悪いひとなのかは定かではなかったから、もう、あなたの妻の一族郎党を悉ことごとく殺し尽くした。できる限り戦士を殺すように努めたけれど、もしかしたら、女子供まで手に掛けてしまったのかもしれない。

私は私の裡側から溢あふれ出る魔力の炎によって、再び“炎の館”を形作った。

炎の中で私は私自身に刃を突き立てて、こう叫んだ。

「私が愛する男は、シグルドだけ。他にはいない。

誰も、誰も、誰も、誰も、彼以外に私の身体に触れて良い者はいない」

――赤い涙を流しながら。

――炎に始まって炎に終わった、それが、燃え盛る私の炎の記憶すべて。



英霊サーヴァントとはすなわち神話・伝説・伝承にて語られる英雄その人である。

自らが召喚した者が如何いかなる人物であるかはある程度までは事前に把握できよう。

ただし、魔術師マスターは注意せねばならない。



果たして――

何処まで伝説は正しいのか？

多くの場合、英雄を語る伝説はただひとつ限りではない。

通常、大綱は同一であっても細部の異なる伝説が数多く存在しているだろう。

定説とはまったく違う内容を語る異説も存在し得る。

そして、それらのすべては必ずしも事実の記録とは限らないのである。

多くの場合、英霊たちは実際に伝説としての過去を経験している。

英霊の座という領域に留とどまってはいるが、ある意味では、人間としての死の直後から時間が停止している存在という見方も可能だろう。

英霊の人格を知るにあたり、伝説を紐ひも解いて英霊の過去を知る行為は有効だ。

しかし絶対ではない。美談として紡がれた物語が当人にとっては悲劇であるといった事態は十二分に存在し、その逆もまた然しかりである。

更に、是これはあくまで例外として。

いずれかの伝説より直接生み出されたが如き英霊も存在する可能性がある。

ある種の幻想種にも同じく言える仮定ではあるが。

この例外が現実として訪れたならば、その時、我々はひとつの命題に行き当たる。

すなわち神話とは神代を垣かい間ま見みるための不完全な記録であるのか、もしくは、ある時点から時を遡さかのぼって形作られた創成される過去であるのか――

この命題を証明する術すべは無きに等しいと言わざるを得ない。

時空を、決して自在に扱えぬ我らには。

(古びた一冊のノートより抜粋)



男は――

ナイジェル・セイワードは残り時間の少なさを自覚していた。

状況を精確に把握していると言うべきだろうか。

時刻は深夜。

天候は晴れ。

直前までの雨が嘘であったかのように星々までもが姿を見せ始めた東京の空の下、都内千代田区はＪＲ秋葉原駅付近の五階建て雑居ビルの屋上に佇み、およそ決定的と言える運命的な事象の訪れを待ちながら、彼は、深く静かに思案する。

直前にこの屋上で起きた出来事が何であったのかを、意識の裡側で整理する。

自らの手駒であった筈のランサー・ブリュンヒルデの離反。

或あるいは暴走か。主従の契約及び令呪使用による支配から逃れられはしたものの、その宝具たる魔銀の巨槍きょそうがナイジェルを両断することはなかったという結果から鑑かんがみれば、やはり暴走と称するべきか。英霊の性質と能力パラメータを見通すマスターとしての「眼」で一瞥いちべつした限りでは、狂化や精神汚染といった精神系スキルの発動は見受けられなかった。危機的状況バッドステータスを示す警告の類たぐいもない。

だが。あれは完全に壊れていた。

自我。ひび割れ崩れ去る。

意識。定かならず朦朧もうろうと。

感情。際限なく昂たかぶり続けて、燃え盛る。

人間の精神活動の何たるかを探究し続けてきた彼だからこそ、理解する。ランサーという人格の中核を形成している部分が、あの時、敢あえなく崩壊したのだと。精神系スキルやバッドステータスとして聖杯の機構システムが捉とらえなかったのは、人格崩壊に伴うランサーの変質が一時的ではなく恒久的なものであると認識した故なのだろう。

つまるところ、ナイジェルは力加減を間違えたのだ。

精神が耐久し得る限界線を狙って行使する筈の、霊薬を。言葉を。命令を。

理論的な破綻は綻たんもしくは計算ミスの下でそうなったのか？

否。ランサーが此处から姿を消してから現在に至るまでの短時間で既に七度の再計算を彼はシミュレートしているが、理論と式の完璧かんぺきさを確かめるだけの結果に終わった。少なくとも魔術的視点では一切の問題が見受けられない。

ならば、何故だ。

この事態は偶発的な事故であるのか。

完全な支配をもたらす精神操作の妙技が導いてしまった、完全な暴走だとでも。

(もしくは、是こそが必然と呼ぶべきか。

ブリュンヒルデ。陰謀と策謀の果てに荒れ狂う無様こそが、貴様の本懐なのか？)

疑問。疑念。対象者が存在しない以上は質問ではない。

無言のまま、上着の内ポケットから取り出した煙草を一本咥くわえて――

マッチを擦すって火を点ともす。

発火に際して彼は魔術を使わない。元素魔術の基礎程度は修めていても、火に類する魔術はなるべく行使しないように決めていた。他の元素に比べても火は二次的効果が強力に過ぎるというのが理由であって、好き嫌いの問題ではない。

ナイジェル・セイワードは何をも好まず何をも嫌わないのだから。

「……」

灰色の息が夜空に吸い込まれていく。

呼吸のひとつごとに、雑居ビル屋上に僅わずかな光が灯ともる。煙草の火だった。

煙を吸い込む毎に煙草は先端から灰と化していく。

その光景は、何処か、現時点のランサーの在り方によく似ていた。

ランサー・ブリュンヒルデの使う原初のルーンは、広域破壊能力を有する第二宝具の使用を制限することで初めて発揮される。元来の彼女が所有しているルーン魔術のスキルそのものが一時的な強化を施されるという形式を取るが、実質的には第三宝具に相当する強大な力であると言えるだろう。

原初のルーンの行使を以て、半神とも言うべき高次の存在へと昇華されるのだ。

宝具の解放に等しいと規定されるのは当然だろう。

威力も。代償も。

「……私からの魔力供給のみで、あれほど巨大な力を扱える訳もない」

灰色の息を吐きながらナイジェルは呟つぶやく。

既に数分前に辿たどり着いた結論、まず間違いなく正解であろう推測結果。

真の力を振るうブリュンヒルデは確かに愛の炎を燃え上がらせるのだろうが、それは、自滅するまで燃え続ける死の炎に過ぎない。原初のルーンを使用するための魔力源リソースは、十中八九、ランサーの魂と霊核そのものに違いない。大聖杯の機能によって初めて成し得る偉業、英霊現界という奇跡そのものを代償として、遠き過去の彼方かなたに失われた筈の神代の力が振るわれるのだ。

美しい、とは思わない。

虚むなしい、とも感じない。

数時間も保もつまい。

端的な事実をのみナイジェル・セイワードの頭脳と精神は認識していた。

燃え盛ってしまえば、たちまち燃え尽きるまで。

「それがお前の愛か」

小さく呟く。

自分以外の誰にも聞かれない筈の、独り言だったが。

——ふわり、と。同時に、雑居ビル屋上に顕あらわれたものがあつた。

可か憐れんにして華麗なるもの。

純粹と無垢むくの具現。

幻想がかたちと成る事実を知る魔術師の身にも関わらず、ナイジェルは妖精ようせいの存在を脳裏に思い浮かべる。星の触覚として顕現するガイアのそれではなく、幼い子供のために綴つづられる穏やかなお伽とき嘸ばなしのそれだ。現実と幻想と夢想、それらの違いを誰よりも知り得ている筈なのに誤認しかけた。

大いなる錯誤に相応ふさわしい存在が、東京の夜に姿を見せていたのだった。

微笑みながら。

星々の祝福を全身に浴びながら、夜に舞うもの。

翠みどり色のドレスを身に纏まとった、たったひとりの少女のようにも見えた。

「沙さ条じょう愛まな歌か」

自然と唇が名を紡ぐ。



沙条家の子女。名と顔は知識として有している。極東に於いては比較的に名門とも言うべき黒魔術師の家系に生まれ、しかし家系が本来有している以上の天賦の才を備えて生まれ落ちたという少女。一部の噂では、魔術刻印の継承もされぬままに一流の魔術師の如く振る舞ってみせる驚異の天才であるという。

瞬間的に彼は理解する。

天賦。天才。その程度の表現で収まりきる程度の器ではない、と。

成る程、沙条家の参加は確実視されてはいたが、当主ではなく子女だったとは。

是こそが来たるべき事象そのものだ。時計の針を真っ白な指先でそっと押すことで、この自分に残された時間すべてを消費させてゼロへと至らせる者であり、東京で行われる史上初の聖杯戦争の最有力勝利者候補である者だ。

最後に残ったサーヴァントはランサーの他に、アサシン、キャスター、セイバー。

影の英霊アサシンと術の英霊キャスターのマスターは既に絶命していると監督役は言っていた。ならば少女は剣の英霊セイバーのマスターということになるか。

「ごきげんよう、ランサーのマスター」

少女が言った。

二秒程の時間を喫煙のみに費やして返答しなかったのは、警戒のためではなく、単に自覚を失っていたためだ。ランサーの暴走を経た今となっては、既に、自分という人間は契約を正当に交わしたマスターであるとは言い難い。

天使の羽を模した令呪は瞳の中に一画ばかり残されてはいるものの。

「今晚は、お嬢さん。サーヴァントを失った私に如何なる用向きかな」

静かに告げる。

この言葉にさほどの意味はない。

令呪が存在している以上はマスター権を所有しているものと見なされる。聖杯戦争を円滑に進めようというマスターであれば、こうも無防備に、雑居ビルの屋上に単身で姿を晒したままの自分を見逃すことなど有り得まい。すべて承知の上だ。幾らかの結界を張ってある屋内に戻らずに、こうして此处へ佇み続けたのは。

ただ、端的な一面での事実を述べるという意味では正確な言葉ではある。

離反と暴走。

やはり、ランサーに対する支配力は失われているのだから。

「少し、確かめたいことがあって」少女の声は、天上の歌のようでもある。

「何かな」

「あなたは知っているわよね。聖杯を、願望機として稼働させるのに必要なもの」

首を傾げながらそう尋ねられると――

料理なり菓子なりの献立を尋ねられているような錯覚さえ湧いてくる。

仕草が、表情が、在り方が、少女は可憐に過ぎるのだ。人倫を超越して日々探究を続ける魔術師のそれには到底見受けられず、ああ、慣れぬ者であればこの言動だけで面食らって先手を取られるだろうなとさえ思う。

だが、ナイジェルは酷ひどく冷静な面持ちを崩さない。

驚きよう愕がくも啞然ぜんも呆然ぼうぜんも、源はいずれも感情だ。ならば執着以外の何をも抱くことのない身には影響があろう筈もなく、故に静かな返答が可能となる。

「……大聖杯は、それ単独では願望機として稼働することはない。聖杯を以てして召喚される英霊七騎の魂、絶大なる魔力の塊であり奇跡の具現であるそれらをくべてこそ、大聖杯は正しく願望を成就させるために機能する」

すなわち。

大いなる欺ぎ瞞まんに基づいて聖杯戦争は運営されている。

マスターの振るう力として召喚された英霊たちは、誰ひとりとして、その切なる願いを果たすことは叶わないのだ。契約を結んだ魔術師たちは、皆――少なくとも魔術協会なり聖堂教会なりに接触できる立場であれば、この欺瞞の機構システムをまず第一に知らされる。

神話の再現にして超常の具現であろうとも、所詮しょせん、英霊は手駒に過ぎず。

サーヴァントという名の示すが通りの従僕であり、消費物であり、聖杯戦争と名付けられた極東の魔術儀式に於ける“触媒”であるのだ。

だからこそ、マスターとなる魔術師は令呪の一面を必ず最後まで保有し続ける。

何故ならば――

「ええ、それ。七騎ともくべなくてはいけないなんて、酷い話だと思うの。最後の最後には令呪を使って自分のサーヴァントに自害させて、はい、儀式は完了、だなんて」

「英霊は元より現世の存在ではない。根源へ至るためであれば、些さ末まつな犠牲だろう」

「そういう考え方、好きじゃないわ」

哀しげな声だった。

形の良い眉まゆが声色と同じように顰ひそめられていた。

「何にせよ、セイバーの代わりにする一騎ぶんの魂を集めなきゃいけない……そう思っていたのだけれど……もしかして、二騎ぶんになるのかしら。あなたのランサー、今にも燃え尽きてしまいそうだから」

「……何？」

返答が。遅れた。

ほんの一瞬の間ではあったが。

驚愕。啞然。呆然。いずれの感情も覚えないままにナイジェルは聞き返していた。

「契約下にある自らの英霊の魂を使用しない、と貴様は言うのか？」

「ええ、そうよ」

「根源への到達ならずとも、自分自身にとっての願いはある筈だ。それを……」

「わたしの願いは、セイバーが抱いている願いを果たすことだから」

「何？」

「だから、ね」

夜に飛ぶ鳥の如くして、大きく、両手を広げて。

星空を見上げて。

少女は言った。

唄うたうように、請い願う、それは世界で最も美しく響く歌のようでさえある。

——時間を、空間を、そういうモノのすべてを超えて。

——失われてしまった古き王国ブリテンを完全な姿で取り戻してあげたいの。

「それが、彼の心からの願いだから」

微笑みながら少女が囁く。

はにかむ素振りさえ見せて、春に咲く可憐の花そのものの気配で。

何処か誇らしげな声色を含むように感じられるのは、何故か。理解できる。ナイジェル・セイワードには十二分に把握できる、まったく同じ感情をランサーの中で育成させてきたからだ、この聖杯戦争の間ずっと！

「莫迦ばかな」

完全な驚愕と戦慄せんりつと共にナイジェルは短く叫んでいた。

有り得ない、と首を振る。

理解も把握も認識も完全に果たしているが故の茫然ぼうぜん自失だった。

恋のため、愛のために。

感情の赴くままに、この天賦以上の稀有けうなる存在は聖杯戦争を踊るというのだ。

この奇異を前にして、激しく、感情なき筈の肉体が揺さぶられていた。嗚呼ああ、今や執着だけではない。雑多にして混沌こんとんたる自然の在り方の如く、止めどなく溢れる無数の感情の奔流が湧き上がってしまう。胸を押さえる。止まらない。止まりはしないのだ。

古き王国の再生だと？

時間。

空間。

事象の固定帯それらのすべて。

聖杯戦争の勝者となるだろう人物の心からの言葉を耳にした以上、無感情の人形でいられる筈もない。何故なら。ああ、何故なら！少女のかたちをした是なる“何か”が口にしたのは、紛れもなく――

「人理定礎を破壊しようというのか」

「ええ」

「……セイバーの願いがために、貴様は……世界を破壊するのか……！」

「ええ。そうよ？」



さらりと。何の躊躇ためらいもなく。

「何故だ」

「だってわたし、彼に恋してしまったもの」

返答ごく端的に。

この上ない程に単純で、この上ない程に馬鹿げていて、そして。

まさしくそれは神話の神々が如き純粹であり、無垢であり、星せかいを手中に収めんばかりの力在るものだけに許される傲慢ごうまんの姿そのものだった。湧き上がる恐怖と畏い敬けい、生まれて初めての感情の爆発に晒されながら、ナイジェルは呻うめく。

そして、知る。

奇くしくもそれはランサーが少女を悪しき竜ドラッヘンと呼んだ時と同様に。

自分自身でも掌握しきれない感情に呑み込まれながらも、僅かに残った自我が、意識の欠片かけらが、叡えい智ちを求める魔術師としての断片が、冷静極まる結論を下していた。

ランサー・ブリュンヒルデが暴走した真の理由。

大神の娘としての機能を取り戻したかの如く振る舞った、その原因。

「お前、か……！」

この少女だ。

世界の破壊をもたらそうとする脅威だ。

根源への到達には目もくれず、万象を生贅いけにえに捧げても目的を遂げんとする——伝説の邪竜ファヴニールの欲望をさえ超える、何もかもを喰らう恋心ポトニアテローン！

ランサーは是がために暴走を果たしたに違いない。

聖杯戦争の勝利者となるだろうこの人物の存在を消去するために、或いは行動を止めんがために、北欧の大神が因果に干渉したか。或いは、是こそが世界による抑止力——世界の破壊を防ぐための機構、多くの魔術師たちが真理へと到達せんとする道程を阻むものの一端であるのか。

どちらにせよ、遮光眼鏡サングラスの奥でナイジェルは得心していた。

人生に於ける初めての苛いら立だちを、感情のままに表情として浮かべながら。

「成る程」

頷きながら、戦闘動作を頭脳の中で瞬時に構築する。

残念ながら使用できる術式は多くない。

何分、戦闘を目的とした研究を続けてきた魔術師ではない。体術も一通りは修めはしたが人体の機能的な操作方法という感慨以上の何をも抱けずにいるし、実践の経験には乏しく、精製した人造人間ホムンクルスの性能確認のために多少の組み手を行う程度。

眼前に立つ天賦以上には到底歯が立つまい。

それでも。

「あら？ そうなの？ あなた、私と戦う理由なんてないでしょうに」

「確かに。だが、どうにも——」

自分でも奇妙を感じざるを得ない。

無駄な行いだ。

直前までは残り時間が尽きるのを静かに待って、運命的とも呼べる事象の訪れを——死の瞬間を夜空の下で覚悟していたというのに。完全に逆だ。今や、怒ど濤とうとして全身を駆け巡る数多あまたの感情は、胸の裡で渦巻くただひとつの執着の感情を刺激していた。

「我がランサーが貴様の願いのために消費されるというのは、気分が悪い」

「お門違いではないかしら。でも、そうね。彼女は今頃……」

「黙れ」

拳こぶしを握る。

大きく足を開いて腰と共に重心を下ろしていく。

記憶通りに正しく型を構える。

初めての怒りが、全身に暴力の予感を満たす。

もっとも、それは、更なる別の感情の発露であつたのかもしれないが——



炎と風が、東京の夜空で激突する。

炎は言うまでもない、私、ランサーとして現界したブリュンヒルデのかたち。

風はあなた。

気高くも誇り高き騎士、遠き神代にて星の内海で鍛え上げられた栄光の剣ねがいのかたちを振るう者。世界という薄膜の表裏を繋つなぎ留める光さえ時に槍やりとして振るう、神代の最後の名残を色濃く湛たたえていた古きブリテンの王。

セイバー。剣の英霊。

蒼あお色と銀色の鎧を纏って空を駆けるあなたは、ルーンによる飛行能力を以て襲い掛かる私に翻弄ほんろうされる。魔力放出スキルによる突進と滑空は速度こそ凄すさまじいけれど、ああ、私の機動力には追い付こう筈もない。

「ふふ」

私は、あなたに。

「あはははははははは」

私は、あなたに笑い掛ける。

愛するひとへ。

私が、私たちワルキューレが慈しみを以て導くべき魂の持ち主へ。

私は、既に父たる大神の機械などではないのに。人間になったのに。人間。脆もろくも儚はかなき、尊きものたち。誰のために。父。違う。私。違う。私は大神を裏切ったが故に力を奪われ、魔剣を携えた運命の勇士と出会うためにこそ人間になった。魔剣。魔剣？

いいえ、あなたの持っているそれは魔剣ではないわ。

光輝く黄金の聖剣。

分からない。分からない。分からない。

何故。どうして、あなたはそんなものを持っているの？

ねえ、シグルド。あなたはシグルドなのに自ら鍛え直した魔剣グラムを忘れたの？

背格好も何だか違う。以前と違う。硝子ガラスのようにして双眸そうぼうを覆う、竜の心臓を口にして得た叡智の結晶も見当たらない。まるで別人であるかのよう。

そんな筈はないのに。

だって、私、あなたのことを愛しているの。

こんなにも強く、強く、愛する相手はあなた以外にはいない。シグルド。

シグルド。シグルド。シグルド。

「君は錯乱している。かつて私は竜を斃したが、その者とは違う！ 私は――」



「あはははははははは！」

五〇〇〇キログラムを超過した魔銀の槍の穂先は、既に、一振りで甚大な炎の弧を夜空にもたらす程に育っている。見て。見てください、シグルド。私の愛はこんなに大きくなったの、だから早く。早く。早く。早く！

あなたを殺させて！

真っ二つにしてあげる！

あの時とは違って、今度は、私の手でちゃんと殺してあげるから！

そんなに飛び跳ねないで。

じっとして。動かないでいて。そうすれば、月まで、あなたの上半身を飛ばせるわ。

「殺す、コロ、スウ。コロ、ロ、ロ、コロコロコロコロコロ」

「ランサー！」

「はあい」

「ライダーの神殿で、君は、誇り在る戦いによる決着を求めると言った！」

嗚呼、そんなこともあった。

東京湾に出現した巨大神殿構造体での決戦の折、私は、セイバーとアーチャーの死力を振り絞った同時攻撃を目にして大神の啓示と共に耐え難いまでの高揚を感じ、英霊としてではなく、一時的にワルキューレとしての性質を強く顕して健闘を称たたえたのだった。

半死半生で横たわるあなたに私は止とどめを刺さなかった。

人々を救った英雄を手に掛ける、等と。

だって、それは、絶対に許されない行いだっただから。

偉大なる英雄は相応しい最期を迎えるべきだ。決して、あなたのように策謀と陰謀の果ての狂気などに殺されてしまっただけはいけないの。シグルド。叶うなら、地上で栄光の戦いを成したあらゆるすべての英雄たちが、地中海の古き伝説に語られる、オリンポスの神々の祝福を受けた勇者ペルセウスのように――満ち足りて人生を終えるべきだから。

けれど、戦いの運命が定められているのなら。

せめて。

誇りある全力全霊の一騎打ちの果てに。

—だから、ほら。私は今こうしてあなたを殺すの。シグルド。

光の軌跡。聖剣が幾度も振るわれる。

魔獣程度の存在であればたちまち一斬いちぎんの果てに斃してしまうであろう一撃が、幾つも連なって私の身体へと迫りはするけれど、駄目、そんなものでは届かない。何処までも優しいあなたは私に遠慮しているの？

空中を蹴けって、あなたが私へと七度目の突進を行う。

晴海埠ふ頭とうで神獣スフィンクスを殺した時にもそうしていたのを私は知っているから、目にしていたから、不意を打たれることはない。魔力放出による突進は、決して直線の動きばかりとは限らない。大丈夫。分かっているから対応もできる。

原初のルーンを発動。

私の魂が磨すり減っていく感覚と同時に、炎を纏う偉容偉大の岩塊が月を覆い隠す。

「金星フレイヤ」

大いなる母よ。

父の娘である私に力をください。

そのささやかな欠片を以て、私の愛するあなたに圧死の祝福を。

「さあ、シグルド」

私はあなたに囁ささやきかける。

これで最後。私は、最早狂いきってしまった私は、自動的に成し遂げる。

この手で世界を救うことはできなくても。シグルド、あなたとあなたの救った人々の生きた大地を守りたいけれど。できない。私は、もう、狂って、狂って、後はもう世界の導くままにセイバーを殺すしかないのだけれど。

私は、今、狂気にある種の回路を組み込まれているから。

あの少女はきっと、英霊であろうと、神霊であろうと、ヒトに関わりのあるものへの特効のようなものを有しているのだろう。私は抗あらがうことができない。それとも、この身を駆け巡るナイジェルの霊薬が、少女の手で変質させられてしまったのか。

私は、再設定された私の運命に逆らえない。

あなたが私を殺すのに躊躇っているのだとしても、その尊い感情を否定するのは残念でならないけれど、私はあなたに殺される。

神王や狂獣の時と何ひとつ変わらない。

私が、このままルーンを最後まで行使してしまえば――  
東京のすべてとはいかなくても。

この夜、この時、激突で何万人の無辜むこの命が失われてしまうのか。

「殺します。殺します。

みんな、殺してしまいます。どうすればいいか分かるでしょう、セイバー」

――返答は、無言の刺突攻撃。

――私の中心を霊核ごとまっすぐに貫いてしまう、渾身こんしんの。

刹那、月下に形成されつつあった万死の岩塊は魔力の粒子と化して消え失せる。

おめでとう。東京の夜に眠る数万の人々は、此処に救われた。

「.....お見事.....」

あなたの名誉のために私は誓う。

是は、決して、手加減でもなければ自死でもないのだと。

私は零落した神霊としての全力を以てあなたに挑み、負けた。如何に全能の少女とは  
言っても、私の自動的な戦闘機能を停止させることは不可能なのだから。

ただ、私は、あなたに本気を出させただけに過ぎない。

最強の聖剣使い。

あなたは、きっと、人々のためであればどんな邪悪でも斃してみせる。

私が愛したシグルドとそっくり同じに。

哀れな程に愛を知らず幸福を知らず、人の喜びを知らず、英雄という救世の装置とし  
て魔剣を振るい続けた彼に等しく、あなたは聖剣を振るう。時代の順で言えばどちらが  
先で後であったのか、狂える私にはもう把握できないけれど。

セイバー。ああ、優しいひと。

私は.....。

最期、あなたにこうして胸を貫かれながら言葉を選ぶ。

発声の器官は失われていくけれど、このくらいは父も大目に見てくれると思うから。

「大聖杯に.....潜む.....もの.....、

あれを.....生み落として、は.....いけ、ません.....」

あなたの瞳を見つめる。

月光を映し込んで煌めくその輝きは、不思議と穏やかに映った。

「世界、を……」

終わらせないで。

どうか救ってください。

——儚くも気高い、誰より愛いとしき私の英雄よ——





## Special ACT Women

聖杯。それは、万能の願望機であるという。

我ら魔術師は是これを根源の渦へ到達するための手段であると捉とらえている。

聖堂教会よりもたらされたものではあるが、魔術協会は聖杯に秘められた力を評価した。

英霊召喚、という奇跡にも等しい行為に対して。

召喚される英霊は総じて七騎七種。

剣、槍、弓、騎、狂、術、影。

それぞれ一騎ずつ、彼らは聖杯戦争に参加する魔術師に仕えるという。

クラスというある種の枠に填はめ込まれる形で召喚される英霊たちは、厳密には英霊としての存在そのものではなく、その魂を有したサーヴァントという形で現界する。

エーテルによって形成される仮初めの肉体を以もってして。

英霊は本来、人の手に余る存在だ。

是を召喚せしめる以上、やはり聖杯の力は真なるものなのだろう。

だが――

私は、僅わずかにこうも考える。

人の手に余るものを呼び得るのであれば。

聖杯とは、果たして我らの制御下に収まり続けるものであるのだろうか、と。

無論。杞き憂ゆうであれと願うしかない。

(古びた一冊のノートより抜粋)



Fate/Prototype  
蒼銀のフラグメンツ

『Women』



「はは。鉄の馬もなかなか悪くない！ 本物の馬よりも素直だぞこれは！」

彼アーチャーの声、凜りんと響いて耳へと届く。

英雄の号令ともなれば強風如きに負けはしないのだろうし、喩たとえば大軍団の端から端にまで指示の類たぐいなりを飛ばすこともあるのだろうから、当然と言えば当然ではあるのか、とエルザ・西さい条じょうはひとり内心で納得してみる。

まさかの自動二輪車オートバイでの二人乗りタンデム。

訪日前に計画は念入りに練っておいたから、こういう状況も想定していないことはなかったものの、まさか早々にセダンを失ってしまうとは。一昨日おとといの秋葉原での一件、バーサーカー陣営とのまさかの遭遇は目立った損害こそ発生しなかったものの、タツミ少年に目撃されてしまった自動車を使い続ける訳には流石にいかなかった。

この極東都市、東京は電車による交通網が高度に発達しているので致命的に困りはしないまでも、それでもやはり自在に動ける足は惜しいとエルザは考えて――

であるが故の大型自動二輪車。

換えのセダンも在りはするものの、芝浦埠頭の倉庫に隠した聖杯戦争用の備品一式を前にしてアーチャーが選んだのがこれだった。

「そりゃあね、ハンドルを操作すれば言うことを聞くわよ純然たる機械なもの！」

「んん、聞こえないな！」

「嘘つき！ 聞こえなくてもわかるでしょうに、あなたは！」

燃料容量十九リッター、最高時速二〇一キロメートル。排気量七五〇cc。

鉄の馬と彼が形容するのも無理からぬ、威風堂々たる日本製大型バイク。エルザが一人で乗る時には幾らかハンドル等々の調整が必要だ。なのに何故、備品として用意した



のかと言え、なんとなく、である。人類史に刻まれた英雄を召喚するにあたってどんなものを用意すべきか考えに考えた結果、これという品が思い付かなかったので思うがままに財布を軽く、預金残高のゼロを減らしただけのこと。

我ながら無駄遣いをしたと購入の翌日には悔やんだけれど、結果的には問題ない。

「銘を付けてやらないとな！」

ほら。アーチャーは上機嫌そのものといった様子。

着痩せやせするのだろう、見た目以上に厚みのある彼の引き締まった腰に腕を回して、振り落とされないように注意しながらエルザは考える。街道をまっすぐに走ってくれているうちは、はしゃぐがままにさせておこう、と。

「バイクに名前って付けるものかしら」

「愛馬を無銘のままにさせるのは、些いささか哀れに思うがなあ！」

「まあ、そうね。ええ、あなたの好きにするといいわ」



思わず口元が綻ほころんでしまう。

どれだけ外観がツーリングに勤いそしむ若い男女として成立していたとしても、死地へと赴かんとする英霊サーヴァントと魔術師マスターである事実は一片たりとも変わる筈はないのに。彼の快活な表情を目にして、声と言葉を耳にしていると、ついこういう微笑んでしまう。思考はあくまで冷静に、数時間後には決死の戦闘を行うような状況なのだと理解しているのに、頭の片隅で僅かに思うのだ。

今晚の食事。

すべきことを終えた後の時間、彼には何を楽しんで貰もらおうかしら、と――

アサシンの活動が都内江東区にて初観測された日より数えて、聖杯戦争七日目。

運命の日たる東京湾上神殿決戦の三日前。

未いまだ神王ライダーとの死闘が繰り広げられるよりも前、アーチャーが現界していた頃である。奥多摩山中に潜むという魔術師一族――伊勢三いせみ家が聖杯戦争の参加者に違いないと仮定したエルザが、アーチャーと共に都内甲こう州しゅう街かい道どうを移動していた際の記憶。

エルザは詳細にすべてを思い返すことができる。

彼の声も、彼の腰も、肌に当たる風の勢いも、自動二輪後部座席に特有の振動も。

自分が何を想って、何を口にしていたのかも。

「……ねえ、そろそろ運転を代わってくれないかしら。アーチャーあなた、騎乗スキルなんて持っていないでしょう？」いい加減に脚というかお尻しりの筋肉に疲労があつて、そう言ったのだった。横座りでのタンデムはこの国の道路交通法には反していないか自信がない上に、どうにも目立って仕方ないから。

「そう言うなって。馬の早駆けをさせたら右に出る者はいなかったんだぜ、俺」

「え、嘘。隠しスキルとかあったりするの？」

一瞬の間があった。

沈黙。ああ、これは、駄目な方だと思いながら。

エルザは確信する。生前のアーチャーは確かに馬を自在に扱ったのかもしれないが、あくまで馬の話。ライダーやセイバーが有するという騎乗スキル、サーヴァントとして現界する英霊たちが所有する騎乗の超常能力、動物はおろか魔獣や幻獣といった幻想種のみならず自動車や飛行機まで網羅して自在に操る力についての話はしていない。

つまり、完全な無免許どころか運転技術さえないのだ。彼は。

「……アーチャー！」

「ははは！ 心配ない、もう勘は大体掴つかんでるからな」

目を丸くしながら強くしがみつ়くエルザをよそに、アーチャーは笑いながら鉄の馬で東京を西へ西へと駆けていく。そういえば馬よりも自分が走った方が速かったような気がする、等の驚きよう愕がくの事実を口にしながら、よりにもよって更に加速。加速。加速。

「またそれ。制限速度って知らないでしょう、あなた！」

「知らないな！」 明朗な返答。底抜けに爽さわやかな声色で。

「駄目だってば、目的地に着く前に逮捕されるわよ」

「その時はお前が何とかしてくれるだろ？ ヘルメットって奴、被かぶらなくても捕まってるのはお前のお陰だろうし」

言いながら、今度はぐんと速度を落として制限速度のぎりぎりを行ったり来たり。完全に自由気ままな運転に溺おぼれたのかと思えば、こうして言うことを聞いてくれるあたり、やはり彼は自分に気を遣ってくれているのだろうとエルザは実感する。

本当は、新たな生を受けての二〇世紀の極東でやりたいことも山ほどあるだろうに、彼はこちらをやきもきさせはしても、決して落胆させない。見てくれている。エルザの反応の機微を目め聡ざとく認識して、対処して。

ありがとう、と。

礼を言うのはまだまだ早いのだろうけど。

エルザは思ってしまう。その日が、その時が、できる限り近くでありますように。

「仕方ないわね、もう！」

まただ。口元に笑みを浮かべてしまう。

困らせないと文句を言うつもりだったのに、つい、我慢できずに。

——きっと、楽しかったのだと思う。

——敵地の偵察ないし攻撃を行おうというのだから決死の覚悟であった筈なのに。

——彼と共に過ごした時間。

——一瞬で過ぎ去っていった、煌きらめくような記憶の欠片かけら。

—たとえば、そう。あの時も。



一九九一年、二月某日。深夜。

聖杯戦争四日目。東京湾上神殿決戦から遡さかのぼること六日前

東京都中ちゅう央おう区日に本ほん橋ばし、地名の由来でもある橋の路上中央に配置された道路元標を音もなく駆け抜ける人影を、アーチャーとエルザは追っていた。既に人気はない。かつては水運の町として栄えた地域であったと聞かすが、二〇世紀現在、日本橋周辺は特に商業地区としての性質が色濃い。深夜遅くにもなれば、歩く人間は多くない。

日本橋を目前とする交番前の路上に停めたセダン——未だタツミ少年とは出会う前であるが故に、この自動車をエルザは捨てていない——から橋上の状況を見守りながら、エルザは唇を噛かむ。戦闘に類する魔術の心得がない訳ではないが、純然たる戦闘型の魔術師ではない身では、アーチャーと肩を並べながらの対英霊戦闘に赴く訳にもいかない。

特に、相手が相手だ。

影が如き英霊。

評価Aを時に超えるBプラスの敏びん捷しょうパラメータを有したアーチャーさえ翻弄ほんろうする、駿しゅん足そくにして無音たる暗殺者。アサシンのクラスを得て現界したサーヴァントは、今、日本橋路上に在って高速戦闘を繰り広げていた。

速い。速すぎる。

マスターを失って暴走状態にある英霊、という聖堂教会からの情報を疑いたくなる。

戦闘行為を行っている以上はアサシンのクラススキルである気配遮断の能力は発動し得ない筈なのに、それでも、視覚強化の魔術を施してさえアサシンを目で追うことも困難だった。不可能ではないまでも、幾らかぶれた残像程度しか認識できない。

「深追いは禁止よ、アーチャー。宝具とまでは言わないから、スキルなり癖のひとつなり把握できたらすぐに帰投して」

『了解だ』声なき声で返答が来る。

路上、ガーゴイルじみて橋上に備え付けられた麒麟人像の頭に着地しながら弓を射るアーチャーからのリアルタイムの言葉だった。喉のどを鳴らさず舌に載せず、マスターとサーヴァントのみが交わすことのできる会話の一種である。

『とは言えな、もう勘は大体掴んでるからな』

「勝てるって意味？」

『ここで死にはしないって意味だ。俺もそうだし、あいつもな』

「それじゃあ」

駄目じゃない、と返答しかけて口をつぐむ。

それこそ駄目だ。彼の軽い口調に呑まれてしまっただけではない。状況はまさに命を懸けた戦闘の真っ最中、僅かな気の緩みが生死を分ける。勘違いするな、とエルザは思考の片隅で自分自身に言い聞かせる。彼が穏やかさを維持しながら言葉を告げているのは、こちらに余計な気負いをさせないためだ。

高速移動しながらアーチャーと戦うアサシンの戦闘スタイルは中距離の射撃型。恐らくは魔力で形成した短刀ダークのようなものを複数同時に投擲とうてきしながら翻弄し、アーチャーへの接近を図はかっていると思おぼしい。

無闇矢や鱈たらと突撃をしてきたりはしない。

四日前に自らのマスターを殺害し、自己保存を目的とした魔力補給のために東京の一般市民を襲うようになったというのが、なかなかどうして冷静な反応だった。既に深夜ラジオ放送あたりで語られる都市伝説になりかかっている程であるのだから、最も早はや手の付けられない暴走ぶりであるものと想定していたけれど。

「池袋あたりで殺し回ってるって情報だったけど」

少なくとも、戦闘に際しては自我を保っていると見るべきか。

ハンドルを掴むエルザの手に力が籠こもる。

義憤のためではない。ただ、目前で行われる英霊同士の戦闘を前にして、自然と。

「……嘘でしょ」

汗ばんだ手のひらを実感する。

爪が食い込みそうなくらいにハンドルを握りしめていることに気付いて。

「昂たかぶってるの、あたし？」

独り言だった。

苦笑がじわりと滲にじんでくる。

世界を変えたい——地獄を包むほんのささやかな薄皮こそが世界に過ぎないなら、生まれた座標の違い、紛争地と先進国といった距離の違い程度が生死を分けてしまうのがこの世界であるのなら、あらゆる母子が救われるのが不可能な世界なら、無慈悲の暴力が愛する子を殺す世界なら、そんなものは変えてしまいたい——そう、強く、強く願った果てに聖杯戦争への参加権を掴んだというのに。

この上ない程に荒々しく、物理さえ超えて音速のやり取りを繰り返す英雄たちの戦いを前にして、昂ぶってしまうなんて。

「浅ましい女」

独り言をもうひとつ。

——莫迦ばかなママでごめんね、ルカ。

——でも、諦めあきらめたりしない。彼アーチャーがいてくれるなら、きっと。あたしは最後まで。

『浅ましくはねえだろう』

不意に、声。音ならざる声が響いて。

彼に伝えようとして発した言葉ではないし、ただの独り言として呟つぶやいた声が、まさか届いている筈もない。それでも、明確なまでの返答だった。エルザの視線の先で、彼は麒麟像から高々と四メートル程も跳躍して、くるりと天地逆転、足の爪先を空へ、頭部を橋上へと向けた状態で真紅の大弓による同時七連射。

『男が死地にいる時に祈ってくれるのは、まあ、佳い女って言うんじゃないのか』  
影さえ縫い止めようという勢いで魔力矢を放ちながら、嗚呼ああ、彼の言葉は続くのだ。

『俺は好きだぜ』

更に速射。

日本国道路元標、と刻印された日本橋路上中央の金属盤の真上で、精確無比の狙い澄ました矢の一撃を捌さばききれずにアサシンが動きを止める。手にした短刀を力強く振り抜いて弾はじく、という迎撃方法は、戦闘を開始してから初めての行為だった。これまでは、すべての矢を回避してみせていたというのに。

『ようし！ 今のは弾いてくれなきゃ困るところだった！ この橋、遺跡か知らんが昔からあるものなんだろう、それなら全力の矢なんざそう何発も射うてないからな！』

明るい声色に、思わずエルザは口元を綻ばせてしまいそうになる。

戦闘中だ。まさか微笑む訳にもいかない。

それでも、こうして、ぎりぎりの死線をかいくぐっている最中の筈なのに、文化財に気を遣って全力射撃をしていませんでした——なんて突然のサプライズをされてしまったのは、何らかの反応を返さずにはいられない。

「仕方ないわね、もう！」

後で、文句のひとつも言うのは当然として。

今は。このくらいで。



この肌に触れたものは誰であろうとすべて、すべて、死にゆく。

生命活動を行っているのであれば、人であろうと獣であろうと、地上の正しき系統樹ならざる幻想なりし獣の類であろうと殺してみせるだろう。

私は死。私は毒。

私は、アサシンとして二〇世紀極東に現界した暗殺の華。

真名、静謐せいひつのハサン。

なのに。

我が身に触れて、或あるいは触れられても死なざる者がこの都市には在る。

ひとりとは少女。沙さ条じょう愛まな歌か。

ひとりとは少年。來きた野の巽たつみであつた冷たき骸むくろ。

そして——





「大したもんだ、今のは本気で射ったんだぜ」

あの日、あの夜。

私がマスターを殺してから四日目の夜、東京は日本橋の路上での戦闘のさなか。

あなたは声を掛けてきた。

私は、足を止めてしまった。

油断を狙っての言葉であろうとは考えなかったのだと思う。

ただ、なんだろうと。

ただ、疑問に思っ

詳しくは分からないまでも、聖堂教会が――

聖杯戦争の監視役として活動するテンプル騎士団が私を疎んでいるのは知っていた。

英霊を召喚したマスターたちに情報を流していることも。

ただ、あなたたちは何も知らないのだ。

私が既に野良ではないことを。

仕えるべきあるじを、焦がれ続けた相手を、月光の下で私が得た事実を。

「なぜ、すべて本気で射たないの。それなら、私を殺せるかもしれないのに」

疑問を言葉にして舌に載せる。

寒空に、声は溶ける。

「なぜ、どうしてもは俺の言葉だろうよ。娘さん、あんたはなぜ人を殺す。暗殺者の英霊だか何だか知らんが、無辜むこの民を殺すのは如何いかにも筋が悪い」

矢を放つ英霊よ。反英雄というものをあなたは知っているだろうに。

魂喰ぐいによる魔力補給という行為が、現界維持に繋つながることだって。

「魂が、必要だから」

「いや、いや。そういうことを言ってるんじゃないよ」

「そう」

「ああ、そうさ」

意味がない。なんという空虚なやり取りなのだろう。

私はそう思って、加速を再開すべく僅かに姿勢を変化させる。

まだ、彼には我が身の最速を見せていない。

気配遮断を解いてしまったけれど、大丈夫、三騎士クラスが相手であろうと戦える。

私は、私の命と引き替えになら一騎程度を殺すことができる筈。

聖杯戦争を勝ち抜こうとは思わない。

この身、この命は、もう、あるじへ捧ささげると決めている。

だから足を止めたの。

だから戦っているの。

「さようなら」

一言。アーチャーへの言葉であり、あるじへの別れの言葉でもあった。

私は、此処ここに最速を以てして彼を殺そう。

回避ではないし牽制けんせいでもない。超至近距離へと直線で間合いを詰めての、渾身こんしんの突撃。

突撃そのものに意味はない。

さあ、殺して。

さあ、ばらばらに引き裂いてみせるがいい。

この仮初エーテルの肉体を四散させることで発生するだろう大量の血液は――

たった一輪だけ咲き誇ることを許された毒の華は。

英霊であろうと、幻想種であろうと、全細胞を侵し尽くして殺す。

「——駄目だ」

凜とした声が響いて、この体が止められていた。

そして、私は目を見開いてしまう。

有り得ない。有り得て良い筈のものではない。

だから記憶に鍵かぎを掛けるしかなかった。

何かの間違いであったのだと、実際にはそんな行為は存在しなかったのだと、信じて

。

けれど、ほら、思い出してしまう。

彼は。アーチャーは、確かに、肉薄して迫る私の右腕を掴んで見せたのだ。

「いいのか」

彼は言った。

強い意志の込められた黒い瞳ひとみで、仮面越しの瞳を見つめながら。

炎のように熱い右手で、確かに、右腕をしっかりと掴みながら。

「あんたは、本当に、それでいいのか」



一九九一年、二月某日。深夜。

聖杯戦争十三日目、東京湾上神殿決戦より三日後。

割り当てられた沙条邸の客間にて、私は、我知らずに右腕に触れていた。

触れる——否。撫なでる、と表現すべきなのかもしれない。

記憶の奥底に封じ込めて忘れ去った筈の感触を、男アーチャーの手のひらから伝わる熱を、指先がなぞっていく。思い出すな、思い出してはいけない。それは、在ってはならぬ記憶であって、故に鍵を掛けた筈のものである。

不要なものを想うな。無為無益。枷かせなど要らない。

忘れてしまえ。

私は、ハサン・サッバーハとしての矜きよう持じさえ失って、あの御方の祝福を得て果てたという最期さえ捨てた浅ましさの極みであるところの私は、既にあるじを得た。

毒の肌に触れても死なぬ娘。

月光を浴びて踊る天使が如き美しさの果て。

永遠そのものであるかのような、少女、沙条愛歌こそが。すべて。私のあるじ。

「あなた以外、何も、要らない。求めません。私は既に得たのだから」

唇が紡ぐ音は、沈殿したかのように淀よどんだ客間の空気を虚しく搔かき乱していく。

私よ、惑うな。

私よ、信じろ。

この身と魂は救われている。

もう、求めるもののすべてを手にしたのだ。その後に起きたかもしれない心乱す出来事の数々は、すべて、すべて、泡沫うたかたの夢に過ぎない。何かの間違い。実際には何も起きていない。起きていないと信じる他にない。

確かなものはただひとつ、あるじだけ。他にはいない。何も、何も――

「……ウ……」

音がひとつ。

呻うめき、と呼ぶ方が正確だろう。

私の言葉に反応したのだろうそれは、部屋の中央あたりに据えられたソファの上から。

「きみを、ころしたく、ない」

振り絞るが如きか細い声だった。

拡散し続けていく意識を、必死で繋ぎとめようとしながら発せられる意思だった。

声の主を私は見つめる。ソファに座って、こちらを見上げて呻きを漏らすものを、この極東都市に生きる年若き人間であった筈の残骸ざんがい、白濁から呪わしき赫あか

色へと徐々に変化しつつある瞳を有した動く死体リビングデッドをまっすぐに見据える。

瞳に混ざり始めた赫は魔眼の発動を示すものではない。

魔術師の世界には詳しくないが、あの瞳は失われてしまったのだろう。

此処に在るのは、ねじ曲げられた生命の在り方を示す不浄の色に過ぎない。

「タツミ」

彼の名を呼ぶ。

いいえ、彼が生きていた頃に有していた名を口にする。

いいえ、彼が生きているかのようにして名を囁かさやくのだ。

彼は、死んでいるのに。

私が殺したのに。

今も、彼の命を脳ごと蕩とろかして砕き尽くした時の甘い感触が唇に残っている。

罪悪感。そんなものはない。私は、魔力のためではなく、私がこの世界に留とどまり続けるためではなく、間違いなくあるじのために行動した。あるじのために殺した。ならば、誇りこそすれ悔いるなど有り得ない。

むしろ、そう、彼だって誇っていい筈なのに。

自分の命は無駄ではなかったと。あるじの、ために、捧げたのだと。

そんな風に、もしも、思うことができるなら――

「にげろ、ここは、だめダ」

言葉は幾らか流りゅう暢ちょうに。

術の英霊キャスターによって再生されたばかりの頃は、もっと拙つたなかった。たった数日でここまで言葉を編み上げるということは、霊核の形成に成功しているのか。私には分からない。魔術のことも、死者のことも。

分かることなど、この世界には殆ほとんど在りはしない。

自身についての事柄さえ、時に、定かではなくなってしまう。

けれど、けれど。

想うことなら少しは叶かなう。

たとえば、タツミであつたものが何を言おうとしているのか。

「きみは、こんなところに、いちゃ、いけない」

「ええ」

「にげ、テ」

「ええ。そうね」

頷うなずいてみせると、彼は幾らか揺れ動く。

喜んでいるのだろうか。あの夜のつづきを永遠に繰り返す続ける彼は、今も、この自分の身を案じている。助けようとしているのだ、聖杯戦争に巻き込まれてしまうかもしれない異国の娘わたしを。

聖杯戦争を止めようとしながら死したあの瞬間の記憶、あるいは記録が、きっと焼き付いているのだろう。

現代の機械のことを私はよく知らないけれど、想う。

彼は壊れた機械のよう。

毎夜、言うのだ。殺したくない。来るな、逃げろ、と。

決まって、深夜零時を過ぎた頃。白濁した瞳に赫色を僅かに増やししながら、彼は。

「.....本当に、優しいひとなんですね。あなた。キタノタツミくん」

「ウ、ウ」

「あなた、もう、死んでいるのよ」

「ウ」

「あなたは私を殺せないのに。きっと、バーサーカーも優しいひとだったのね」



—極力、息をひそめておく。

—死の息吹ポイズンブレスが、これ以上、彼の脳を破壊してしまわないように。

「ねえタツミ」

小さく囁きながら。

何かを願いながら。

私は、死を秘めた両手で彼の頬に触れる。

「口付けしても、あなたは、もう、死なないんですよね」

私よりも—

あの夜のアーチャーよりも、それは、ずっとずっと冷たい肌だった。



我が愛しき英雄たちよ

たとえ杯があなたたちを惑わせようとも

たとえ悪しき竜が顕あらわれようとも

尊きものは

けして潰ついえぬ

あなたたちのうちひとりでもかまわない

世界をどうか

(池袋路地裏の落書きより抜粋)





「――女たちよ」

男は言った。

光差さぬ場所だった。

其処そこは、紛まごうことなき暗黒によってのみ形作られていた。

東京地下大聖杯。

聖堂教会の中心である数百人の枢機卿のうちひとりが秘密裏に持ち出した模倣聖杯、まさにこの極東都市・東京で行われる聖杯戦争の中心となる存在であるというが、暗がりの底に佇たたずむ男にとっては異なる意味を持っていた。

決して、是が聖なる杯であるものか。

人類史に刻まれながらもサーヴァントとして呼び出された英霊たちの血――合計七騎の強大な魂を受けて稼動する奇跡の装置の正体を、既に、男は見抜いていた。マスターならぬ真の主人として仕える少女に解答を授けられた訳ではない。自らで予測し、解析し、隠された真実へと辿たどり着いたのだった。

聖杯は、枢機卿や魔術協会が述べるような願望機ではない。

それでも。

男は立場を変えはしない。

最早、この身は大逆と呼べる裏切りを果たした。二度目はない。自己が何処に立っているのかを男は明確に規定していた。

「数多あまたの英雄が失われ、数多の涙が流された」

大聖杯たる暗黒を前にしながら、男は――キャスターは瞑目めいもくする。

多くが是に捧げられてしまった。

そして、今、更なる大量の生贄いけにえを聖杯ならざる地獄の釜かまは欲している。

「母であった女よ。貴方あなたの誇り高き英霊は死した」

弓の英霊アーチャーがこの光景を見れば、すぐさまにでもその宝具の神秘を露あらわにしたらろう。

だが、既に彼はいない。

残されたマスターは東京の夜に噎むせび泣くのみ。最早、何の力も在りはしない。

「毒であった女よ。貴方は正義の欠片に何を見み出いだすこともないのか」

狂の英霊バーサーカーとその主人であれば、やはり、すべてを捨ててでも大聖杯に立ち向かうだろう。

だが、既に彼らも死した。

主人の残骸であったものが哀れなる毒の娘にかき抱かれるばかり。

「人であった女よ。貴方の願いは未だ果たされない」

槍の英霊ランサーも、そう、愛する男シグルドの名を汚すことを許しはすまい。

だが、既に彼女も消えた。

神代であれば幾らかの可能性も有り得たが、二〇世紀の極東に大神の手は届かない。

「女たちよ。そして、己が願いがために末世へと降り立った英雄たちよ」

英雄たちは死した。

残されたのは女たちの涙ばかり。

最早、この東京なる都市は呪わしくも恐ろしき運命の刻ときを待つばかり。

「……未だ」

——世界を救わんとする真なりし英雄、未だ。

——此処へは至らず。

——ただ、都市を喰らう獣の胎動が暗黒を揺らすばかり。





「ありがとう」

「なに？」

「きみのお陰だ。僕は、僕が為なすべきことを漸うやく知った」

現在ではない時。

此処ではない場所で。

蒼銀そうぎんを纏まとう騎士は、いつか無垢むくの幼子へと言うだろう。

亡国を救わんとする王として、否。

聖杯を求めて戦う英霊として、否。

「時には、選ぶこと自体が、答えになることもある」

ただひとりの■■として。



「けれど」

暗黒の底で、男は顔を上げる。

視線は黒色に染め上げられた空間へと消えゆくばかりだが、その果てには、東京の地上が在る筈だった。二〇世紀末たる一九九一年にあって、およそ一千万を超す数多の人々が暮らす極東都市。夜には星々を地上へと降ろしたが如き光景を顕す、現代文明によって成し遂げられた消費の欲望さえをも手にした大いなる都。

其処にはいるのか？

未だ、絶望の果てたる此処に至らずとも？

「彼は征ゆくだろう」

男は言う。何らかの願いを込めて。

「邪悪のすべてを引き裂いて、きっと、この世界に」

男は言う。ひとつの想いを込めて。

「——正義を、顕すために」

## 後書き（※注意 ネタバレを含みます）

桜井 光

時に、聖杯を求め。

時に、自らの在り方に従って。

争い、奪い、殺し合いながら、十四の想いは徐々に数を減らしていく。

微笑みを遺す者もいる。涙を遺す者もいる――

本作は、ゲーム、コミック、アニメーション等の複数媒体で展開中の TYPE-MOON 作品『Fate/stay night』の原典小説を原案として形作られた、『Fate/Prototype』のスピンオフ小説です。一九九九年の東京を舞台として描かれる『Fate/Prototype』に対して、本作はその八年前――一九九一年の東京で繰り広げられた最初の聖杯戦争を、複数の“断片フラグメンツ”として紡ぐものです。

本巻で紡がれたのは、既に幾度かの登場を果たしながらも多くは語られることのなかった二騎、アーチャーとランサー、そして彼らのマスターにまつわる物語となります。

人を救い、悪逆を討ち払うという英雄の在り方に縁深い二騎が、西暦一九九一年の聖杯戦争の渦中に見み出いだしたものは何か。ある意味では両極端な結末を迎えたアーチャーとランサーですが、彼らはそれぞれに回答を得た筈です。

終章となる第五部『Knight of Fate』にて、それはひとつのかたちを得るでしょう。

余談を少し。

アーチャーことアーラシュ・カマンガーについて、原典に相当する史料については残念ながら未訳が多く、日本ではあまり知られていなかった英雄ですが、今回、森瀬繚さんの協力を戴くことで詳細な史料調査を行うことが叶いました。勿論、本作に於いては物語としてアレンジを加えていますが、アーラシュという英雄の人的魅力は豊かで、確かなものです。原典関係もどこかでご紹介する機会があると嬉しいです。

次に、ランサーの永遠の恋人ことシグルドについて。シグルドの設定作成者はなんと東出祐一郎さんです！ 東出さんからは、シグルドとランサーの出会いのシーンについて

でも多くのアイデアを戴きました。特にシグルドが何を考え、何を抱いていたか等——。

大英雄シグルド、今後どこかでお披露目される機会もあるかと思います。あるといいな、いいよね、と二日に一回は東出さんと一緒に唸っています。

ここからは謝辞を。

奈須きのこさま、武内崇さま。引き続いてのご監修およびアドバイス、ありがとうございます。特に奈須さまからはアーラシュについて、武内さまからはブリュンヒルデ（そしてワルキューレという存在そのもの）について、多くのご助言を戴きました。

中原さま。本巻に置いても美しさと儚さを描き出して戴きました。更には、強く生命力を感じる絵を数多く戴いたような気がしてなりません。ありがとうございます。

改めて、森瀬繚さま。アーチャーとランサーにまつわる本格的な史料調査とレポート作成、本当に素晴らしいものでした。あのレポートはそのまま本にできそうですね——

三田誠さま。魔術関連のご相談に乗って戴き、ありがとうございました。

東出祐一郎さま、成田良悟さま。いつもありがとうございます。

デザイナーのWINFANWORKSさま、平野清之さま、そして月刊コンプティークの小山さまと編集部・営業部の皆さま。ありがとうございました。次巻もどうかよろしく願いいたします。

そして、この物語を楽しんで下さるすべての方々に、幾万の感謝を。

それでは——次の断片で。

イラスト／中原

装丁／WINFANWORKS

本文デザイン／平野清之



# 次巻予告

「奇跡を起こす、願いを叶える……  
そんな素敵な魔術なら、  
もっと平和的な儀式でいいと思わない？」

「なあ、騎士の王。

輝きの剣を栄光のままに振るう男よ

——お前は、聖杯に何を願う？」

「ありがとう、魔術師。私は、既に私の身の程を知った。  
真の充足を……既に、私は得ることができた」

「これが聖杯よ。

絶対にあなたの願いを  
叶えてあげる！」

「生まれてきなさい、

可愛いビースト！」

「何故、お前がここにいる。セイバー

愛歌はどうした」

ついに満たされる聖杯、そのとき愛歌は、セイバーは——。  
月刊コンプティーク 2016 年 5 月号 (4 月 9 日発売) にて連載開始予定!

第五部を  
収録する

## 最終第5巻、2016年発売予定!

# Fate フェイト/Prototype プロトタイプ 蒼そう銀ぎんのフラグメンツ 4

文／桜さくら井い 光ひかる

イラスト／中なか原はら

原作／TYPE タイプ-MOON ムーン

角川  
 文庫

平成 28 年 3 月 10 日発行

(C) Hikaru SAKURAI 2016

(C) NAKAHARA 2016

(C) TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

単行本コミックス『Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ (4)』

平成 28 年 3 月 10 日初版発行

発行者 青柳昌行

発行 株式会社 KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3

電話 0570-002-301 (カスタマーサポート・ナビダイヤル)

受付時間 9:00～17:00 (土日 祝日 年末年始を除く)

<http://www.kadokawa.co.jp/>



BOOK★WALKER